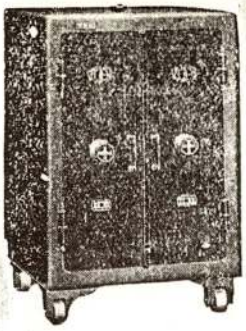
大正九年十月十四日（第三種郵便物認可）
大正十五年二月一日発行（毎月一回一日発行）

建築と社會

（第九輯第二號）

第九輯
第二號

日本建築協會
大正十五年二月一日



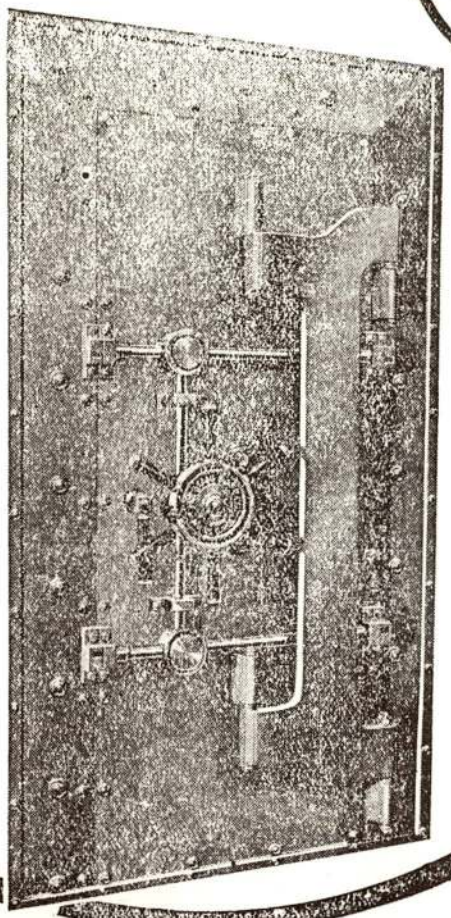
OTANI SAFE CO.



本邦金庫界之權威

大谷製金庫室鉄扉

舶來型クランク式クラインダー仕上



最近之御用命先

横濱正金銀行大阪支店殿
日本勸業銀行大阪支店殿
株式會社大林組本店殿
株式會社大阪ビルデイング殿
日本勸業銀行綾部支店殿

大谷金庫店

東京 新富町
京都 松原通
大阪 淀屋橋
神戸 楠町六

NB

日米板硝子株式會社

本　社　大阪市西區阿波堀通一丁目
工　場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）
大阪販賣店　本　社　內
東京販賣店　東京市丸ノ內ビルディング七階
九州販賣店　門司市大毎ビルディング三階

製品解說

製造方法　世界最新コールボーン式自動連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

特徴　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等ニシテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ虞少シ

厚味　二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等の高級建築及シヨウウインドウ用トシテ最適品ナリ

三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ賞用セラル

加工品　摺　結霜　春霞

和洋建築窓、家具等ニ使用シテ頗ル優美ナリ

{口繪}

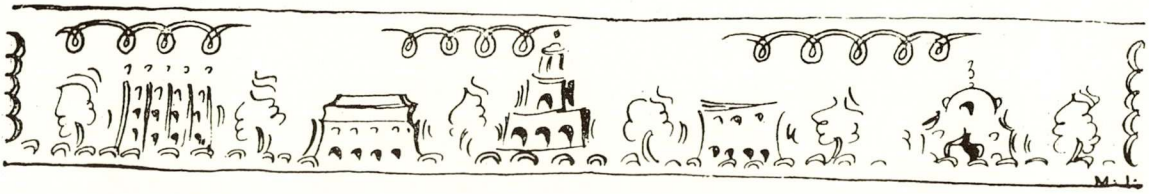
中田邸

玄關
客間
書齋
食堂
一階ホール
東側及南側正面圖
階下平面圖
階上及屋階平面圖

{中挿}

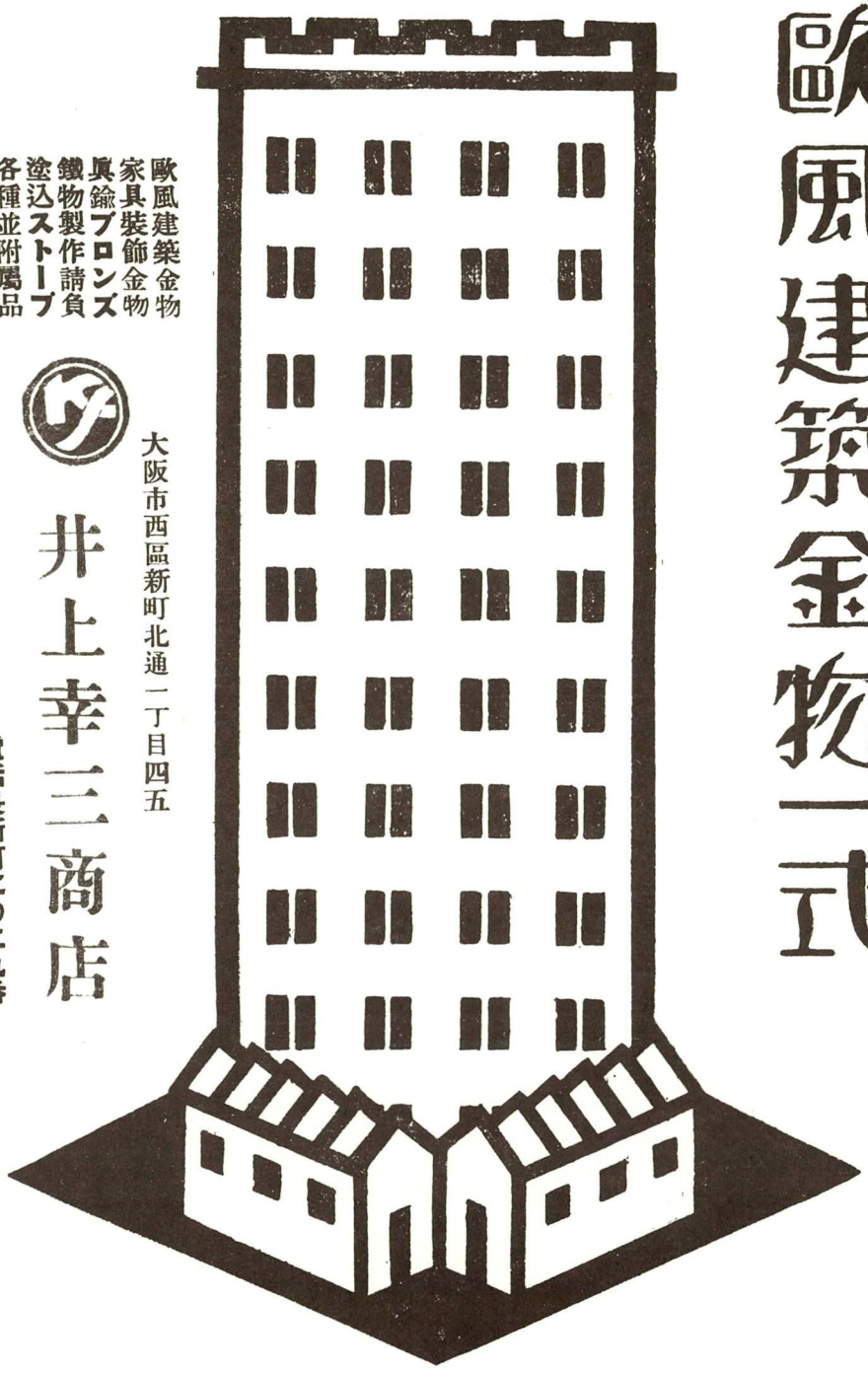
◇人間の藝術味……（一、二）　三浦文學博士
◇緣の下の力持ち……（一一三）　武田工學博士
◇涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり……
◇販賣能率を增す商店建築……

▲河水清……（一）
▲雜誌の雜誌……（二）
▲支那古代の民家に就いて……藤田元春（三）
▲土地區劃整理の施行と特種銀行法改正の必要……岡崎早太郎（八）
▲都市生活の動的考察……宇治伊之助（三）
▲飛鳥時代の寺院建築……岸熊吉（三）



▲大正前期之建築……增山新平（二九）
▲白色ペイント製造の材料……細木松之介（四〇）
▲妙喜庵と寶寺……池田谷久吉（四四）
▲都市觀念の訂正……小野田秀作（四八）
▲劇の民衆化……中尾保（五五）
▲創作　ぬかるみ……文の里人（五七）
▲俳壇　霞門松……溪舟選（六五）
▲俳話　再び讀者たちに……齋藤溪舟（六六）
▲主要建築材料値段……（六七）
▲日本建築協會々報……

歐風建築金物一式

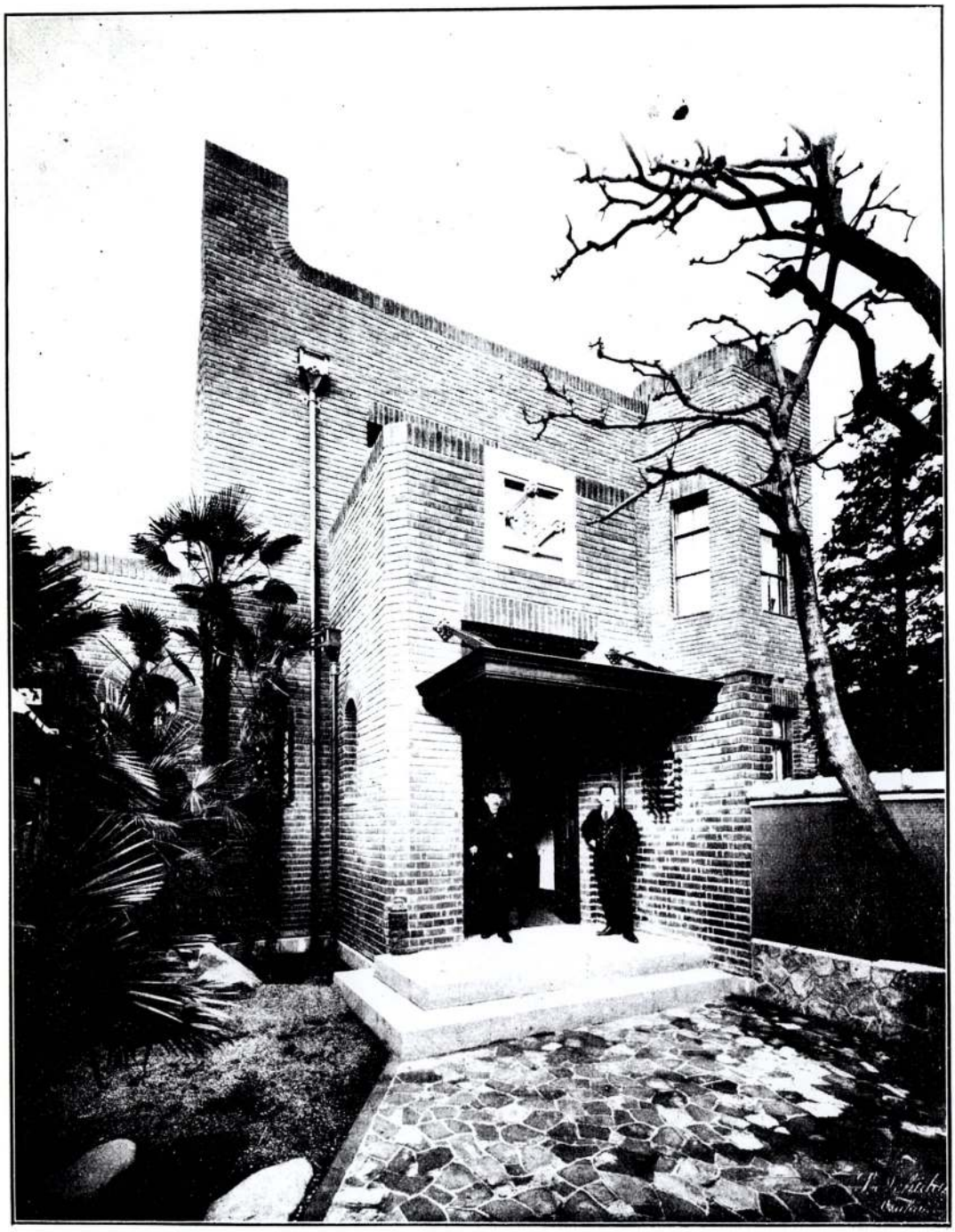


歐風建築金物
家具裝飾金物
眞鍮ブロンズ
鐵物製作請負
塗込ストーブ
各種並附屬品
長州風呂釜類

大阪市西區新町北通一丁目四五

井上幸三商店

電話長新町二〇二九番
振替大阪七二八三三番
電略（井ウエ）又ハ（井ウヱ）



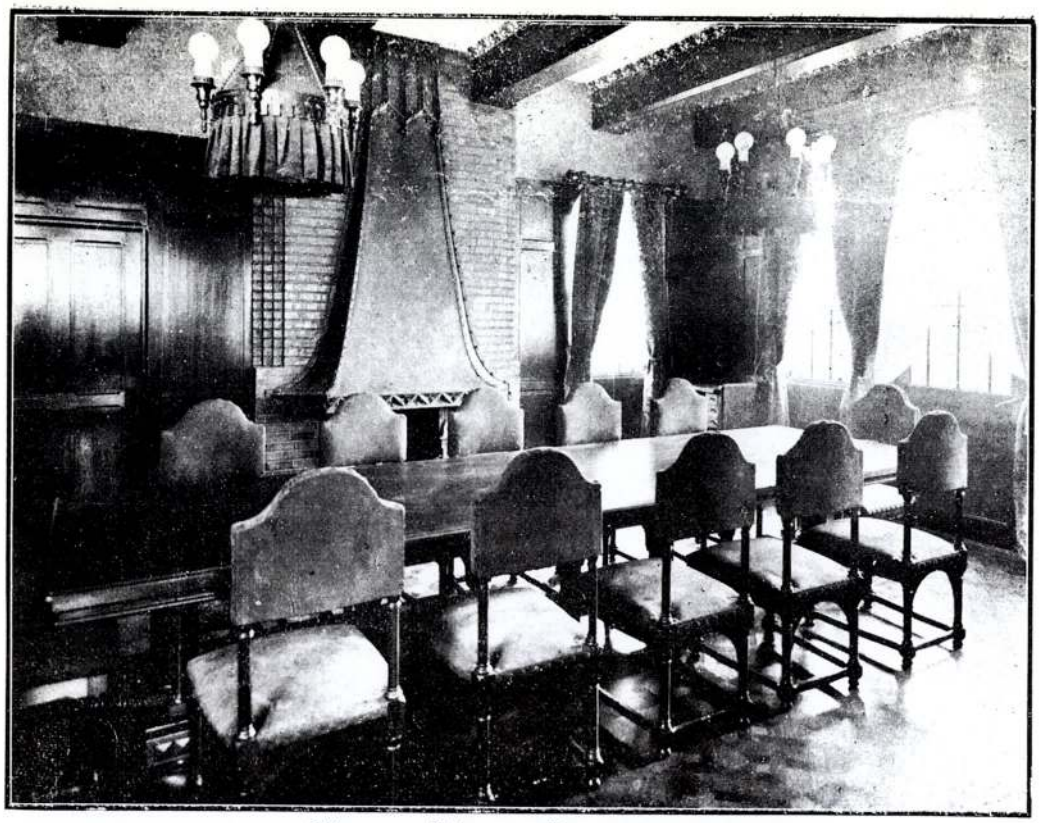
新築成れる中田邸・所在地大阪市東區島町一丁目
住友合資會社工作部建築課設計・大林組施工



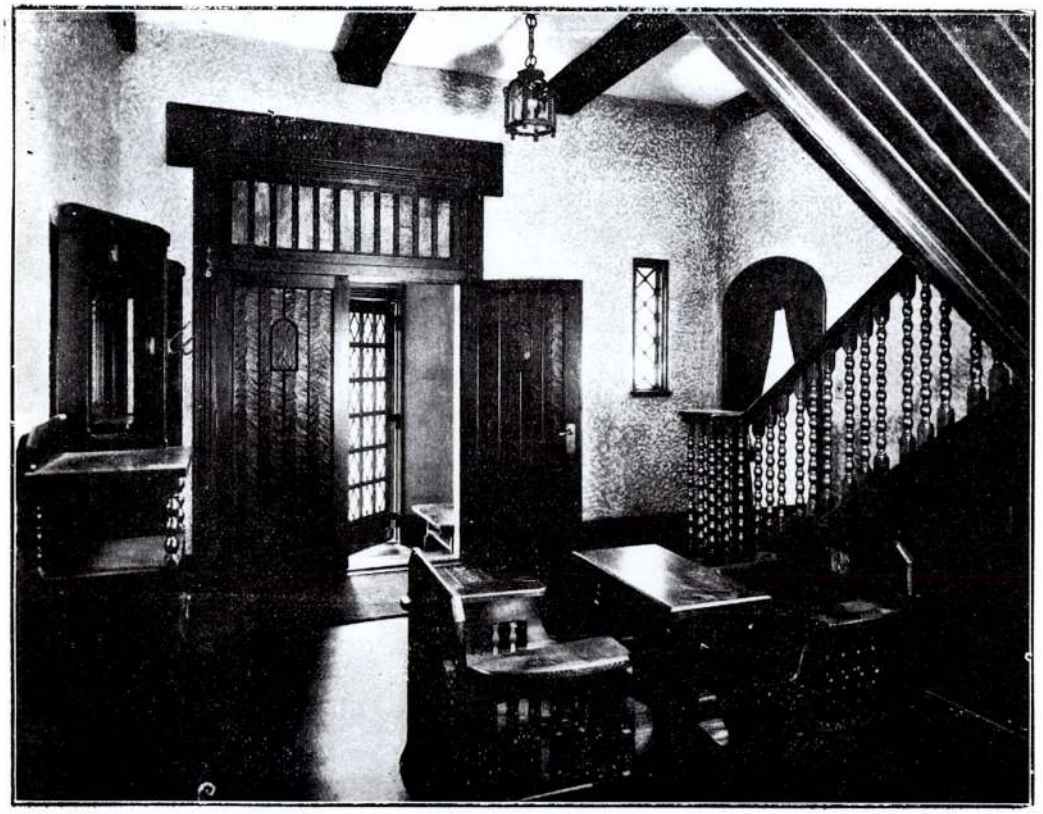
中邸同「客間」



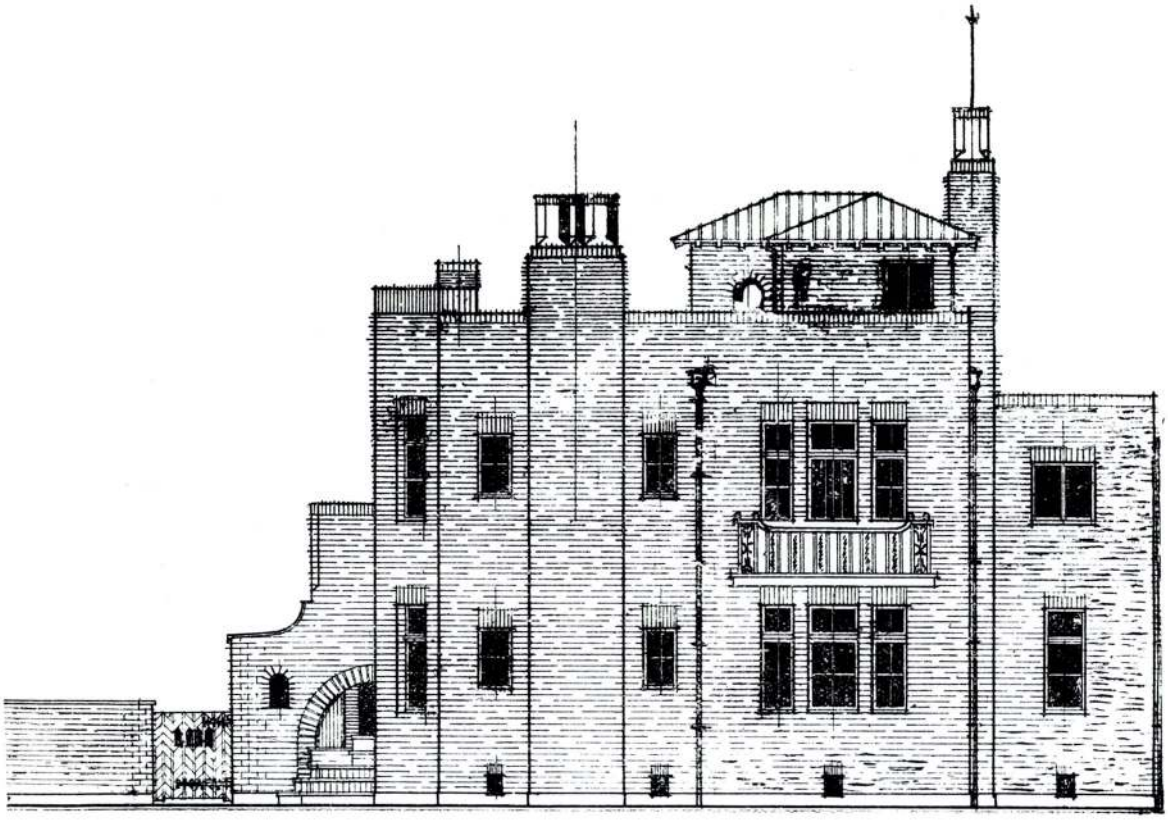
同上「齋書」



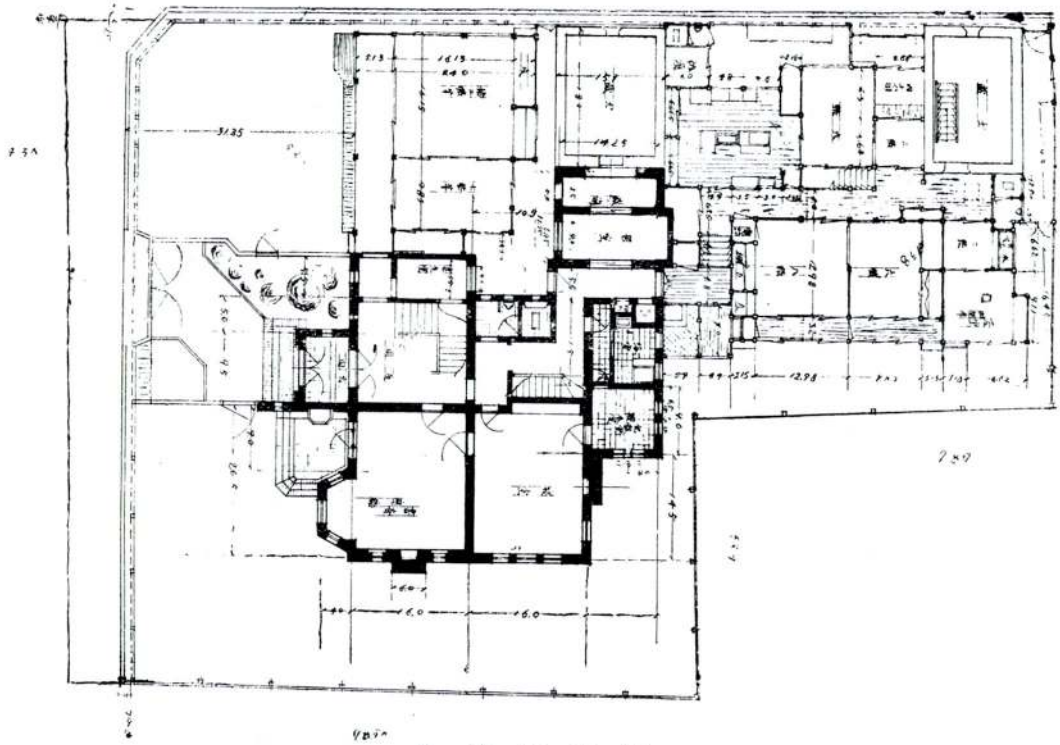
中田邸「食堂」



中田邸一階「ホール」



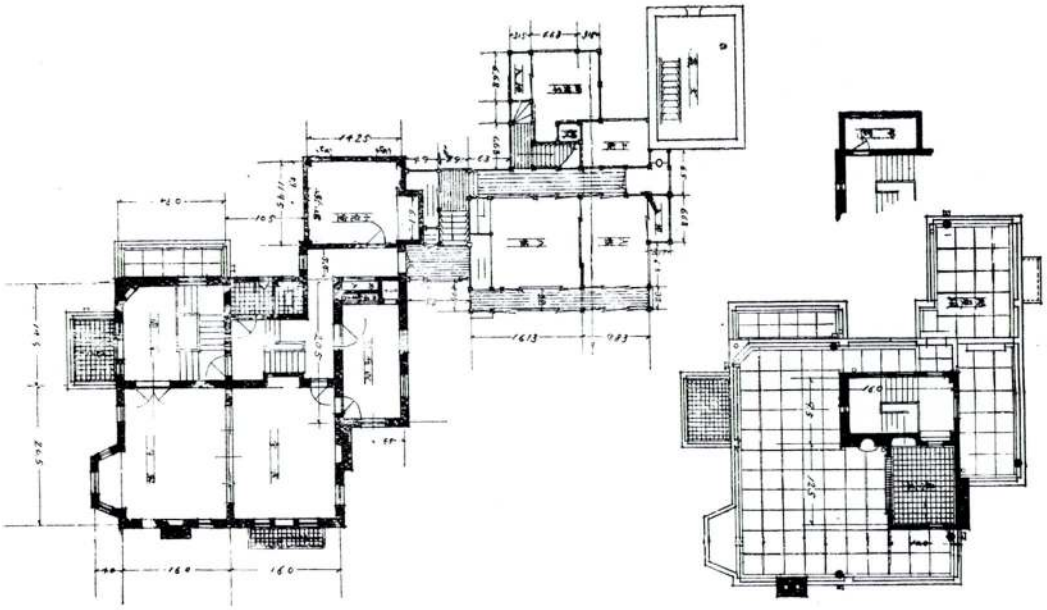
中田邸東側正面



階下平面圖



中田邸南側正面



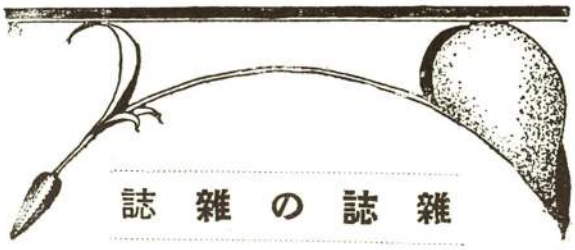
屋階及上階平面圖



河流は生命を産み、育み、進めた。恒は印度の文明を産んだ。チグリス（TIGRIS）ユーフラト（EUPURAES）の流域は、埃及メソポタミア（MESOPOTAMIA）の文明を創つた。史家は文明の發祥を洋たる流れに求めた。

水が捲へた文明の起源をしてナイル河のと、アドリア河（今のアドリア海）と紅河（今の紅海）の注ぐレヴアンテーン湖（LEVANTINE）の周圍であつたらしいと我等に敎へた。文明の華は紀元前四千年燦爛たる彩光を放つた。その

清流は埃及メソポタミア、支那印度に、麗雄容な多くの都市を産んだ。絶間ない太陽の光と水の潤ひは埃及に豐富な煉瓦材と可鑿の石材建築材料を産んだ。斯くて水は建築文明を創り出したのである（郊邨）



雜誌の雜誌

◇神社建築と樣式構造

神社の建築は前述の理由によつて、古式の樣式でなければならぬといふことが忽ち明瞭に解ること、思ひます。何か別に新らしい樣式を一つ考へ出そうといふやうなことは、私に云はせれば大いなる不心得で、それは不可。それは建築家或は藝術家が一種の自分のなぐさみ、遊戲的好奇的觀念からやる事でそれはいけないと思ふ。元來樣式なるものは一時の出來心で出來るものでないどうして建築の樣式が出來るかと云へばそれは長い經過の間に、知らず〳〵に出來るもので、社會の要望によつて、知らず〳〵の間に出來て來るものであります。或る物好な奴が、何か變なものを作つて見やうと思つて、やつて見て、それで長く傳はる建築の樣式が出來るものではないのであります。

でありますから、神社の精神的理想から云ひまして、どうしても古式によることが適當であります（「朝鮮と建築」神社建築に對する考察）

◇「必要」の精神

幻想、氣まぐれ、想像、狂氣沙汰、これが新しい建築。だがさう早合點をしてはいけないもつと近寄つて觀るがよい。「必要」の精はその神秘の強い手で是等の形相を閙まへたのだ。いかにも結晶學の幻術目を喜ばす爲の、そして好んで新いものを創り出したがる昏氣樓と幻影乃ちこの博覽會。實際によく觀るがよい。實驗室の、工場の、病院の、育兒院の建築。防塵も掃除も滑毒も容易に出來る。鐵の、硝子の、耐火混凝土の賢明な極めて賢明な建築。人は、平常よりも尚のこと、危險から、病氣から、疲勞から、悲哀から免れたいと思つてゐる。ちよつとの間に、この硝子張りの食堂はすれば施工室になりもする。極めて明るく清らかなこの廣間は、すればアトリエになりもする。華麗な此プウドアは、すれば事務室になりもする。到る處に、恐らく無意識に、しかし確實に仕事の方則が、日々の課業に支配される世の規準が、贅澤と氣まぐれとのパラドクスの蔭に認められる。到るところに、學者や勞働者や思想家の影が近代生活の主潮的表現を營んでゐる（「建築新潮」萬國近代裝飾美術博覽會の諸建築）

◇此の悲しむべき事實

「建築は强固で實用的で形の美しい結果にならればならない」といふ考へは西紀前十六世紀頃既にローマの建築家によつて書かれて居るところであるから、夫を今更の樣に建築とは何ぞやと口に泡を立て、云ふ力を入れる程の問題ではないと云ふ人があるかもしれないが、建築に於ける美の問題を唯一個人の小さな趣味として何等價値を認めない態度や或は建築の美を强固や實用に隨伴して存在すると云ふやうな構造則美の建築論が一部に古來建築家の間に稱道されてゐるとしたら、惣うした事に就いての斷片的な感想でも之を發表する事は無意義でないと云ふ此の悲しむべき事實を讀者は何んと考へるであらうか。（「建築世界」建築雜感）

◇法の逆用

住宅問題はいろんな意味で考察されうる。地代の問題なぞも關聯しないとは云へない。略ぼ同じ地域でありながら、土地所有者により地代に著しい高下の差異があつたり、權利金があつたりなかつたりするのは不公正である。いくら需給の經濟原理がそれの決定に作用するとは云へひど過ぎる。敷金の問題なぞも直接の住宅問題でなくとも、間接のものである。借家法案が借家人の立退期間を六ケ月に規定すると、それを口實にして敷金を六ケ月にしたなどは、法の逆用である（「住宅」住宅問題の斷面觀）

◇江戸風の建築

ぬり屋造りといふのが、德川時代にあつた。それは耐火的な建物だつたらしい。同じぬり屋（コンクリートも一種のぬり屋と見て差支へあるまい）でもこの時代のものが日本趣味があつてよかつた樣に思ふ。自分は、この造りの本物は見たことはないが、それらしい想像の殘る家が一軒、飯倉一丁目の電車道の附近にある。それは紙と茶を賣る店だつたと記憶する。純日本風で、黑い漆喰か何かはわからないが、とに角、黑く塗つた家で、店頭にはセピアの半ノレンをかけて、番頭は、チヨン曲げを結はないけれど角帶に前垂で火鉢を圍んですわつてゐるのが電車の中から見える。

讀者諸君の中で、そこを通る人があつたら氣をつけて見給へ、食祿を食んだ時代がしのばれる。（「建築畫報」すたれ行く江戸風の建築）

◇都　人

都會で曲りなりにでも暮していける人間は餘程幸福だと思ふ質朴で正直で柔順な田舍人は本當に可愛想にさへ思はれる。交錯する車馬の騷音に先づ最初の度膽を拔かれた彼等デパートに驚歎の氣持を味はふ彼等、盛り場へ來ては、不景氣を他所に絕へ樣ともせぬ人の流れ、都會は全く彼等にとつて文明の綾である。十燭の下新聞紙によつて僅かに知る社會の事象、寢にあたつても尚ほ風雨を氣遣ふ彼等彼等は贅澤を知らない。贅澤を恰も罪惡の樣に恐れてゐる。彼等は矢張り文明人としての生を不平なく蝕みつゝあるのであらうか。春秋の筆法人生僅か五十年也と云ふ、あゝ都人よ我々は本當に感謝しなくてはならない（「都人」都人）

◇生活の理想によつて築かれたもの

貧しくともあれ、我等の生活はつねに清く、正しく、愉快でありたく、家はつねに生活の理想に依つて築かれたものであつて欲しい。これがためには我等の生活なり、家なりが仲よく手を握り合はされば成らないのは勿論のこと、それと同時に我々が金に飽かされた生活を、金に飽かされた家を欲するよりも、我々の趣味と知識からなる生活を、それに依つて組立てられた家を理想とし、信條とせねばならないと思ふ。繰り返して云ふ「善き生活は善き家をデザインする」と。（「國際建築時論」生活、美、科學、經濟）



支那古代の民家に就いて

藤田元春

支那の民衆の中二つの系統があります、その一つは穴居一つは木造或は草屋であります、之れ等の間取りだけについてそれが日本にどういふ影響を爲してゐるかといふ事を申さうと思ひます。『支那古代の民家について』といふ題でありますが實は日本の民家が支那の影響を受けてゐるといふ事を考へて日本の民家について御話するのであります。

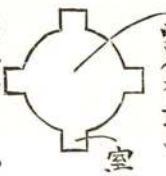
民家と申しますれば餘程制限を受けたものでありましてずつと大昔は制限はありますまいが民家といふ言葉があるためには確かに制限があつて王侯貴族の住宅のやうに宏壯な建物ではない柱に模様をつけるとか或ひは彫刻をするとかいふ事は民家には餘程前からありません人民の家には粗末なものでよいと考へられて居つたのであります。柱の上の横木に模様を彫りつけるといふやうな事は宗廟の制度であるといふ事を孔子も申して居ります、韓誌を見ると綺麗な着物、色模様の着物を着る事はならんといふやうな法律のやうなものを作つたといふ事が出てゐる、さういふ風で人民の建てる家にも制限が加へられてあつたと見えます。

當時の書物をいろ〳〵見まするとと人民の建てる家には制限のあつた事はよく判りますがそれがどういふ制限であつたかといふ事を容易く見出す事は出來ませんが史記を見まするとと衣服居室には上下の分があるといふ事が明瞭に出て居りますそれが支那の政治家に取つては治國平天下の要諦であつて餘りに人民が制を越へた生活をする事は結局人民の不幸を招くといふので支邦の爲政者は一定の秩序を保つて人民を制限する衣服を制限する住居を制限するといふわけで之れが唐代になるといふと明瞭に衣服の制度も出來るし家の建方、大きさまで制限しました即ち五間九架それから五間七架、それから下になると三間五架、そして一般庶民は三間四架といふ事に制限されて居ります此の外に門を許して居ります、門は一門兩架といふ事になつて居る、間と架といふ事についてはいろ

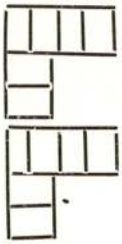
〳〵學者達ちも言つて居られますが間といふのはどうしても間口で架といふのは横木であると考へられるのでありますが間の方が入口であるとすれば例へば三間五架といへば三間の間口があつて柱が三本立つてゐる、奥へは五本柱が立つてゐるだから長方形の家であります。之れは三間五面とも云ひます入口はその長方形の狭い方から入つたのでありますところが宋代になると趣きを變へて長方形の横から――廣い方から入つたやうな形になります（  ）だから間といふ字と架といふ字の關係はどちらでも――入口――よかつたのではなからうかと考へます。唐制によりますと人民の家といふものは三間四架といふ事に限つて居ります、日本語で云へば三間四面であります、面なり間なりの距離は一定して居りません、一間十二尺の事もあれば六尺の場合もある又七尺、八尺の場合もあるから三間四面と云つても一寸判りかねますが併し人民であるが故に立派な財力があるわけでないから最後に落つくところに落付きまして一間と云へば即ち六尺、疊一疊だらうと考へるのであります。假りに唐代の三間といふ言葉を日本の吾々今使つてゐる一間と同じ長さであるとするならば三間四面といふものは非常に小さいものとなる、それ以上の大きな家に住む事は許されなかつたのであります。此の唐の制度はそのまゝ宋時代に參つて庶民は三間五架といふ事になつて居ります、一寸一段上つて唐の三間四架から三間五架になつたのであります、明の時代にも三間五架といふ事を許して居ります。言ひ換れば唐の初めに極めた法令がずつと宋、元、明に傳はり三間四面といふ事が餘程支那全體を支配して居つたと考へるのであります。併しながら今申す通り當時の三間といふのは日本の今の三間とは違ふのではないかといふ事に對しては例の三十三間堂が實際は六十六間程あるのに見ても一間は十二尺であつたのであります、間といふのは柱と柱の間をいふので、架といふのも七尺を以て一架としなければならぬやうな場所もございます、餘程古いところでは柱と柱の間は十二尺になる場合がございます、出雲の大社も二間二面であるが一間の間は十一尺九寸三分といふ事になつて居ります之も恐らく十二尺であつたらうと思ひます。十二尺を以て一間とするといふ事は日本でも餘程古くから傳つて居つたものと考へます。徳川時代になると間と云へば六尺五寸と極つて參りました徳川時代寛文八年に武家綱領が出て居るその中に『梁は三間を許す桁ゆきは心次第たるべし、節木造より上の結構無用たるべし云々』といふ嚴制が出てゐます、事實三間梁以上の家を建てるのは餘程注意をして居つたが廂は幾らでも構はぬといふ事であるから御寺の屋根等は不思議に化粧垂木が繼ぎ足して別な屋根が出てゐる之れは徳川時代の法令を免れるためで兩側にさういふものを出して申し開きをしたのでありますが百姓家は殆んど三間梁が中心になつてそれに半間の廂を出して初めて三間四面になつてゐるのであります、即ち民家は三間半以上のものを建てる事は出來なかつたのであります。又享保十二年酉年三月の御上文として新造の家は梁間二間半廂一間道筋へは一寸も造り出すべからず又家造りの圖面を差出すべし、四月以後據りどころなく造作するものは訴へ出でゝ指圖を待つべしといふやうな意味の法令が出て居ります之れで三間半以上の家は建てる事は出來なかつたといふ事が判るのであります。

あります。此の制限を受けて出來た家は京都附近の民家に甚だ多いのであります即ち支那の唐代の法令が非常に深く影響して居るといふ事を認めるのであります。然らばその支那の民家といふものゝ間取りといふものは日本にどれ程影響してゐるであらうかといふ事を次に考へて見たいと思ひます。

支那では古代の民家といふものは穴居、野處の二つであるといふ事が古書で判ります、何時頃穴居、野處をして居つたかといふ事は判然とはわかりませんが確か周の初めなどはさうであつたと思ひます。周の初めに陶復陶穴いふ言葉が見えて居ります、陶穴といふのは恐らく穴居であつたらうと思ひます、『復』といふ字は平地に屋根を作つて住む事である『穴』といふのは縦に穴を開けて住んだものであるらしい、復、穴いづれも階上に穴を開けて光を取る・これを穴といふ之れを想像すれば穴居といふものは中央に穴があつてその四方へ室を作るのであります。



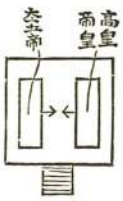
掛へるといふやり方は此の穴を掘つて家を つて進んだものと見ね非常に春秋時代になましして非常に大きな穴が出來て居りまして城から隧道になつてゐる又陷穽を作つて敵を陷入れるとかいろ〳〵のことがありますが大きな穴があつたもので柱の太さ二圍半即ち二抱へ半もある大きな柱が穴の中にあると出て居りますから非常に穴居が發達したものと思はれます又『宵室熏鼠塞向墐戸』といふ詩がありま冬になると松葉をくすべて鼠を追ひ出し北窓から寒い風が入るから北窓を塞いで戸を塗るといふ事でありますし之れによつて當時どんな生活をして居つたかおぼろげながら判るのであります。斯ういふ風に周人は餘程早くから穴居して居つたのでありますがこの穴居の制度が一方においては城になり、敵を攻める時は陷穽となりしたやうな大きなものが出來ると同時に一方においてはそれを地上に應用しました。東西南北に室を取りまして眞中に中霤と申しまして昔の光り取りを作りましたその中霤には神樣を祭るといふ形式は餘程現代まで影響して居るのであります、只今の支那邊りへ參りますと先づ門があつて門を入ると一寸氣の利いた家は前房が立つてゐる、その横が廂房その奥が大房或ひは正房があります、そして中央が中霤でありますそして昔の穴居の風を傳へて居ると見ねまして各室々々皆獨立したところの役目を持つて居ります、或るものは男の室であり或るものは女の室である或る室は廂房であるといふやうに各室が各機能を有して居ります。朝鮮へ參りましても普通の立派な家であるといふと門があつてその門を入れば圖のやうに建物があつてその内で各室々が獨立してゐる機能



を持つてゐるのであります。斯ういふ種類の室が各獨立の機能を持つてゐるところの現在の支那もしくは朝鮮の民居が古い支那の穴居の習慣の殘つた一面であるとしか考へられんのであります、併しながら今申しました宵室熏鼠塞向墐戸の詩とは又違つて當時、夜は汝繩をなへ晝は汝茅を取つて屋根を揖けといふ意味の詩がありますして見れば穴居のみが昔の風ではなかつたと見ねます即ち當時既に木造、草木の民居があつた事を物語るのであります、史記には菜を並べて揖きましたところの蓁茨といふものが出て居ります板屋といふのもあります、此の蓁揖の家を建てましたところの一番最初は夏の禹帝が造りましたところの

明堂でございます。明堂の辭といふのを見ますると以て作り上に樓あり南より入るといふ事が書いてありますそして其處へ入るところの段がつけてある之れを昆倫といふとあります、恰度出雲の大社のやうな風で段があつて南の方から上るやうな御殿がその當時出來たのであらうといふ事が判ります、この家を建てるのに南向きに造るといふ事は之れは何時頃からであつたかといふ事を考へますと古いことは判りませんが鄙風によりますと定といふ北方の星を目度にして南北の方向を定めその上で家を建てたものである、天文學より考へたのであります、餘程古くから南北の方向を正した後家を建るといふことをして居つたと見えます。それならば南北の方向は昔から知つて居つたとすれば家の中はどういふ具合に出來て居つたか、南の方から入つて來たとして中ではどういふことになつて居つたらうかと云ふと武帝は『太一五帝明堂上座高皇帝皇對之』と云つてゐる、この文句によつて明堂上座に太一五帝を祀り高皇帝皇之れに對峙して祀つたものでこの御殿の中では圖のやうに神樣が二つ向ひ會つて祀つてあつたものと思ひます、このやうな同じ例が日本にないかと考へると出雲の大社でありますが出雲大社は南向きであつて南から上がつて行くやうになつてゐる、そして神樣は圖のやうに祀つてあるから横腹を拜む事になるのですがこの神座に對するところの上座が明けてあるところを見るとこの社に祀つてあるのは大國主命だけでなくもつと神樣よりも貴いお方がこの明いてゐるところにあるのではないかと思ひます、之は私の想像でありますがさういふ上座とか下座とかいふ間取りが大社の中にあるのではないかと思ふもう一つ私の憶斷では『昆倫』といふものは當時果して『コンロン』と發音したであらうかといふ事である、『天』『傳』『連』といふやうな字は『テ』『デ』『レ』といふ音によく使ひます『ウン』といふものを除いて發音する事がしば〳〵あります、だからこの『昆倫』といふもの『コロ』と發音出來ます、果してさうであつたとすれば日本の神樣を『ホコラ』といひますが或ひは『ホコロ』と『コロ』とは何等か關係はありはせんかと思ふのであります。

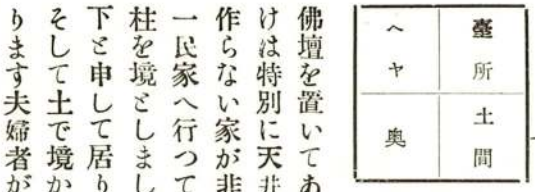




以上のことは神社のやうなものばかりで人民の住んだ家ではないのでありますが、併し人民の住んだ場所にも矢張り同じやうな間の取り方があつたのであらうと思ふのであります、それで一方民居の間取を見るといふと爾雅釋宮に斯う出てゐる、『東南隅を窔といひ東北隅を宦といひ西北隅を屋漏といひ西南隅を奧といふ』とある、窔は入口であります、その時分の家は東から入つたものであります、そして入つたところが窔その突き當りが奧、之れは非常に貴い尊者のゐるところとなつてゐます一番上座であります賓客の室であります次が屋漏であることは即ち部屋であります宦といふのは食堂である。此の四つの間取りが東洋の家の間取りの一基礎になつたのではないかと私は解釋するのであります、この古代の支那の間取が今日日本に尙傳はつてゐるのではないか、と思ふのであります。日本では穴居の生活が發達しなかつたから中央に明り取りを取るやうな各室獨立の機能を有



する分居的の家屋は發達しないで綜合的の間取を中心に取つたのであります、四つの間取の家とすれば眞中に大黒柱があります、入口から入つたところは土間である臺所は殆ど例外なしに板間があるこの板間で飯を喰つたものであります京都でも古い習慣の家は必ず板間で飯を喰ふ主人は上から板間へ來て飯を喰ふ下男下女は下から板間へ來て飯を喰ふ今も尚京都でも奈良でも臺所と稱するところは皆板間を中心として出來てゐます、奥といふのは佛壇を置いてあつたりしてお客さんの室でありますこの奥だけは特別に天井の作つてある家があるがその他は全部天井を作らない家が非常に多いのであります。越前丹生郡天津村の一民家へ行つて見ますと入つたところは土間でありまして大黒柱を境としまして上をおいへの上といひ、下の方をおいへの下と申して居りましておいへの下は不思議に床がありませんそして土で境かしてある、この土間に蓆を布いて寢るのであります夫婦者がお寺の坊主でなければ部屋へは入りません生活は全部臺所の土間でするのであります、土間は床からは一尺五寸位低くなつて居つて點中に爐がある、この爐の周圍に揉み藁を布いてその上へ蓆を置いて生活する、こゝが生活の根據であります、之れは大和へ行つても八瀬へ行つても同じ事が見られます大和高市郡佐越村の庄屋さんで今は村の區長を爲てゐる家であるますが之れも今いふやうな構造になつて居ります土間では寢はしませんが先づ生活の根據であつて飯もこの板間へ出て來て喰ふのであります。



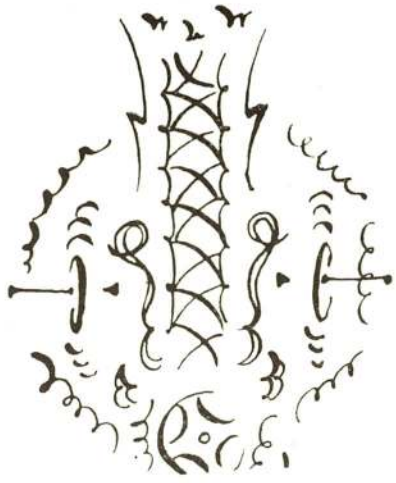
兎に角大黒柱を中心とした四間が中心であつて他の構造は附け足りである斯う考へると日本の國の民家は古い支那の形式がそのまゝ傳つてゐると思ふのであります、それからこの四つの間を縱に間取りをして庭を細長く通庭にしたものもあります、之れは京都の家の一般の形式でございます。つまり先に申しました、



この圖面のやうな基本から變化されたものであります、



この形式が今尚京都に殘つて居るのであります之れは片側住ひと名づけました。斯ういふ風で凡ゆる日本の間取といふものが大黒柱を中心にする中央の四間を根本とする古風を一千年、二千年の後にまで傳つてゐると考へるのであります。甚だ羊頭を掲げて狗肉を賣つたやうなわけでありますが今は之れで擱きます。（講演領要）



土地區劃整理の施行と特種銀行法改正の必要

岡崎早太郎

一　沿革と現行制度

土地區劃整理の制度としては夙に土地區劃改良に關する法律があつた明治三十年法律第三十九號が夫れだ。同法律は同一市町村内の土地所有者の全部又は一部が土地改良の爲共同して其の土地の區劃形狀を變更するとき又は改良地區内の土地所有者三分の二以上の同意を以て土地の區劃形狀を變更せむとするに方り簡易なる手續方式に依り整理を行ひ得べく定めた制度であつた。然も同法が適用せられた範圍は主として農業地に屬し都市の宅地を造成し改良する事業の爲に活用した多くの實例あるを知らない。蓋し當時東京市には東京市區改正條例が施行せられ道路、河川、公園等の改良事業は可なり盛に行はれあつたに拘らず市の内外に亘り土地の區劃形狀を整理し依て根本的に都市の改良を企つる計畫は絕へて考へられた形跡がない。東京が既に斯の如き狀態なれば京都、大阪以下の市に其の企て無き亦奇とするに足らない。是れ同法が土地の農業上の利用增進を目的として出現した耕地整理法と交代し短き命數を以て影を沒した所以ではあるまい乎。然るに其の後幾年ならずして勃然として都市膨脹の趨勢を馴致し將來都市化すべき地域に於ける土地の區劃形狀を改良し、將來に於ける都市改良費の輕減に備ふる必要を痛感せしむるに至つた。然も時既に遲く所謂土地區劃改良に關する法律の廢止に因り之を施行すべく依據する法制が無い。當時耕地整理の施行と稱して巧に土地の區劃整理を行ひ多少焦眉の急に奬順した事例はある。横濱市岡野町の市街割が夫れだ。名古屋市四周の耕地整理も亦夫れだ。神戸市東西の區劃改良亦その一である。其の他斯る方法に依り一時の便宜を贏ち得たる都市なきに非ずと雖も所謂耕地整理は依然として農業地を目的とするに對し一般都市の要求は宅地の造成整理なるが故に屢々甚しき不便に遭遇し百方策を繞らすと雖も遂に之を避く

るの途がない。茲に於て膨脹發展の著しき狀態に在つた都市は一齊に立ちて市區改正の施行と共に都市の郊外を開發すべく土地區劃整理を行ふ爲に必要とする法制の樹立を要求し所謂都市計畫運動を興すに至つた。都市計畫法が制定され土地區劃整理制度の復活を見たる實に其の產物に外ならないのである。然も土地區劃整理は都市計畫區域內の土地に限り主として耕地整理法の準用に依り之を行ふべき規定なれば事業の範圍亦左の概目以外に出づることは能きない。

一、土地の交換、分合、開墾、地目變換其の他區劃形質の變更、湖海の埋立、干拓若は道路、堤塘、畦畔、溝渠溜池等の變更、廢置又は之に伴ふ灌漑排水に關する設備若は工事

二、前號の事項施行の爲若は施行の結果必要なる工作物の設置其の他の設備又は其の維持管理

三、開墾又は湖海の埋立若は干拓に依る土地區劃整理に附隨して行ふ整理施行地の利用に關する必要なる工作物の設置其の他の施設

四、前三號の事項に關し必要あるとき國、府縣、市町村其の他公共團體の認許を得て行ふ營造物の管理

以上は耕地整理法の規定に準據した土地區劃整理事業の概目である若し此の概目の示す事業の總てを都市計畫區域の全部に亘りて行ふときは都市の交通、衞生、保安、經濟に關する施設の半ば以上を了すと謂ふも必ずしも誣言と謂ふことは能きまい。土地區劃整理事業の効果亦大ならずとせむ哉。

二　整理施行と其の費用

土地區劃整理の施行に依り從來亂雜を極はめたる既設都市の街廓及邸地を一定の形狀に整理し更に主要街路や運河や公園までも該事業の範圍內で新設又は擴築すべく現に事業執行中の例がある。關東震火災の犧牲となれる東京、横濱二市に行はれある特別都市計畫の施設が夫れだ。然れども其は一種の異例に屬し現に家屋その他建築物の充實せる他の都市に於て全市に普遍的に之を行はむとするも到底不可能事にして如何しても之が實施は未だ都市化せざる土地即ち所謂處女地域に行ふの外はあるまい。否都市他日の改良費を減省する方法として其の都市化せざるに先ち之を實施し以て他日の發展に對し豫め其の基準を示すは蓋し必須的事業の一にして都市計畫法が之が爲に特に其の條規を設けたる所以亦茲に存するのであらう。

土地區劃整理の施行が都市計畫の施設としての必要は然ること乍ら之が施行は獨り都市の將來を裨益するに止まらず寧ろ土地所有者及關係人等私人の利益に歸する場合が多きに居る。蓋し斯業の施行場所たる都市の場末若は郊外は都市そのものゝ膨脹發展に因り自ら著しく土地が增價する。この點に於て是等土地の所有者及關係人は莫大なる不勞利得者と謂はれて居る。然も建築物の敷地としては特に建築線の指定ある場合を除くの外は幅員九尺以上ある道路の境界線を以て建築線とし所謂建築線なき土地には建物の建築を許さないから其の增價及利得は或は眞の夫れで無い乎も知れない。然るに土地區劃整理の施行は道路に面せざる土地は一筆もなきに至らしむるから茲に創めて土地の全部が立派な建築敷地と化り且つ前面道路幅の廣きだけ土地の建築的利用價値を增進するの

であるから眞の土地增償亦斯業の實現が齎す効果と謂ふが至當かも知れない。土地區劃整理が都市の將來を裨益する施設たる點に於て行政廳の執行すべき都市計畫事業とするの可能なるに拘らず耕地整理法の準用に依り土地所有者及關係人を事業の主體たらしむべく私人若は組合の執行を本則とし僅に例外として土地所有者及關係人の負擔を以てする公共團體の執行を認めた我法制の根據亦茲に在りと見るべきではあるまい乎。

要するに土地區劃整理は都市計畫上から見ては勿論土地の經濟的利用上から見ても爲さねばならぬ事業である。然も之を斷行せむには其の土地の所有者及關係人は法令の命ずる所に依り可なり大なる負擔に任じなくてはなら無い。茲に於て發生する疑問は彼等土地所有者及關係人に其の負擔に任じ得る資力ありや否である。蓋し彼等は耕地整理の場合と等しく整理施行の要ありとは謂へ都市又は其の郊外に於て土地を所有し又は其の土地に關し所有權以外の權利を有する者なれば既に相當資產の持主なることは明瞭である。加之整理の施行に因り更に大なる利益に浴すべき受益者たるの關係に見るも事業に要する費用の負擔に任ずるに足る實力あることは又疑ふの餘地が無い。要するに今直に現金の支出が可能るか如何の問題に過ぎない。さり乍ら彼等にして假りに今直に資金支出の能力なしとせば如何。然も土地の現狀に鑑み之が整理の施行が緊急を要し其の施行を避くべからずとせば資金の調達に付ても亦一段の工夫がなくてはならぬ。何となれば事業の成否如何は一に懸て資金調達の能否に存するが故である。

三　特種銀行法の改正

土地區劃整理の施行に要する資金調達の方法に關し援用し得べき事例に耕地整理施行の爲に要する資金調達の方法がある。日本勸業銀行法農工銀行法及北海道拓殖銀行法に規定する貸付方法が夫れである。參考の爲左に揭載す

◎日本勸業銀行法

第十五條　日本勸業銀行は府縣、郡、市町村、其の他法律を以て組織せる公共團體に貸付を爲す場合に於て抵當を徵せざることを得。

耕地整理法に依り耕地整理を施行する場合に於て耕地整理組合若は其の聯合會より借用を申出たるとき又は共同施行者が連帶責任を以て借用を申出たるときは抵當を徵せずして定期償還貸付又は年賦償還貸付を爲すことを得。

產業組合、漁業組合、森林組合、畜產組合、住宅組合又は其の聯合會には抵當を徵せずして定期償還貸付若は年賦償還貸付を爲すことを得。

農工銀行の存在せざる府縣內に於ては十八以上の農業者、工業者又は漁業者申合せ連帶責任を以て借用を申出たるときは其の信用の確實なるものに限り五箇年以內に於て定期償還の方法に依り無抵當貸付を爲すことを得。

◎農工銀行法

第六條　農工銀行は左の事業を營むものとす。

一　五十箇年以內に於て年賦償還の方法に依り不動產を抵當として貸付を爲すこと。

二　拂込資本金及積立金總高に相當する金額を限り不動産を抵當として五箇年以内の定期償還貸付を爲すこと

三　郡市町村又は法律を以て組織せる公共團體に對し無抵當にて本條第一號第二號の貸付を爲すこと。

四　耕地整理法に依り耕地整理を施行する場合に於て耕地整理組合若は其の聯合會より借用を申出たるときは無抵當にて本條第一號、第二號の貸付を爲すこと。

五　十人以上の農業者、工業者又は漁業者申合せ連帶責任を以て借用を申出てたるときは其の借用の確實なるものに限り五箇年以内に於て定期償還の方法に依り無抵當貸付を爲すこと。

◎北海道拓殖銀行法

第八條　（前略）

耕地整理法に依り耕地整理を施行する場合に於て耕地整理組合若は其の聯合會より借用を申出たるとき又は共同施行者が連帶責任を以て借用を申出たるときは年賦若は定期償還の方法に依り無抵當貸付を爲すことを得。

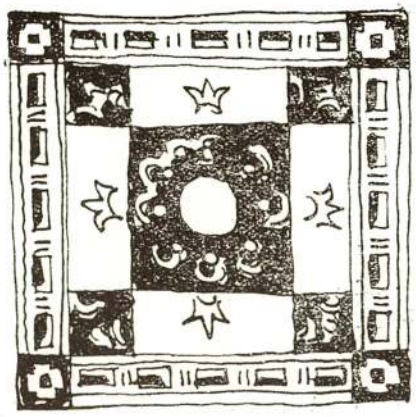
十人以上の農業者、工業者又は漁業者申合せ連帶責任を以て借用を申出たるときは其の信用の確實なるものに限り五箇年以内に於て定期償還の方法に依り無抵當貸付を爲すことを得。

（下略）

上記の法文は耕地整理施行に要する資金調達の方法に關する規定である。而して土地區劃整理は耕地整理と等しく其の法源は明治三十年法律第三十九號土地區劃改良に關する制度である。換言すれば土地區劃改良に關する法律が二箇に分裂され其の一は耕地整理法と爲りて明治四十二年法律第三十號を以て發布され他の一は大正八年法律第三十六號都市計畫法の一部として復活したまでゝある。即ちこの兩者は土地の用途と施行場所の關係に因り區分したるに止まり其の事業は異名同質たるを失はない。

斯る關係に於て其の一翼たり片輪たる事業の爲に資金調達の途を開きありとせば他方の夫れにも同樣の保護がなくてはならない。然も所謂特種銀行の業務は類推的解釋に依りて之が適用を許さず必ず法文の規定を要するが故に之に均霑する爲には是非共法律の改正を求めなくてはならない。若し土地區劃整理の制度が耕地整理法と同時に確定しありたらむには同一の惠澤に浴し得べく上記各法に具載せられたることは逆睹するに難からない。然るに彼は明治四十二年の制定に係り是は大正八年の公布なるが故に其の間早くも十餘年を輸し未だ以て所謂特種銀行法の惠澤に浴し得ざるは斯業の爲吾人が切に遺憾とする所である。今や都市計畫法及市街地建築物法の施行に伴ひ郊外地の區劃整理を行ふの頗る急を要するものがある。然も資金調達の方法としては耕地整理の夫れに均霑すべく法制の改正を求むる以外他に途なきを如何せむ。希くは我國都市の現在及將來に鑑み其の郊外に土地區劃整理を行はしむべく速に特殊銀行法を改正し耕地整理の場合と等しく事業資金融通の途を開かれむことを。

（大正十四年十一月二十九日稿）



都市生活の動的考察

——數字の物語る景氣と住宅問額（三）

宇治伊之助

第二節　人口及世帶數と景氣との關係

景氣の消長は人氣の集散從つて人口の增減とその間に相互因果の關係存すべきである、果して然るや否やを檢せむがために人口及世帶數の增減及資年供給力の三者につき對比表並に對照圖を作り之れによつて觀察することゝしやう

即ち對比表にありては各年の人口及世帶數の增加率とその總平均率とを比較しその正負の關係を同じく資金供給力のその總平均に對する正負關係と對比することにより又對照圖に於ては此等三者の各推移線を夫々の平均線との交叉關係を對照することによつて之が觀察を下すものである

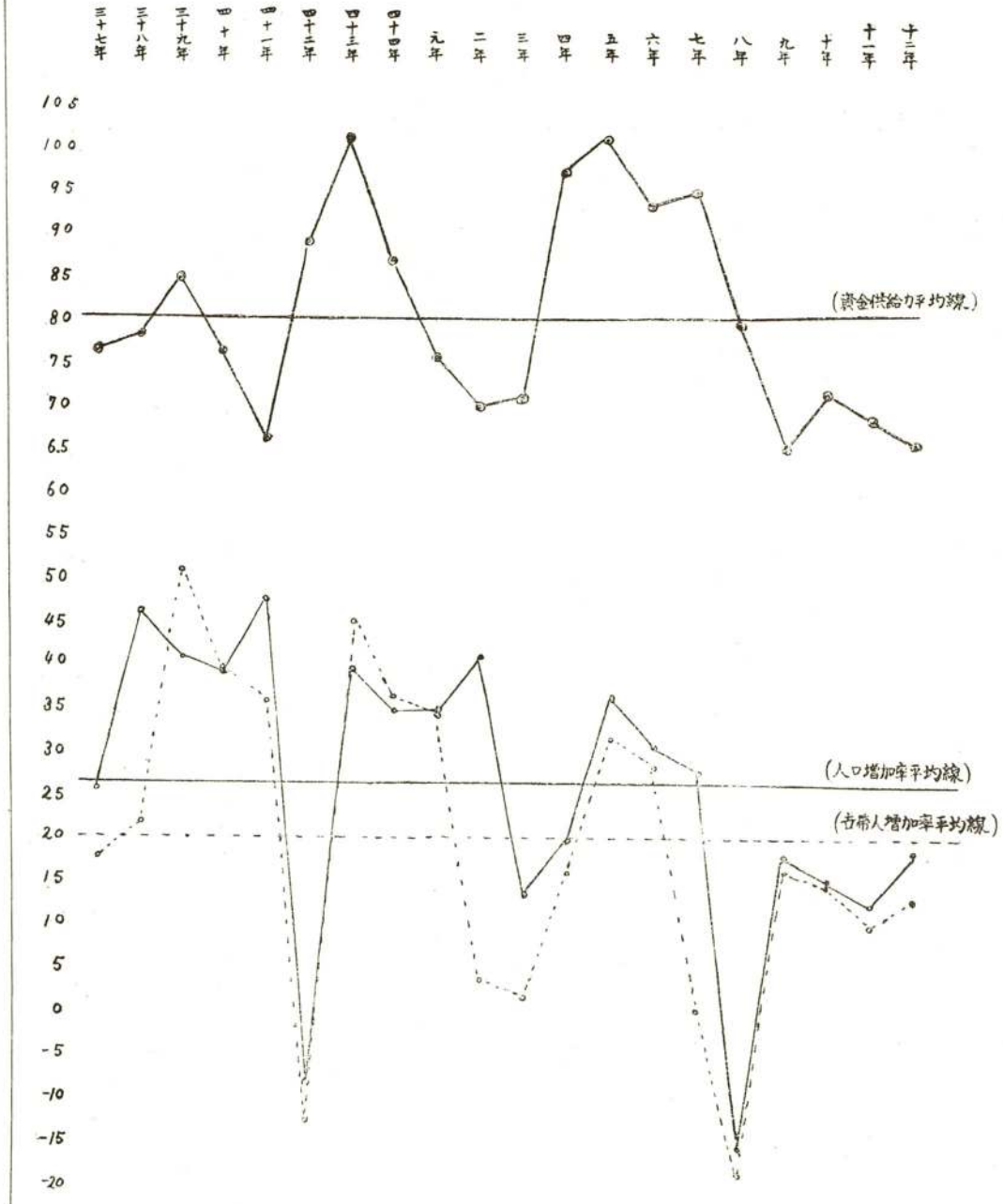
第十二表　人口及世帶數增加率と資金供給力との對比

年次	人口增加率	世帶數增加率	資產供給力	
明治三十七年	二八、九	一八、四	七七	（一）
三十八年	四六、四（十）	三、五（十）	七六	（一）不況
三十九年	四、四	四、一	五一、六	（十）
四十年	四九、六	四、一	四七、五	（十）
四十一年	△九、七	△五、八	△一三、八	（一）
四十二年	四〇、四	一六、二	四五、五	（十）
四十三年	三八、九	一六、五	三七、二	（十）
四十四年	三五、六	一四、一	三五、二	（十）不況
大正元年	四一、七	一四、九	四、六	（一）
二年	二四、六	二六、六	三、二	（一）
三年	三〇、一	二七、七	一五、六	（一）
四年	三七、七	三一、三	三一、八	（十）
五年	三一、三	二六、八	二八、九	（十）回復
六年	二六、八	二五、八	〇九	（一）好況
七年	△二五、八	△一八、二	△一九、四	（一）
八年	一八、二	一六、五	一七、八	（一）衰退
九年	一六、五	一四、一	一六、六	（一）
十年	一四、一	一九、九	一〇、一	（一）不況
十一年	一九、九	二六、六	一四、七	（一）
十二年平均	二六、六		二〇、〇	

年次	中間景氣	
明治三十七年	八五	（十）
三十八年	七〇	（一）不況
三十九年	八九	（十）回復
四十年	一〇二	（十）好況
四十一年	八七	（十）衰退
四十二年	七六	（一）不況
四十三年	六二	（一）
四十四年	六九	（一）
大正元年	六六	（一）
二年	八一	

第二圖　人口及世帶數の增減と資金供給力の消長との對照

備考　明治四十三年の人口及世帶數の著しき減少は北區大火にある


三十七年
三十八年
三十九年
四十年
四十一年
四十二年
四十三年
四十四年
元年
二年
三年
四年
五年
六年
七年
八年
九年
十年
十一年
十二年
105
100
95
90
85
80
75
70
65
60
55
50
45
40
35
30
25
20
15
10
5
0
-5
-10
-15
-20
(資金供給力平均線)
(人口增加率平均線)
(市街人增加率平均線)

之れによつて見るに人口及世帶數の增加率の高低と景氣の消長との間には之を長期に亘つて通觀する時はそこにその傾向の相似通へるものあるを窺ふことが出來るのである、即ち大體に於て人口及世帶數の增加率が共に夫々の平均線以上に在る年（例へば明治三十九年同四十三年同四十四年大正五年同六年の如き）は好景氣の年であつて之れに反し兩者が共にその平均線以下に在る年（例へば明治三十七年大正三年同八年同九年同十年同十一年同十二年の如き）は皆不況の年なることを察することが出來る

即ち景氣の變動に伴ひ人口及世帶數の增減することを知る尙景氣變動の影響を最多く蒙るものは勞働者であるから從つて景氣と人口との關係を大阪市の績人口と勞働人口（工場勞働者人口）との比率によつても窺ふことが出來る、即ち次の如くなる

第十三表　大阪市總人口と工場勞働者人口との比率

年次	總人口	工場勞働者人口	總人口千に對する勞働人口の比率	資金供給力
明治三十七年	七八七、五七二	四八、六九八	六一、八三	七七
三十八年	八二五、八九四	五五、六五五	六七、四	七八
三十九年	八六一、三七一	六三、〇一七	七三、一四	不況
四十年	八九七、〇九三	五五、四一〇	六一、七八	八五
四十一年	九四一、八三五	五三、九三八	五七、二六	中間景氣
四十二年	九三〇、八三三	六四、四七三	六九、一	七七
四十三年	九七二、〇四六	六六、四七三	六八、三八	不況
四十四年	一、〇〇五、三九九	六九、五一九	六八、九五	八六
大正元年	一、〇四五、五七七	七四、〇七一	七一、八三	好況
二年	一、〇九一、一九	八二、一五五	七五、二九	八〇
三年	一、一二九、九七一	八九、二一八	七九、一三	衰退
四年	一、一七四、二七	九七、八三	八六、三五	七六
五年	一、二一三、一七三	一〇八、三〇五	八九、三〇	不況
六年	一、二四九、六三	一一三、一五九	九〇、八三	七三
七年	一、三〇一、一三八	一二九、九二三	九九、二〇	九六
八年	一、三五二、九三三	一四四、九二二	一〇二、一六	好況
九年	一、三二二、〇三三	一三二、八〇	九九、八〇	九五
十年	一、二九二、一〇〇	一二六、八七一	九七、七一	衰退
十一年	一、三一八、四五五	一三一、三三一	九九、三一	六六
十二年	一、三四一、八四五	一三〇、八九一	九七、三一	不況

之れによれば績人口と勞働人口との比は大正五年六年七年八年の好況時代は一年平均千分の一〇一・五七を示したに反し大正九年十年十一年十二年の不況時には八一・三〇に減少せるを見る

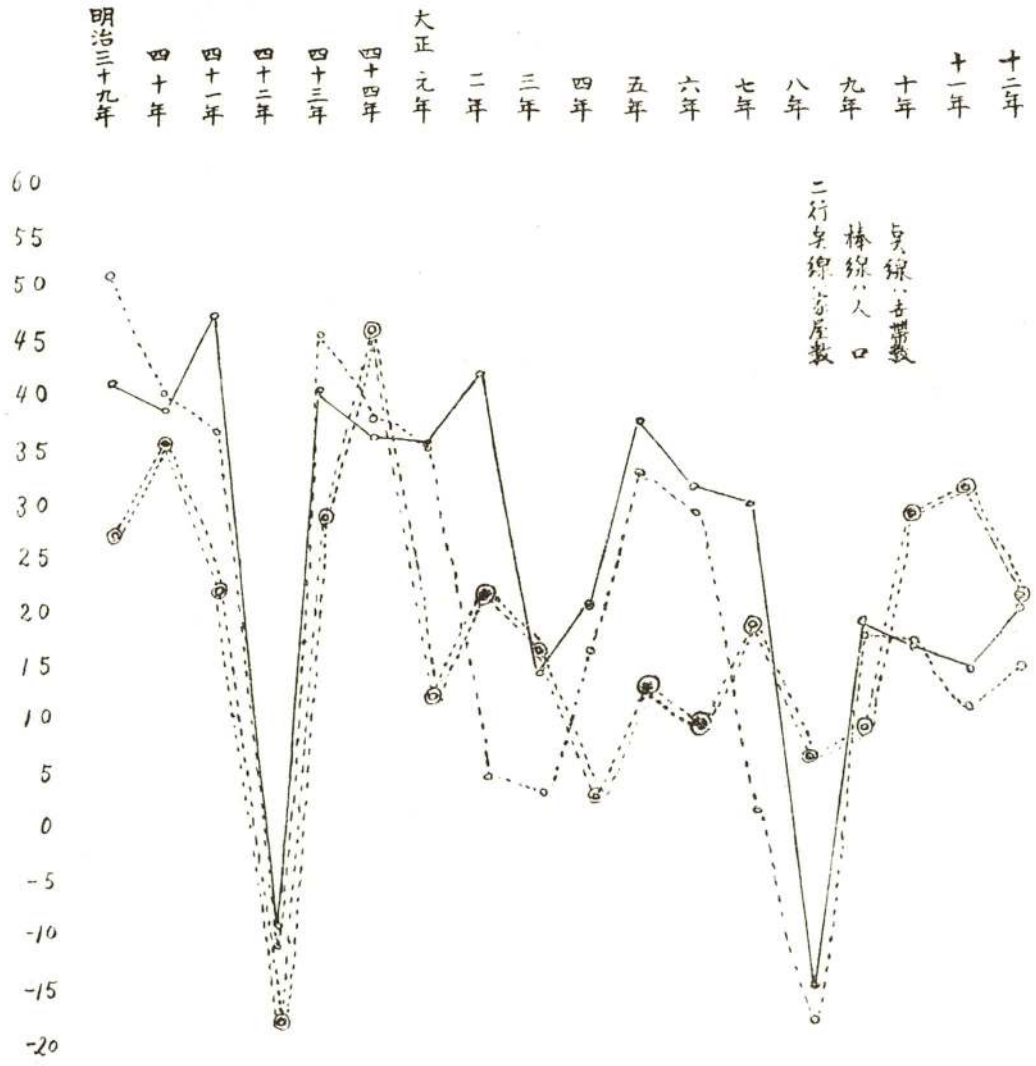
而してかの小住宅に對する需要の變動著しくその空家數は他の住宅よりも常に多き漸以亦蓋しこの景氣と勞働者との關係が住宅事情に反映せるものに外ならない

第三節　人口及世帶數と家屋數との關係

人口と家屋敷との關係を知るがために第一節同樣此兩者の累年に於ける增減狀態の一般的趨勢よりして推察せむとするそれ故に此等兩者につき各々その累年增加實數及增加率を對比すれば次の如くである

第十四表　人口及家屋敷の增減狀態の對比

年次	增加實數 人口	增加實數 家屋數	增加率 人口	增加率 家屋數	順位 人口	順位 家屋數
明治三十九年	三五、六七七	五、〇七六	四一、四	二七、四	三	六
四十年	三五、五二一	六、七一三	三九、六	三五、六	五	二
四十一年	△九、〇四〇	△三、六一九	△九、七	△九、一	一七	一八
四十二年	三九、二三三	五、七〇九	四四、九	二九、三	一	七
四十三年	三七、三一三	九、一五八	四三、八	四五、八	四	一三
四十四年	四五、四二一	二、〇八〇	五一、六	一〇、二	七	一二
大正元年	四一、七一九	四、五二一	四一、七	二一、五	八	一〇
二年	三六、六二〇	三、三四	三四、六	一五、八	一一	一七
三年	四四、三一六	二、九四九	四一、一	一三、七	六	一四
四年	三七、九〇	一、九五五	三四、九	九、〇	九	一六
五年	二、三九六	一、一四八	一、八	五、二	一〇	一五
六年	△一一、四四五	△五、八	△八、二	一、八	一三	一五
七年	三三、八四五	一、八五九	二八、五	八、二	一四	一五
八年	△一九、四四五	△五、八	△一四、一	一、九	一九	一五
九年	二一、〇五〇	六、〇六〇	一四、六	三〇、八	一六	三
十年	一八、一七八	七、三五五	一四、一	三〇、七	一五	三
十一年	二六、二八五	五、〇八一	一九、九	二三、一	一二	九



尙前表を更に圖示せば左の如くなる

第三圖　人口及家屋數の增減狀態の對照

右對比表及對照圖により見るに此等兩者の累年增加率は各々その一張一弛高低を異にし其間何等同一の步調又は類似の傾向をも見出すことが出來ないこれを思ふに元來住家の需要は人口の增加に基くべきものであるが大都市に於ける住家の需給事情は其變動極めて甚しく之れが豫測に最も困難を感ずるものである、殊に大阪市の如き商工業の中心たる大都市に於ては既述の如く人口の增減は景氣の變動に影響せらるゝ所最も多く詳言すれば對中かの都市への來住者の增減は景氣の變動に件ひ甚しく增減するのみならず新世帶を構成する原因たる結婚數もその公然たると因緣たるとを問はず景氣に依りて增減すること著しく且つ市の中央部に於けるビルヂングの新築周圍部に於ける工場の新設等のために家屋を取毀つとか道路の新設擴張鐵道軌道運河の布設に依る住宅の取拂ひ等も好況時代に一時に現はれて其補充に困難を感ずることゝなる、又交通機關の發達新工場

地の開設等は低宅地を移動せしむるが故に需給關係に不調和を生せしむる、以上各種の原因は綜合して住家の需要を充足すること常に困難となり從つて茲に多數の密集住居を忍ぶの止むなきことゝなり即ち居住狀況にも亦その影響を及ぼすに至るのである

因に大阪市に於ける人口世帶數石家屋數の增減統計によりその數字を基礎として居住狀態の變化を觀察すれば次の如くなる

第十五表　一家屋居住人口及世帶數

年次	現住家屋數（空家ヲ除ク）	現住人口	現住世帶數	一家當人口	一家當世帶數	一世帶當人口
明治三十八年	一七〇、〇三三	八三五、八九四	二〇一、六八三	四、八六	一、一九	四、〇九
三十九年	一七八、三七八	八六一、五七一	二一二、六二〇	四、八三	一、一九	四、〇五
四十年	一八四、一七七	八九七、〇九三	二二一、六七六	四、八七	一、二〇	四、〇四
四十一年	一八四、九三一	九四一、八八三	二三〇、一七七	五、〇九	一、二四	四、〇九
四十二年	一八三、一四七	九三三、八三三	二三七、二五七	五、一三	一、二四	四、一〇
四十三年	一八五、四三九	九七一、〇四六	二三八、〇九四	五、一四	一、二八	四、〇八
四十四年	一九三、七八四	一、〇〇八、二五九	二四七、三〇二	五、一〇	一、二八	四、〇八
大正元年	一九四、五〇五	一、〇四五、九七七	二五六、三一〇	五、三七	一、三一	四、〇八
二年	一九八、〇四二	一、〇九一、一一九	二五七、五〇四	五、五一	一、三〇	四、二三
三年	一九六、二五二	一、一〇一、三一一	二五八、三三七	五、六四	一、三一	四、二九
四年	二〇三、〇一五	一、二九、九七一	二六一、四三三	五、九七	一、三九	四、三一
五年	二一五、八七六	一、一七四、二八七	二七一、三三九	五、四四	一、二一	四、三三
六年	二一九、〇八八	一、二一三、二七七	二七九、四一一	五、五三	一、二八	四、三四
七年	二三一、四八七	一、二四九、六二三	二七九、六八一	五、六四	一、二六	四、四七
八年	二三二、八六八	一、二三〇、一二八	二七一、四一五	五、五二	一、二二	四、五三
九年	二三三、四七八	一、二五二、八八三	二七六、三三一	五、六一	一、二五	四、五三
十年	二三九、八三四	一、二七四、〇三三	二八一、〇〇七	五、五四	一、二三	四、五四
十一年	二三六、九二七	一、二九二、二〇〇	二八三、八六〇	五、五四	一、二〇	四、五五
十二年	二四二、〇八二	一、三一八、四八五	二八八、一〇一	五、四五	一、二九	四、五七

而して日本に於ける普通住家の構造及生活狀態より參酌して考ふるに保健上氣候は少くとも八疊に二人即ち平均四疊に付一人の割合を超えてはならないのであつて日本の住宅用建物の利用率は建物坪數の普通四五乃至六〇%即ち一坪に付凡そ疊一疊の割合であるから一人當建物坪數は即ち四坪に相當する

故に一家屋居住平坪人口五人と假定するも二十坪の建坪を要すべきである、然し果して普通貸家の一家屋平均坪數が二十坪あるや頗る疑はしくその居住狀態が此保健標準密度以上に上つて居る家の少なくないことは想像するに難くはなからう

かくの如く經濟上の發達迅速なる大都市に於ては住宅需給事情の不調和よりしてかのオーバークラウジングの現象を惹起するのであつて之れ大都市の共通疾患といはねばならぬ

次に住宅は非需要の方面より觀察して變動烈しく需要を充足すること困難なる性質を有すると同時に供給の方面より見て亦之れが調節を困難ならしむる原因る存在して居る

即ち家屋の建築には多少長い時間を要するのみならず借家の如き長時間に亘つて確實な利益を擧げることを目的とするものは需要が多いからとて今直ちに新築に着手することの出來ない事情がある、且つ必ず將來不景氣が襲來して空家の續出する時の事を考慮に入れねばならない、殊に人口濃增して住家の需要切迫する時期は既述の如く好況の時であるから、(一)建築材料勞銀及金利等も騰貴するを常とし從つて建築費も增加し加ふるに(二)建築用地の價格亦暴騰するから供給不足に拘らず容易に家屋の新築を見る能はず尙此時期に於ては(三)資本固定を要する家屋に投資するよりも他の回收速かにして一層有利なる事業に投資するを得策とするから之れがた

め住家の需要の最も多い時には家が建たずその缺乏を一層甚しからしむることになる

而して叙上の事情は之を前掲第十四表人口及家屋數の增減狀態對比比の示す家例に依つても明かに知ることが出來る、即ちその著例なるは大正五年六年七年の如き大阪市に於ける經濟界の最も好況時代であつてその間人口增加實數は一年平均三九、八五〇人を算して居るに拘らず家屋數の增加實數の一年平均は二、四三三軒にすぎなかつた、然るに之れに反して大正十年十一年十二年の如き不況時に於ては人口增加實數は一年平均二一、八九四人にすぎなかつたが家屋數の一年平均增加實數は實に六、三九九軒の多きに上つて居る

以上の結果より見るも景氣の消長と家屋數の增減との間に如何なる關係の有するかを推測するに難くはあるまい、尙此景氣と家屋數就中空家數との關係につきては改めて次節に於て觀察することゝしやう

第四節　景氣と家屋數就中空家數との關係

景氣と家屋數との關係については前節人口と家屋數との關係にて視察したるが如く家屋は普通の商品と異り好景氣で住宅に對する需要の最も多い時には家が建たず不景氣でその需要の少ない時に却つて家が建つといふ極めて矛盾した現象を呈する事情あると同時に居住狀態にあつても好景會には一家を構成する者多きに反し不況時には經濟上其他の關係より或は他地方へ移轉し或は一家をたゝみ同居生活を餘儀なくするもの續出して諸所に貸家札を散見し景氣の深刻化につれ愈々益々空家は激增するに至るのであつて殊に家賃の高い家は往々長期空氣であるといふが如き狀態を呈する、景氣と家屋數就中空家數との關係即ち是れである

今此等の關係を觀察するに當つて先づ抑も大都市に於て市民が住宅の缺乏を感ずる場合は如何なる場合なりやを考究し而してその缺乏を感ずること甚しき時期は果して不況時よりもむしろ却つて好況時代であるかを觀察して見やう

空家の常正數即ち住宅の過剩もなく不足もなき空家數は幾何なるか獨逸の學者ポーレ氏は總住宅戸數の百分の三と推算して居る、勿論此の常正數は都市の性質例へば借家住居の市民が割合に多き都市と其反對に自分持の住宅に居住するもの多き都市とは其割合を異にすべき理である、又獨逸の學者中ハツセ、チンマーマン、シエーフエル、ステーウエサシド等の統計學者が空家の常正數に關する種々の理論的考察を試みたに拘らず此理論上の基礎に就ては未だ定說を見るに至らず各都市に於ける多年の統計を基礎とし空家の最小數と最大數とを檢出し其中間數が大體百分の三に在りといふ經驗的法則を以て一般の標準としたにすぎない、然らば大阪市に於ける空家の常正數は如何、即ち前掲第二章第二節に示す明治三十八年以降大正十二年に至る最近過去十九ケ年間に於ける空家數統計より推算すれば次の如く千分の四二・五乃至二九・九となり獨逸の常正數と大差なきことを知る

(1)　過去十九ケ年間の空家率の最大數と最小數との中間數

千分の　四一・五

(2)　過去十九年間の空家率の中位數（メディアン）

千分の三〇・二

(3) 過去十九年間の空家率の總平均數（算術平均）

千分の二九・九

之を以て空家數が其以下に下つた場合は大阪市民一般が住宅不足を訴へる場合と認むべきである

因に今空家の常正數を百分の三と假定し之を基準として推定所要空家數並に家屋不足數を算出すれば次の如くである

第十六表　大阪市の推定所要空家數（空家の常正數）及推定不足數

年次	現家屋數	推定所要空家數	空家實數	推定數ト實數トノ差即チ過不足數（△）	總家屋數ニ對スル同過不足率%
明治三十八年	一七六、七六四	五、三〇二	六、七四二	一、四四〇	八、二
三十九年	一八一、八四〇	五、四五五	三、四六二	△一、九九三	△一一、〇
四十年	一八七、五五三	五、六二六	四、四二六	△一、二〇〇	△六、五
四十一年	一九二、七六四	五、七八二	七、八三二	二、〇五一	一三、三
四十二年	一八九、一四五	五、六七四	七、九八八	二、三一四	一〇、六
四十三年	一九四、八五一	五、八四五	九、四二二	三、五六七	一〇、八
四十四年	二〇四、二〇九	六、一二六	一〇、四二五	四、二九九	一一、〇
大正元年	一九六、一八九	五、八八	一一、七八四	五、五九六	一二、一
二年	二一〇、八一〇	六、三二四	一二、七七八	六、四五四	一三、三
三年	二一四、一五四	六、四二四	一七、九〇二	一一、四七八	三五、九
四年	二一四、七六一	六、四二八	一一、七四六	五、三一八	一四、六
五年	二一七、七一〇	六、五二一	一、八三四	△四、六九七	△二七、三
六年	二一九、六三九	六、五八九	五七七	△六、〇一二	△三七、四
七年	二二一、六二一	六、六六二	五七四	△六、〇八八	△三七、四
八年	二二三、二〇九	六、六九八	三四一	△六、三五五	△三八、五
九年	二二五、〇四八	六、七五一	七九八	△五、九五三	△三六、三
十年	二二一、六四四	六、九四九	一、八二〇	△五、一二九	△三一、一
十一年	二三九、〇〇四	七、一七〇	二、〇六七	△五、〇七三	△三一、一
十二年	二四四、〇六五	七、三三一	二、〇〇二	△五、三二八	△三一、八

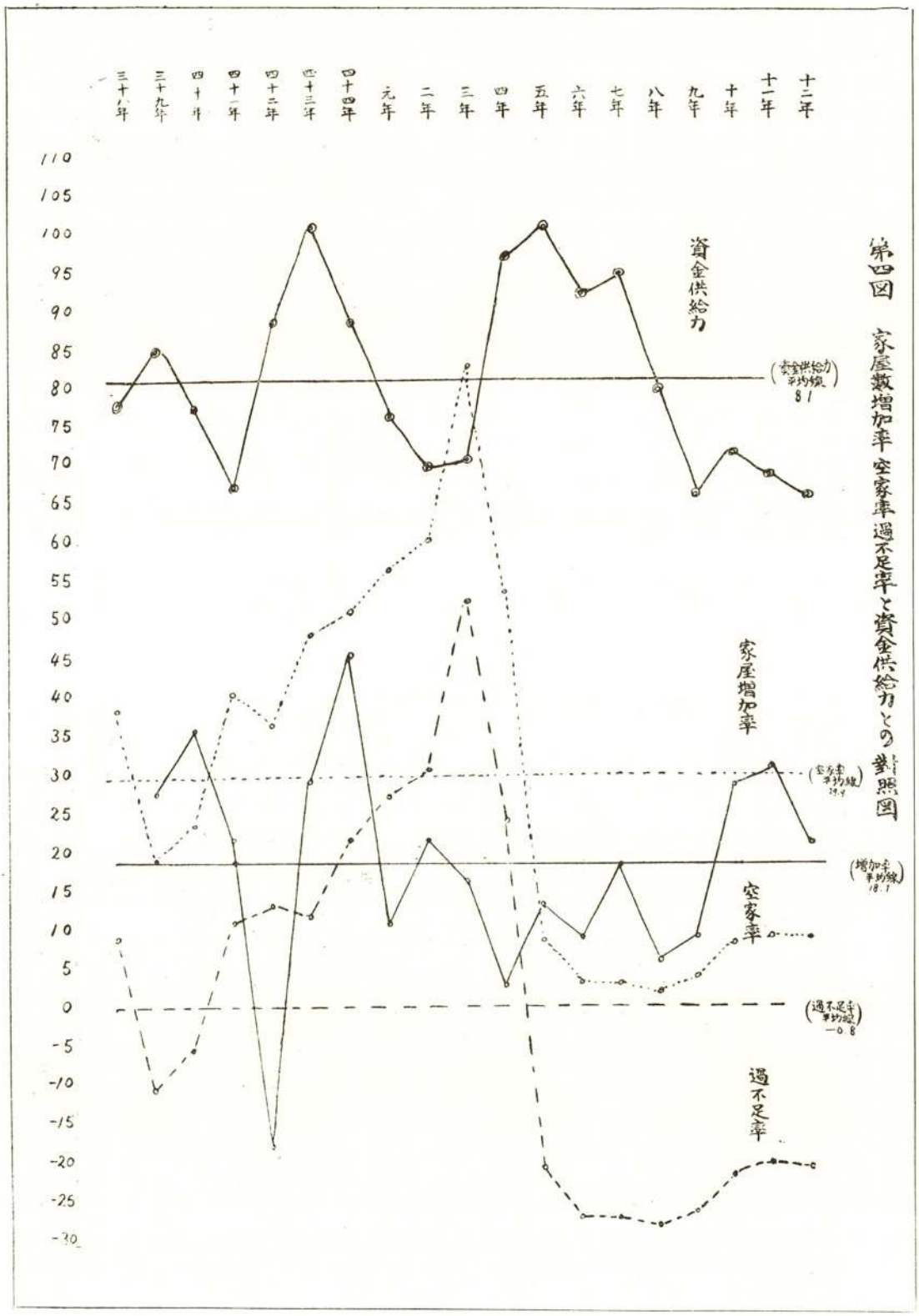
以上の如く大阪市に於ける家屋の缺乏を感ずる場合即ちその不足數を知ることが出來たのであるが次に然らばその缺乏を感ずる時期と景氣の好不況との關係を觀察せねばならないが之れがためには次の對照表及びその圖表によることゝした

就中對照圖に於ては各線と各線の平均線との交叉關係を比較視察すれば一目瞭然である

第十七表　家屋數の增加數、空家數及過不足數を資金供給力との對比表

年次	家屋數增加數	空家數	過不足數	家屋數增加率	空家率	過不足率	資金供給力
明治三十八年	—	六、七四二	一、四四〇	—	三八、一	八、二	七八
三十九年	五、〇七六	三、四六二	△一、九九三	二、九	一九、〇	△一一、〇	八五
四十年	六、〇一三	四、四二六	△一、二〇〇	三、五	二三、二	△六、五	七七
四十一年	四、二一一	七、八三二	二、〇五一	二、三	四〇、六	一〇、六	六七
四十二年	△三、六七九	七、九八八	二、三一四	△一、九一二	三六、九	一三、三	八九
四十三年	五、七〇六	九、四二二	三、五六七	二、九一	四八、三	一〇、八	一一
四十四年	九、三八	一〇、四二五	四、二九九	四、五	五一、一	一一、〇	八七
大正元年	二、〇八〇	一一、七八四	五、五九六	一〇、一	五七、一	一二、一	七六
二年	四、五二一	一二、七七八	六、四五四	二、三	六〇、六	一三、三	八九
三年	一、九五五	一七、九〇二	一一、四七八	一、五	八四、三	三五、九	一〇一
六年	二、三六六	一一、七四六	五、三一八	二、六	六二、四	一四、六	九五
七年	一、九五五	一、八三四	△四、六九七	一、五	二一、六	△二七、三	九七
八年	一、八三九	五七七	△六、〇一二	一、四	一、四	△三七、四	八〇
九年	一、八一〇	五七四	△六、〇八八	一、四	一、四	△三七、四	八〇
十年	二、〇六〇	三四一	△六、三五五	一、五	一、五	△三八、五	八〇
十一年	一、九五五	七九八	△五、九五三	一、四	一、四	△三六、三	八〇
十二年	一、八二〇	一、八二〇	△五、一二九	一、三	一、三	△三一、一	八〇
	二、〇六七	二、〇〇二	△五、三二八	一、五	一、五	△三一、八	八〇

之れによれば大阪市に於ては明治三十九年四十年には日露戰勝の好況により空家率は千分の一九並に二三、五に達し住宅不足を示したものと思はれる、以後四十二年の北區大火を除き漸次空家增加し大正三年歐洲大戰開始せらるゝや財界一頓挫を來し同市到る所に空家を見ざるなく本市の空家レコードを劃し而かも前年來の家屋增加と相俟つて家屋は著しく過剩を呈した越えて大正四年秋季に至つて不況挽回の兆をきざ


第四図　家屋數増加率　空家率　過不足率と資金供給力との對照図
資金供給力
(資金供給力平均線 81)
家屋増加率
(空家率平均線 19.7)
(増加率平均線 18.1)
空家率
(過不足率平均線 −0.8)
過不足率
十二年
十一年
十年
九年
八年
七年
六年
五年
四年
三年
二年
元年
四十四年
四十三年
四十二年
四十一年
四十年
三十九年
三十八年
110
105
100
95
90
85
80
75
70
65
60
55
50
45
40
35
30
25
20
15
10
5
0
-5
-10
-15
-20
-25
-30

してより空家は前年に比し三割四分減となり翌五年に至りては歐洲大戰の好影響頓に加はり諸事業勃興し會社工場の新設又は擴張せられ人を要求すること多大となつたから地方民の本市に來住するもの益々增加したるに反之既述の如く住宅の供給之れに伴はず家屋增加率は此間常に平均線以下に下り茲に於て初めて住宅難を唱へらるゝに至つた、大正八年の講和條約成立の年の如きは絕對に空家あるにすぎなかつた、然るに九年三月より株界棉糸界の動搖は忽ちにして各所に空家を生じ尙引續ける不況のためこゝに投資は不動產へ轉換され新築並びに空家は逐年增減の有樣である、かくの如く家屋數就中空家は好況時代には影をひそめ不況の度の增加につれ益々增加する傾向を有せるものである

第四章　結　語

以上人口家屋數及景氣の各々についてその相關的關係を觀察し次の結果を得たのである

一、人口と世帶數との關係は大體に於て正比例をなし人口の增加につれて世帶數も亦增加する、然し乍ら世帶を構成すべき原因たる結婚は社會の進展世運の變遷及經濟生活の複雜化或は思想方面等の影響より既述の經驗的事實も變化しつゝあることは事實である

二、人口と景氣との關係は大體に於て正比例をなし景氣の消長は人口の增減に影響する所極めて多い、殊に商工業の中心地たる大阪市の如きに於ては人口の增加は自然的增加よりも此景氣による來住者の增加によること最も大であるからである

三、人口と家屋數との關係はその增減の傾向むしろ反比例的性質を有する、これ家屋は其需要供給兩方面に於て一般の商品と異れる特殊の事情の存するからである

四、景氣と家屋數との關係も亦正比例の關係を有する、即ち家屋の需給の特殊事情は景氣によつて最著しく左右せらるゝからである

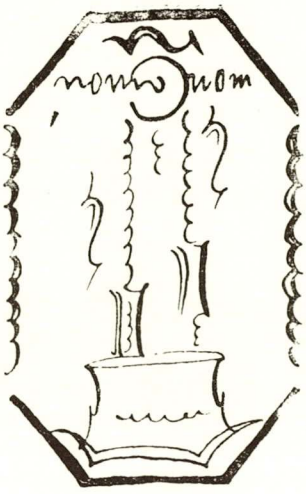
五、景氣と空家數との關係も亦反比例の關係を有する、之れ景氣は經濟生活と直接關係を有するからこゝに不景氣のための歸農又は同居となつて表はれ空氣は不景氣の深刻化につれ益々增加するに至る

而してこゝに觀察したる期間は明治三十七年から大正十二年迄の最近過去二十ケ年間に於ける事實であつて其間に於ては經濟界の消長甚しく且つ社會狀態の變化亦極めて顯著なりしを以て此等の事實の反映として各種計數の上に現はれたる變化が各々の增減の上下兩極點を示せること及び經濟界の消長の循環する如く人口の增減家屋の拂底にも亦一種の週期的性質を帶び居ることを看取することが出來る

尙叙上の經濟的法則は統計數字のみよりして觀察し得らる結果であるが最近に於ては住宅問題は數量の問題から家賃の問題に推移しつゝあるのであるから此喧しき住宅問題には直接資する所少ないかも知れない

それ故に此主觀的住宅難の原因たる家賃に關しての觀察をも併せ必要とするのであるが今此に關する充分の材料を有せないからこれは他日に讓らねばならない

而して前揭人口家屋數及景氣に關する統計は單に各々一、二の主要なるものゝみにすぎなかつたが尙夫々につき各種統計を引用對照する時はより一層面白き結果を見たことであらう　（一四、六、三〇）



飛鳥時代の寺院建築（一）

岸熊吉

近來、古建築の研究者が讀々と現はれまして、素人にも隨分細微に渉つて研究をして居る方も間に見受けますし、又同時に新しい色々な事實を發見される様な事も時々新聞其他の紙上に於て拜見することがありますが、是は洵に結構な事であります、併し私は日本建築史界に於ける權威者である伊東博士であるとか、關野博士、或は天沼博士に就いて教を受けた事を單に受けうりする位の程度のものでありまして、深く研究したなどゝ云ふやうな事はありませぬけれども、多少は其間に於て自分の意見も申述べたいと思ひます、それから素人の方に日本建築のお話をすると云ふやうな時分には、先づ最初に建築の名稱なんかを一々説明して掛からなければなりませぬので、非常に面倒でありますけれども、幸にして皆様の多くは建築界のお方で居られますから其手數が省けて大變結構だと思ひます。

是から愈々本題に入りますが、其最初に時代の區分に付て大體申上げて置きませぬと、飛鳥時代とは何時頃であるかと云ふ事がお解りになり難い方があるかもしれませぬから、其時代の區分と、初期より近世に至るまでの日本建築の變遷を極く大略申上げて、次に飛鳥時代の現存して居る建築に付て一々其特徴をお話したいと思ふのでありますが、幸ひ實物が大阪の近郊にありますから、それに付て實地御覽を願ひます。

× × ×

日本建築史の沿革を大別すると、佛教の渡來以前と佛教渡來以後の二つに分ける事が出來るのでありまして、佛教渡來以前は言ふまでもなく日本固有の發展時代で、建築の如きも極めて幼稚なものであつたと考へられるのであります、又其時代は主に宮室、或は神社建築なぞが主になつて居つたのであつて、普通の家屋の如きも餘り發達して居らなかつたらうと察せられるのであります、佛教渡來後最初の時代が所謂飛鳥時代であつて、それに次ぐものが奈良朝時代であります、此奈良朝時代を更に二つに分けて、前期を白鳳時代、後期を天平時代と稱して居ります、此奈良朝時代の文化に付ては何れ機會があらばお話しすることゝしまして、今は暫く省略する事と致します又、書冊抔に依て十分御感得を願ふことが出來るだらうと存じますが、建築も最も進歩した時代であります、凡て日本建築の

發達は非常に佛教の影響を受けて居るのであつて、所謂日本の建築史なるものは佛教史と云つても可い位に、各時代に於て佛教の輸入に依て變化して來るのであります、仍ち奈良朝時代は支那に於ける唐朝時代で、我國に建築美術を首め總て其文化を輸入したのであります、前の飛鳥時代の朝鮮即ち三韓との交通時代で、所謂百濟文明の影響を受けたのでありますが、併し其源流は矢張り支那の南北朝時代の文化にあるのでありまして、それが朝鮮化されて更に日本に輸入されたものであります、仍ち奈良朝時代になつてからは唐朝の影響を受けて居りますが、其以前に於ては百濟系の影響を受けたのであります、從て其間建築の樣式、伽藍の配置等總ての點に於て變化を生じて居ります、次に支那朝鮮との交通が暫く中絕し、日本固有の建築樣式が發展することになつたのでありますが、それは即ち平安朝時代であります、此平安朝時代を又二期に分けて前期を弘仁時代後期を藤原時代と云つて居ります、其次が鎌倉時代であつて日本の建築上に於て一大革命が起つた時であります、當時支那は宗時代で盛に彼我の間に交通が行はれた所から、其時代に支那に於て流行した禪宗建築、所謂唐樣と天竺樣の二つが日本にも入つて參りました、後で當時の建築には在來の和樣建築もあれば、純粹の天竺樣建築もあり、唐樣の建築もあり、或は其二三のものが混合して所謂混合式の建築も出來て來たのであります、仍ち一言に云へば、從來の和樣に屬する建築は餘り彫刻等を用ひませぬが、宋風建築の所謂唐樣のものが入つて來ると、盛に彫刻を用ひるやうになりました、約り從來の建築樣式と鎌倉以後の建築樣式と大體に於て二つに分けても可い位に非常な變化を來したのであります、故に建築物を見て彫刻が非常に澤山附て居れば、それは鎌倉以後の建築であり、餘り彫刻が無く、非常に簡素なごつしりとした雄大な建築であれば、それは大抵鎌倉以前のものであると斷じても多く間違ひはないのであります、尤も細部に渉つては色々と共通した點もありますが、先づ大體に於てそれだけの違ひがあります、次に室町時代になると、宋朝傳來の樣式が日本化して來て、更に桃山江戶時代になつては、支那は元明清の時代でありますが、黃檗宗であるとか色々又別の樣式が加つて參りま

人間味の藝術（一）

三浦文學博士

封建の時代は武士と僧侶との對立によつて代表された時代であつた、その趣味は豪健であり莊重であつた。その澁い封建の莊重趣味を打破して歷史の趨臺に一道の春信を齎したものは、西洋ではルネサンス（文藝復興）の時代であり、我邦では桃山時代であつた。（桃山時代以後も封建時代に屬するけれども著るしく統一的であつて桃山以前とは大に傾向を異にしてゐる）。

ルネサンス文化の趣味は、宮廷生活の貴族趣味と都市生活の町人趣味との生んだものであつた、我が桃山の文化もまた然りである。華麗と暢明と自由と澗達とはその特色である、それは決して再興ではなくして新生であつた。イタリー、ルネサンスの本源地ともいふべきフロレンスの町には政治、經濟、學藝すべての生活が一つの都市に集中されてゐた、そこには我等都市國家の俤を認める、或は都市本位の文化國家であつた。鎌倉は武人の町であり、奈良は寺院の町であつたらう、しかし十五世紀のフロレンスには一の都市を中心とした人間生活の渾然たる姿が認められる、それこそ「人間の町」であつたらう、フロレンスは實に藝術の町には相違ないが、その藝術のフロレンスに取つて最も人間的な意味を持つものであつた。總ての生活が藝術化されてルネサンスの町が出現した、その町を支配した君主の專制政治もまた一つの藝術なのである。貴族仲間の黨爭や陰謀も、他の町との商業的競爭も、宮殿の裝飾も、文人學徒の談論もやがてはその町が產んだ藝術として見ること

して明治大正の時代に及んで、更に西洋建築が入つて來たのでありますが、是が又非常な革命であります、仍ち時代の區分は色々に分けて居りますけれども、古美術研究には大體斯う云ふ風に分けた方が可いやうに思ひます、約り飛鳥時代、白鳳時代、天平時代、弘仁時代、藤原時代、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、及び明治大正の現代であります而して私の今述べやうとする所は所謂飛鳥時代の建築の樣式に就いてでありますから、日本建築の外國の影響を受けた一番最初のものであります。

先づ大體の變遷は以上の通りでありますが、日本建築の通性を、もう少し具體的に詳しく、わけてお話してみますと、第一に、日本建築は所謂木造建築で、石材や金物等も多少使つて居りますが、大部分は木材でありますこと、それから建築は大體楣式（東洋建築）と通指式（西洋建築）の二つに區別することが出來るのでありますが、日本建築は總て楣式で、アーチの如きものはありませぬ、次に平面と立面でありますが、平面は最初は最も簡單なもので、正方形、長方形、六角八角等がありまして、時代が下るに從て其プランが段々複雜になつて參ります、立面に於て、屋根の樣式に切妻造、入母屋造、寶形造、四柱造（あづまや造）と云ふ風に、時代に依て屋根の樣式にも變化が生じたのであります、又柱の下の礎石は最初は自然石の上を平にしただけで、其上に直ぐ柱を立てましたが、次いで自然石の上を柱の載る所だけ方形或は圓形に造つたものを用ひ、鎌倉時代になりますと建築の方の言葉で、石口をしかると云ひますが自然石のデコボコになつた儘で柱を仕合し、また柱に面があれば、石にも面を取ると云ふやうに、柱に倣ふのであります、一面に於て（又禪宗建築唐樣建築）が入つて參りまして、柱の下に礎盤（西洋建築の所謂ベース）と云ふものを附けるやうになつて來ました、次に柱でありますが、初め佛敎渡來以前に於ては自然の木其儘で、皮の付いたまゝ加工しない俗にいふ黑木を使つて居つたやうであります、それが朝鮮の建築樣式が入つて、所謂飛鳥時代になりますと、此法隆寺の建築の如く柱は即ち圓柱であつて其中程から下に『ふくらみ』が付て居ります、是はグリーキのパルテノンの樣式と大變似通つた所があるやうであります、

が出來やう。ベニスの純商人趣味と、フロレンスの町人大名趣味との對照は、そのまゝ兩者の繪畫の上によく示された、我等はそこで都市生活と藝術との渾然たる一致を見出すことが出來る。

わが桃山時代にはルネサンスの都市に見る如き渾然たる一致を見ることは困難であるが、それでも短時日ではあつたが、秀吉の巨腕の下に大阪なる一大中心が、政治的中心としての京都と經濟的中心としての堺との間に定められたことは意義あることゝ思はれる。豊臣氏の事業は單に日本六十餘州を統一したといふ政治的事蹟のみではなく、もつと大きな文化的統一の意味を持ち得べきものではなかつたらうか。それは或る意味においての一文化國家的理想の流れを掬むものではなかつたらうか。而し伏見の築城によつて中心が大阪と伏見とに二分されたことは、以上の理想を頓挫せしめた、しかして江戸の出現によつて全く蹂躙されてしまつた。恐らく秀吉の如き人物が豊臣氏の二代、三代に出現したならば、恰もフロレンスのメヂチ家の如く、大阪を中心としたルチサンス的文化が生れたのではなかつたらうか。恐らく大阪がもつと地方的性質を帶びた町であつたならば、以上の理想は小規模な形式において實現されたかも知れないが、それには大阪は餘りに大であつた、大であつたゞけそれだけ經濟的都市として京都や江戸に對立することゝなつた、恰もローマの町が偉大であつたゞけそれだけ法王や敎會の町としてフロレンスやベニスに對立した如くである。この點からすれば伊達政宗によつて代表された仙臺の如きは、やゝルネサンスの都市に近いものがあつたといへやう。（次頁へ）

所が次第々々に其『ふくらみ』が減じて來まして、次の白鳳時代になりますと『ふくらみ』の程度が少くなつて居りますが、まだ肉眼で能く分ります、それが其次の天平時代になりますともう肉眼では分らないが、實測をして見ると、幾分そこに『ふくらみ』が付て居ることを發見しますが、次の平安朝時代に入りますと、殆ど『ふくらみ』が無くなつて、柱は單に段々上が細くなつて、下が太く、上下を引通した線は一直線になつて居ります、而して鎌倉時代になりますと、柱の太さは大抵の場合上も下も同じ太さになるのであります、尙ほ角柱の問題でありますが、遺物の上から研究をして參りますと、どうも角柱と云ふものは餘り古くからは無かつたやうであります先づ遺物の上から最古いものは、奈良縣にはありませぬが、京都府の平等院鳳凰堂がそれであります、あれは藤原時代の優秀な建築で、其中堂の下層の柱は所謂角柱であつて、而も非常に大きな面を取つてあります、此柱の面の取方が時代の變遷に應じて違ふやうであります、一口に申せば、最初は非常に面が大きかつたのが、段々小さくなつて來て居る、從て此頃の建築などは殆ど面を取らずに、所謂糸面とか云つて、鉋で一遍スッと扱くだけのものでありますが、初は非常に大きな面を取つたもので、其極端な例は先づ平等院の鳳凰堂のものと言つて可からうと思ひます、しかしそれよりもつと以前に於て角柱は絶對に無かつたかと云ふとそれは確實に言ふことは出來ぬのであります、即ち後で御覽になれば分りますが此法隆寺の金堂の中にある玉蟲厨子は所謂宮殿と須彌座の二つになつて居つて、一つの工藝品ではありますが、飛鳥時代の建築の樣式と同じであつて、角柱が角になつて居ります、併し是は建築物ではありませぬし、工藝品として、或は製作上或は金物を取付けるためとか、何か裝飾上の點に於て圓柱よりも角柱にした方が可いと云ふので、さうしたかも分りませぬが、もう一つ白鳳時代の代表的建築藥師寺の三重塔（一重が二層になつて居て一見出層のやうである）の裝階の柱が角であります、所が先に角柱の面は最初は非常に大きかつたと云ふ事をお話しましたが、どう云ふ譯ですが、此藥師寺の三重塔の裝階の柱の面は餘り大きく取つてない、極めて小さい面であります、是

人間味の藝術　（二）

上に述べたやうな理窟は兎も角として、私はルネサンスの藝術を好み、更に桃山時代の文化に深い興味を有するそこには封建の堅い氷が破れて春風春水山に遍き觀がある、金銀の力に膨れ上つた町人の誇りが充滿してゐる。かくして自由と潤達とは彼等の趣味を支配した。

私はあまり空論に走つた嫌ひがある、視點をもつと對象的に、固定しなければならない桃山時代の遺物としては建築に彫刻に、繪畫に、今日に殘されたものが少くない、京都において、大阪附近において、更に醍醐、吉野及び竹生島において、なほまた東北仙臺において我等は桃山藝術の自由暢達な氣分を味ふことが出來る。その數多い建築についてはまた、屏風、壁、襖、板戸の繪等については今こゝに避ける、たゞ彫刻の或る一つの例について述べて見たい。

まづ京都洛北大德寺の唐門の前に立つと、我等は大きな扉の直ぐ上に太い梁の下に細い横緣があるのを見る。その横緣には葡萄蔓の彫刻が施されてゐる、元來葡萄蔓や葡萄棚は桃山の繪畫、彫刻の裡にお馴染の題材であつて、梅だの菊だの唐竹模樣などの類型的觀念に支配された草木に較べてはいかにも自由な氣分に富み、そしてまた當時の外國貿易の盛んであつた事情を考へ合せて、多少そこに異國的なかをりを感ずるものであるが、この大德寺の葡萄蔓はこれらの葡萄模樣また葡萄畫の間にあつても異彩を放つものであつた。その蔓

等はどうも例外と見なければ仕様がありませぬが、兎に角大體さう云ふ風になつて居ります、次の軸部でありますが、貫とか長押とか云ふものは昔も今も變りなく皆やつて居ります、壁は板壁、或は羽目板ばかりの塲合もあり、或は厚壁、或は板壁にして、それに漆喰を塗るとか云ふ風に昔も今も餘り大した變りは無いやうであります、窓は最も古い時代に於ては櫺子窓が一番多いやうでありますが、次に花燈窓と云ふものが出來て來ました是は禪宗建築に多いのでありまして、鎌倉以後に於て專ら之を用ひたやうであります。併し先にもお話した平等院の鳳凰堂の尾廊の窓は是が使つてありますが、是は年代が疑問にされて居りまして、當時のものであるか、或は後世のものであるか分りませぬが、大抵の塲合鎌倉以後に用ひられたやうであります、次いで圓窓などを設けるやうになり、段々變化し復雜になつて、禪宗建築などには色々な形のものを用ひるやうになつて參りました、次に斗拱でありますが、一番古い飛鳥時代には所謂雲斗雲肘木でありましたが、次の時代になると、雲斗、雲肘木が無くなつて、普通の斗拱になつて參ります、尙ほ斗拱の構成も色々ありまして、最も簡單なのは舟肘木(肘木だけ)で、次は大斗肘木、次は三斗、出三斗、即一手先二手先と云ふ風に、段と複雜になつて參りまして、唯今の所、遺物の上から申しますと、天竺樣のものを除いては、四手先が一番多いやうであります、天竺樣は一名大佛樣とも申しまして、奈良の大佛殿或は南大門の如き其例であります、南大門は鎌倉時代のものでありまして、大佛殿は鎌倉の樣式を取つて元祿に再建したので、樣式は矢張り天竺樣になつて居ります、是は其構造上手先が非常に長く出るのでありまして、七手先まで出て居ります、次は擔廻りでありますが、垂木は最初一重でありまして、それが二重になり、三重までであります、而して垂木の斷面は最初は角であります、即ち法隆寺の如き飛鳥時代の建築は一重であつて角であります、それが白鳳時代になりますと、二重になり、地垂木が、圓であつて、其外の飛檐垂木が角であります、それから更に圓の垂木が無くなつて、何れも角垂木ばかりになります、それで斷面は圓もあれば、角もありますが、もう一つ複雜になりますと、六角形のものがあ

は横緣の右隅から緩やかに波線を描いて靜かに左へと伸びて行き、そして横緣の左端にまで及んでゐる。門の扉から兩方から合するその直ぐ上に施された模樣ならば、横緣の兩端から中央に向つて蔓が伸びて來るのが自然であらう、否それが一の型であらう、況やその上には大きな透し彫があつて、それは中央に松を挿んで二羽の孔雀が互ひに向ひ合つてゐる光景なのであるから、その左右向ひ合ひの孔雀と同じく左右向ひ合ひの扉との間に單に一方的傾向を示す長い葡萄の線が横になつてゐることは、如何にも莊重な唐門の氣分を破るものといはれやう。但しそれだけそこに自由があるそしてその葡萄蔓は全然實寫的でもなく、また全然裝飾化したものでもない、兩者の中間である。それは建築に附隨した裝飾でありながら、なほ建築の構成的氣分に對して一種の裏切り者となつてゐる。大名の勢力に雌服しながらも、金銀の力に驕り昂つた新興の町人の意氣がそこに窺はれないであらうか。町人文化の勢力が著るしく發達した新時代の傾向は、夙くも大德寺唐門の葡萄彫刻に認められると思ふ。私はこの意味においてこの彫刻に無限の興味を感ずるのである、そしてそこに現はれた自由の氣分はその他の桃山時代彫刻の各部について味はふことが出來る、京都北野天滿宮の彫刻や竹生島觀音堂の彫刻、更に仙臺大崎八幡の彫刻の如き、例を擧ぐれば限りがない。そこに一貫した類型打破の自由の氣分は、即ちルチサンスの精神であり、また將來の文化を代表すべき町人の意氣でもあつた。

× ×

ります、それは三軒の地棰の場合で、二軒の場合は六角のものはありませぬ、奈良の興福寺の北圓堂の地垂木は即ち六角になつて居ります、次に大分話が細かくなりますが、垂木の割方であります、最初は『しげ垂木』と云つて、垂木が細かく入つて入るそれには『はんしげ』とか色々細かいことがありますが、それは略しまして、先づ『しげ垂木』から極く粗く入つて居る『まばら垂木』それから『ふきよせ』と云つて、垂木を二本列べては一本飛して行くと云ふやうにやつたものがあります、又擔の『反り』も色々變つて來て居るのでありまして、初は『しんそり』が多いやうであります、詰り擔が四間なら四間ともすべて反つて居るのであります、それが後世になると、兩方の鼻の方だけ擔を反しらい、眞中の方で水平に收めます連續した非常に長い建物の場合にはどうも眼の錯誤に依つて、眞中の方が水平に見えないで、反つて高く、所謂波狀を畫いて居るやうに見えます、それが心から反らしてあると、非常に感じが可いのであります、次に屋根でありますが、屋根の形式は前述の通り四注、寶形、入母屋切妻と云ふ風にありますが、材料は初は茅葺から檜皮葺、板葺となり、佛敎建築が入つてから、瓦葺なるものが行はれるやうになつたのであります、而して瓦葺になつた、初には棟の兩端に所謂鴟尾を付けました、前述の此處(法隆寺)の金堂の玉蟲の厨子の屋根が鴟尾が載つて居ります、それは最も古い形式のものでありますが、鴟尾の形も後世になると段と變化して參りまして、遂には鯱鉾と云ふやうなものも出來て來ましたが、はじめはそう云ふものでばなかつたのであります大抵鴟尾を載せて居つたのでありますがそれが又一面に於て鬼板とか獅子口と云ふ風に變化して來ます、次に構造の上で申しますと、木材の使ひ方は日本建築は大抵垂直或は水平になつて居りまして、斜材は殆ど用ひないやうであります、尤も尾垂木のやうなものは斜材と見れば、見られないこともありませぬが、大抵垂直或は水平に組んで居るやうであります又裝飾はどうかと申しますと佛敎建築が入りましてから、主として伽藍の內部殊に內陣に多く裝飾をしたやうであります即ち壁畫であります、柱だけに繪を畫いた場合もありますし、或は壁面だけに畫いた場合もあります、現に飛鳥時代の建築として此法隆寺の金堂の內部には有名な壁畫が畫いてあります、今見らるゝ所の大きな面の壁畫のみならず、上部の小壁のやうなものでも、以前は悉く壁畫で埋められて居つたのでありますが、修理の度毎に其上を塗り直すとか、或は他のものを塗つたりして、分らなくなつて居りますが、內部の木部以外の壁の部分には全部裝飾をしたのであります、或は天井なんかの木部に於ても所謂繧繝彩色を施して居つたやうであります、其彩色の模樣は所謂『はうさうげ』とか或は蓮華のやうな矢張り佛敎に因んだもので、今まで引續いて專ら用ひられて居るやうであります。

餘談が餘り長くなつたやうでありますが、是から愈々飛鳥時代の本題に入らうと思ひます、併し一々細かく話せば限りの無いことでありますから、唯其要點だけを申上げて置いて、後は又實物に付て一々說明したいと思ひますから、其お積りで、どうぞお聽きを願ひたいのであります。

先に飛鳥時代の建築は朝鮮の百濟樣の形式を傳へたものだと申上げましたが、其當時の建築は他にもありましたけれど

も、現存して居るものは極めて僅でありまして、それを茲に列擧して見ますと、此法隆寺には四棟ありまして、中門、金堂、五重塔、廻廊がそれであります、又是より北或は東の方に行きますと、法輪寺、法起寺と云ふ寺がありますが、其處の三重塔が共に飛鳥時代の建築であります、それ以外には此樣式の建築は見ることは出來ないのであります、尤も此法隆寺の建築は寺が出來てから後一度燒けて再建したと云ふ說もありまして、所謂再建論が一時非常に喧しかつたもので、今猶ほ解決が付かぬやうでありますが、歷史家の方は記錄に依て再建論を唱へ、關野博士の如き實際家は實物の上から、是はどうしても燒けて居らぬと云ふ事を主張して居られるやうであります、それは皆樣も既に書物に依て御承知になつて居ることゝ思ひますが、一口に言へば、記錄の方では、日本書紀に燒けた事が書いてあります、併し再建したと云ふことは出て居りませぬ、所が七大寺年表と云ふ書物には燒けたことは書いてはないけれども、和銅年間に法隆寺を造つたと云ふことが書いてあります、即ち一方の書物には燒けたことが書いてあつて、一方の書物にはそれを再建した事が書いてある是は燒けたに違ひない、現に此法隆寺の金堂に於ける壁畫は飛鳥時代のものではなくて、其次の白鳳時代（和銅頃）のものである、是は時代が違ふ、どうも可怪しいと云ふのでありますが併し實地家の方から云へば、何も建物と同時に壁畫を畫く必要はない、後に壁畫を畫いたものと見れば可いと云ふのであります、兎に角此時代の違ふことは總ての人が認めて居るのでありますが、何もそれだけに依て疑問を起す必要はないのであります、又塔の中に釋迦の一代記に因んで塑像がありますが是も所謂天智九年に燒けて和銅に再建したと云ふ和銅時代の形式を有つて居る是もどうも可怪しい又中門に仁王が立つて居りますが、其中門は飛鳥時代の建築がありまして仁王は矢張り和銅のものであります、それは記錄も明にさうなつて居りまして、總ての人が認めて居る所であります、併し金堂に於ける壁畫の例の如く後年にそれ等のものが造られたものと見れば、敢て差支ないのであります、一方又實物の上から關野博士の專ら唱へられます所は所謂尺度の研究からであります、尺度は大化の改新までは朝鮮の所謂高麗尺を使つて居つたのでありまして、其後は所謂唐尺になつたので、其間に差があります、所が高麗尺で測つて見ると比較的完數を得て、餘り端數が出ないのでありますが、唐尺で割つて見ると割切れない、端數が澤山出るのであります、それで燒けたものとすれば、どうしても再建した時代の尺度を用ひる必要はないと云ふ結果になります、それで此論文が發表せられた當時は大分一方の再建論者の方が痛擊を蒙つたのでありますが、併しさう云ふ事がないと云へない或は前の尺度が殘つて居つて、それを使つた場合があるかも分らぬと云ふ風に言つて居るのでありますが、又そればかりでなく燒けたものならば、其燒けた所から燒けた瓦であるとか、或は土や灰のやうなものが出なければならぬ、そこで關野博士は金堂の或部分を掘られたのであります、我々の今居る此講堂の建物は元此場所にあつたのでなく、もう少し南の方にあつたのでありますが、藤原時代の初に於て元あつた北室（僧坊）や鐘樓などと共に燒けたのであります、所が幸にして他の金堂とか、塔、中門、廻廊等の大部分には及ばなかつた、それで其燒けた塲

所を掘つて見ますと、燒土燒灰が澤山にありますけれども金堂塔中門並に廻廊の燒けない部分には、殊に最近の修理の際に、廻廊の地盤などを引繰返して見ましたが、一向燒けた痕跡が無かつたのであります、又金堂の修理をした時に屋根の上から飛鳥時代の完全な瓦が出ました、建物が一度燒けたならば、そんな完全な瓦が存じて居る筈はないと云ふ事になるのでありますが、今に於ても猶ほ再建論者、殊に京大の喜田博士の如きは記錄に依つて燒けたと云ふ事を主張して居られるやうであります、併し現在の狀態ではまだそれ以上に何等の新發見もありませぬけれども、今度二十九萬五千圓で防火水道設備をする事になりまして、伽藍の周圍に鐵管を埋設し防火線を東西兩院に於て八十何箇所設置することになつて居ります、勢ひ各境內に亘つて掘返しをしなければならぬ事になりますが、其結果或は何か新發見を得られはしないかと云ふので、一部の人々には非常に好奇心を以て期待されて居るのであります。

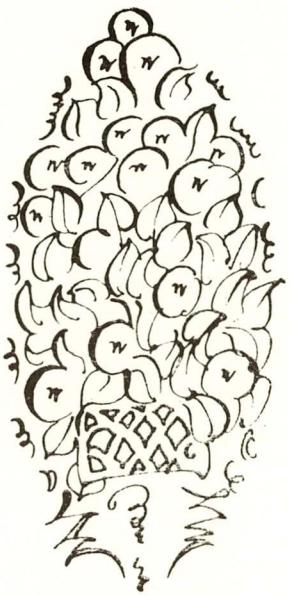
八幡山

木たかき松に

はね白たへに

ゐる鶴の

み雪ふるらし



大正前期の建築

明治大正に於ける建築觀（四）

增山新平

明治四十五年七月三十日は叡聖文武にして盛業古今に匹なく、大業東西に竝びなき明治天皇の龍駕騰仙し給へる日にて國民の終生忘るゝ能はざる年なり、回顧すれば明治四十五年間に帝國のあらゆる文物は日に月に進み、その進展と異常なる變化は世界の驚異とする所にして、この半世紀は昔日の數世紀の成果にも比すべく、建築界もこれに從つて發展し、洋式の移植をなし、模倣を完成し折衷を試みて、明治時代はその全部を擧げて洋式攝取に努力せるものなり。大正の改元は吾人の自重自覺を嚴肅に內省せしめたる動機となり、樣式手法の上には著しく同化的の傾向表はれ構造方面には鐵骨構造の上に更らに鐵筋コンクリートの鑄造的構法を學びて實地界に應用し材料方面にもタイル、空胴煉瓦、栗田石堅山石等の軟石利用の工夫を試み、大小の建築陸續として成るの盛觀を呈し建築界に異常なる活躍を示せる時なり。

（一）セセツシヨン派の流行

十九世紀末に英國に於てウリアム、モーリス等の企てたる工藝美術に對する新運動は建築界にも革命的衝動を與へ、間なもく佛蘭西にアールヌーヴォーの新樣式となりて現はれ、これと對立して墺太利にはセヽツシヨン派の運動興り、獨逸を風靡し、大陸を捲席せり。墺國にはオツト●ワグネルを先驅としてセヨフ●オルブリヒ及びヨセフ●ホツフマン、コロ●モーゼル等の創造的天才輩出し新思想より出發せる新建築を出現せしめたり。此の運動は積極的に新時代の藝術を創造せんがために、總ての過去の形式的傳統とあらゆる拘束とより分離して近代の複雜なる社會生活の要求に完全に適合する新建築を打ち立てんとするにあり。

この主張とこの流派による樣式は日本國內に傳來して多大の共鳴を得、明治時代の模倣に倦き、傳統藝術直寫の煩に堪へざる當時の技術家は、大旱に慈雨を得たる如くに競ふて新藝術を迎へたり。

當時セヽツシヨン流行の狀態を回想すれば、殆んど無批判に攝取せられたる有樣にて、家具、調度、は云ふに及ばず、裝身具等の工藝品に至るまで一切のものを擧げてセヽツシヨン化せり。況やセヽツシヨン建築を標榜する主義は藝術の獨立傳統よりの分離舊型の打破、箇性の表現、藝術的創造等の主張を叫びければ、新進氣銳の士の意に投ぜずして置かざる

時流となり、その清楚なる表現と單純なる工作法は我國人の趣味にも適ひたるためならん、然れども餘りに急激なる攝取は、セセッション運動の精神を咀嚼する暇もなく、多くの人々は單に外形に囚はれ表面的の早合み込みなりければ、却つて意匠的墮落の作品を遺したる點なきに非らず。

大正三年三月には大正博覽會を東京上野に開催せり、この博覽會は明治より大正へ移りし國民的紀念となさんための意圖を有したれば、明治年間の總決算ともなり、大正の將來に進まんとする我國文化の反映とも見るべく、發足點ともなるわけなり。而してこの博覽會の建築は當時の氣分を現したるものにて、その第一會場は新流行となれるセセッション式を採用し、これに中條精一郎氏の新意を加味せるものにして、當時としては一驚異なりき。第二會場は、池田稔氏の計劃になり外容は主としてルネッサンス式の骨子に回教式の手法を加へたるものにして、東洋趣味を發揮し、第一會場に於る新興のセセッション式と對峙し別趣の効果を與へたり。これを第五回覽會及び勸業博覽會の諸建築の如き、ルネッサンス樣式を踏襲せるものに比すれば設計者の自由意志の加はれる點に於て一段の進歩と云はざるべからず。この博覽會以後に興れる大小の建築は多少なりともセセッションの影響を受けざるものなかりき。

(二)懸賞募集技競と技術の發達。

明治後期に於る洋式建築に對する理解は思索の上に覺醒的機運を醸成せる事は前述せる如くなるも、之れに反して實際の建築は忠實なる模倣巧みなる復寫にすぎざりしが、この期の終りに於て始めて臺灣總督府廳舍の設計を懸賞募集せるに始まり、大正期に入りては主なる紀念的大建築の多くは懸賞募集によりたれば、青年建築家は發表の機會を與へられ、競ふてこれに應募し、回を重ねる毎にその技術向上し、其の何れの競技の結果も相當の成績を收めて、斯界の進歩を促したることは非常のものなり、大正四年募集の明治神宮寶物殿以後は殊に優秀の作現はれ、獨創とは云ひ難きも、著しく吾人に親しみ易き表現となり單なる洋式模倣とみなすこと能はざるなり。而してこれらの當選圖の內には募集の條件に能はざるものもあれども、大局より見て良結果を得て、後進を誘導し多數の追從者を得たることは、意匠的方面の發達を促進せしめたること甚大なり。然れども一方には所謂る懸賞型なるものに隨し、主觀的藝術心を傷つけたる點なきに非らず。

これらの當選圖は實施を目的としたるものなれその多くは經費の都合と云ひ、實際案として不適當と稱して改廢せられ僅かに臺灣總督府廳舍明治神宮、繪畫館、大阪府廳舍のみは原作を重んじて施行せられたるの外優秀案にして葬られたるもの多きは遺憾なる事なり。次ぎに年次を追ひ列記すれば、

臺灣總督府廳舍	長野宇平治氏當選 小川　陽吉氏同	明治四十二年
大阪市廳舍		大正　元年
橫濱紀念館	福田　重義氏同	大正　二年
三菱合資會社	木子幸三郎氏同	大正　二年
大阪市公會堂	岡田信一郎氏同	大正　二年
明治神宮寶物殿	大森　喜一氏同	大正　四年
明治神宮繪畫館	小林　正紹氏同	大正　七年
議院建築	渡邊　福三氏同	大正　八年
大阪市美術館	前田健次郎氏同	大正十一年

大阪府廳舍	平林岡本二氏同	大正十二年
神戸公會堂	前田、岡田、二氏同	大正十二年
早稻田大學大隈侯紀念大講堂	前田岡田二氏同	大正十三年
大連停車場	小林眞治氏同	大正十三年
震災紀念館	前田健次郎氏同	大正十四年

(三)、歐州戰亂後の趨勢

大正三年七月、ブルガリアに端を發せる歐州の大戰は、世界をあげて戰亂の巷と化し、資本主義による物質文明は大なる打撃を蒙り、日本に於る建築界も一時經濟界の悲境に患らせられ、大なる進展を示さゞりしが、戰亂の永續は東洋の財界を好況に導き、會社工場の增設さるゝもの激增さるゝ有樣にて、この方面の建設は俄かに活氣を呈せり。然れども大正七年末休戰條約成立せる頃より思想界の動搖は各方面に影響を及ぼして民族自決、民主々義、民衆政治、自由平等、階級撤廢勞働運動等の社會主義的傾向著しく擡頭し、資本主義の打破、生活の改善、文化生活、社會改造等の叫びは猛然として起り、これがため我が建築界もこの颶風に卷込まれ、都市計畫の方策、住宅改善の問題等從來觀られざりし方面が重要なる社會問題となれり。新樣式の方面にも過去五十年間專心に築き上げたる傳統的西洋建築の模倣技術に倦き足らざる思想起り建築の內容に於ても外觀の樣式に就ても、新境地に進まんとの傾向生じ專門家は建築の本義に深く突き込みて熟慮研究を要するときとなり、社會も又建築に對する理解を增し批判を試み、論評を披瀝する時代となりたれば、評論の自由と創作の自由と相俟つて着々と地步を築き、停止する處を知らざる有樣なり。

斯くの如き趨勢となりたるため、歐州戰亂後の建築界は實に多種多樣の作品現はれ、思想界の混亂を具象化せるにも等しく、この雜然たる有樣を評して、現代建築は無方針にして統一なしと嗤ふ人あれども、建築は社會の反影と見れば世態が漸次複雜となり行くに伴ひ建築も複雜化するは當然のことなり。建築の統一を夢見たるは世紀を隔てたる過去の事に屬す。今後は自由なる現代人の思想の如く、外形的には種々の變態現はるゝ事疑ひなきも、その內容的には新時代としての統一を見出すことを得べく、通則を確立し得べきことゝ信ず明治後期に於て、專門家の間に論議せられたる、我國將來の建築を如何にすべきかといふ論爭は、我國建築界に覺醒を促すべき動機となりたるが、それに對する具體的運動は起らず模倣につぐに模倣を以つてし、新樣式と云ひ、獨創藝術と云ふも、その根源は歐米に求めたるものなりしが、歐州戰後にはその數は僅かなりと雖も、日本それ自身の工夫になりたるもの生じ、又嚴密に云へば、創作とは云ひ難きも大部分に於て我國の表現による建築の事實として現れ來り、先きの論爭に對する解答案とも見るを得べし。この種の主なる例は日本在來の建築を洋式の構造により取扱ひたる流派と、セゝッションより脫化して、新運動の結果より生れたる建築なりとす前者は明治神宮寶物殿の計劃案より產出し、永續性と普遍性は認め難きも、今後研究さるゝ餘地あるべく、後者は時流に投じて新進技術家の間に共鳴を得て漸次傳統樣式の建築を驅逐せんとしつゝある青年技術家一派の作なり。而して又都市の急激なる發展は高層建築を要求する處となり、東京、大阪神戸等の商業地帶は競ふて大建築の完成に努めたり。

(四)平和博覽會と分離派

歐州大戰の影響による人心の動搖もやゝ沈靜に歸し、世界は擧げて文化復興に努力する時期となり、我が國は一躍して列強の間に肩する國運に向ひ、國民としての自信も興り、獨り建築界のみならず洋式尊重の模倣的態度にあきたらず、新日本の文化を創設すべき機運鬱勃として起れり。而して大正十一年春に至りて平和復興を紀念すべき博覽會を、東京上野に開催せらる。この博覽會の建築は、大正九年新らしき運動を起せる分離派建築會の人々によりて計劃せられ日頃の理想と主張とを現實の上に具象化して世評に訴へたるものなり。故に博覽會の一時的假建築として看過するに忍びざれば短評を試みて同派の態度に言及せんとす。

分離派同人の內にも個々の主張は一致せざる點あるは當然の事なれども、會として標榜する宣言は同派の態度と見るを得べく、次にこれが大要を紹介せんとす。

過去建築圈より分離し總ての建築をして眞意義あらしめる新建築圈を創造せんがために

過去建築圈に眠れる總てのものを目醒まさんがために、溺れつゝある總てのものを救はんために

我々の此理想を實現のために、我々の總てのものを悅びの中に献げ、倒るゝまで死に至るまで期して

斯の如き宣言を揭げて、建築と云ふものを一つの藝術と考へざれば、第一の忠實を缺きたるものとなし、而して藝術と云ふものは何等の說明なくして人々の直觀にひゞき來るものならざるべからずとなし、傳統に促はるゝ在來の建築家の態度を非難し、あらゆる既成樣式より分離して新境地を開拓し創作に價値を見出すといふにある。

博覽會の建築が果してこれらの凡てを實現せるかは疑ひなき能はず、純一の美を求めんとして餘りに興奮にすぎ、主觀の美を歌はんとして工夫の亂用に墮り、實在の環境を無視せる點なきにあらざるか、然れども、堀口捨己、瀧澤眞弓氏等を中心とする若き建築家の純眞なる心の動きは少からず、吾人に感興を與へ、豐かなる作者の情調を面と線との上に表はして淸楚明快なる音律を聽かしむるが如き、情感と信念より生れたる創造の動きは多少なりとも認めざるべからず。而してこの派の主張が獨墺セゝッション派の運動に似たる點多々あるにせよ、世人に深き印象を刻みて、日本建築界に新運動の先鞭をつけ、建築評論界を賑はしたる事は見逃すべからざるなり。

(五)建築法規の制定

世界大戰以後我が國の大都市は、工業の發達に伴ひ、人口の急激なる增加は所謂過群狀態を呈し、都市生活の不衞生と危險加はりたれば、建築家の建築は今や重大なる社會問題となり、國家の重要なる政策となり、こゝに於て都市計劃の必要生じ、交通、衞生、防火、建築の方面より立案を迫られ、大正八年には都市計劃法及市街地建築物法を制定し、同九年には市街地建築施行法及同規則を實施し、都市の體型を整ひ建築物の取締りを嚴にせり。尤も部分的の法令は明治後期に於ても公布せられたり。先づ明治三十三年十一月には演劇取締規則、三十八年十二月には倉庫取締規則、四十二年には大阪府令として建築取締規則等實施せられたり。

斯くの如く明治期に於て建築は個々の構造物に過ぎざりし

ものが、大正期に入りては集團的に考へられ、都市生活に立脚してその機能を高め、福址を增進せんとする目的のために商業地域、工業地域、住宅地域を設定し、公園及び道路を擴張し防火地區を指定するなどの都市體堅に就いて各方面の基礎的劃策を立案せり。然れどもこれらの法の精神を實現せしむるは今後のことに屬し、現下の狀態は我國何れの都市も、諸外國に比して甚だ幼稚の程度にありと云はざるべからず。少なくとも半世紀の年月を俟たざれば整美域に達せざるべし

(六)鐵筋混凝土と高層建築

明治後期に於て鐵骨構造の建築は著しくその數を增し、次第にその形態尨大となる傾向生じたるが、明治三十八年鐵筋混凝土の構造により始めて東京倉庫株式會社神戸倉庫の建築を試みらるゝに及びて、この構法は經濟的にも耐火耐震の上にも理想的性質を有するを以つて、忽ち社會に歡迎せられ、大正期に入りて建てられる大小の建築は概ねこの構造法を採用せり。而して鐵骨構造も亦耐火の必要上鐵筋混凝土を以つて外裝を被覆すること行はれ、ために堅牢と耐火・耐震の三つを具有することゝなり、如何に尨大なる建築の實現も可能となりたれば建築構造上に劃期的革命を齎らしたり。時宛も歐州大戰の講和なりたる時なれば、日本の財界は空然の好況を呈し、事業は興り、物價勞銀は騰貴し、地價の昂騰は最も激しく、從つて都市の近代的發達急激となりたるため、建築もこの社會事情に應じて益々立體的となす方針を取り、遂に米國諸都市の如き高層ビルデング建築の流行とを見たり。先づ大正七年には東京驛頭に海上ビルディングの建築成り。その後に工を起せるものは大正十一二年頃より急激に增加し、東京驛前の三菱ヶ原は、明治後期に於て寥々たる草原なりしものが、高層建築を以つて埋められ、帝都の中樞地區と化せり。而して大阪に於ても大正七年に中央公會堂を建てたるを始めとし大正十年の市廳舍、大正十二年の堂島ビルディング等の大建築を見たり。この高層建築の多くは事務用室を主として、店舖用室、ホテル、食堂、倶樂部用室等を包含し數百室を有するものありて、一建築物はさながら一小都市をなす有樣なり。次ぎにその代表的建築について略說せんとす。

丸の內ビルディングは大正十二年に竣工し、曾彌中條事務所の設計なれども米國フラー會社の施工になり構造は鐵骨鐵筋混凝土造にて、外裝にタイルを張り、地階共にて階數十階建坪二千二百坪延二萬坪の尨大なる建築にて、常時一萬人を收容し得るものなり、かゝる建築は明治初年には無想だもせざりし事にて、東京丸の內一帶及び銀座通、日本橋通の外觀的變化は、歐米の諸都市を思はしめ、江戸時代の面影はあとかたもなく破壞されたり。これらの建築は實用と構造の堅實を第一の條件となすを以つてその樣式としては、米國風の高層建築を基調とせる體型をとり、その細部にはルネッサンスゴシック、ローマネスク、スパニッシュ等の歷史的又は近代的意匠を以つて簡單に裝飾せるものなり。こゝに於て建物の外觀は樣式裝飾を主じたる時代は去り實用的構造本位に傾けり。

日本郵船會社本社は大正十二年に竣工し、曾彌中條事務所の設計に係り、丸の內ビルディングに隣り四十間道路に面し間口二百八十八尺奥行百五十三尺の敷地に建坪千二百二十坪の鐵筋コンクリート構造の地階付の六階建にして、軒高九十

九尺六寸餘　床鐵筋コンクリート造、屋根陸屋根、外觀。腰廻花崗石、腰蛇腹迄張石夫以上化粧煉瓦及テラカッタ使用、總延坪七千九百四坪餘、地階は煖房機關室、印刷室、自働車置場其の他に一階は全部營業室、六階は大小食堂、倶樂部室厨房、配膳室、其他二三四五階は全部事務室に當て、昇降機九個の設備あり。

東京會館は大正十一年に成り、清水組技術部の設計に係り位置は三菱第六號地東西二十七間、南北二十八間、東は帝劇に西は商業會議所に接し、建坪五百十三坪の地階附五階建の鐵骨煉瓦造、外部化粧煉瓦貼付、軒高八十尺餘、屋根陸屋根なり。各階主要室の配置は次ぎの如し。

地階　四三五坪九合、煖房機關、電機室其の他使用人室等あり、

一階　五一二坪　常食堂、酒場其他一般公開的諸室
二階　五一二坪　普通宴會場諸室
三階　五一二坪　舞踏室、日本室客室、其他
四階　五一二坪　大饗宴場其他
五階　五一二坪　ホテル專用寢室
屋上階五五坪餘　寫眞室、花壇

日本工業倶樂部會館は大正十一年に成り、横河工務所の設計に係り、永樂町二丁目一號地に建築され鐵筋コンクリート造五階建、建坪四百五十八坪、軒高七十五尺五寸最近複古式の建築なり。内部設備は倶樂部使用部分と貸事務室との二つに分れ總面積二千百十一坪の内一千五百三十坪を倶樂部に當て、五百八十一坪を貸室とせり。

倶樂部には大食堂、會議室、大、中、食堂、談話室、球戲室應接室、寢室、昇降器二臺、大階段一ヶ所、小階段三ヶ所とを有す。

日本石油會社は大正十一年の建築に成り、營團中條事務所の設計に係り、三菱二十一號館に隣る、間口百六十一尺、奥行百五十四尺の敷地に建坪六百四十三坪餘の鐵骨煉瓦造の地階付七階建、軒高九十七尺五寸、床鐵筋コンクリート、屋根防火陸屋根、外觀正面北面及南面地上六尺五寸迄花崗石、腰蛇腹地上三十三尺迄堅石、其の上七十尺迄化粧煉瓦張付其の上九十四尺迄テラカッタ貼付バラヘット堅石、延坪四千六百六十七坪地階は煖房機關室、其他に一階及二階は貸銀行に當て、三四五六階は會社及貸事務室として使用、七階は食堂、料理室に當つ。三方に入口、一ヶ所宛、昇降機五箇設備せり大正十一年に竣工す。

三菱銀行は三菱地所課設計に係り東京府廳舍前に位置し、鐵骨石造の地階附四階建、建坪約八百坪、軒高約六十尺、正面中央八本のアイオニック、柱列は、柱身四十尺、徑五尺一寸の花崗石積上げとし、内部は殆んど全部を營業室に當て、その廣さ間口百四十尺、奥行七十尺、天井四階迄全部吹抜きとして、天光を採り、腰廻りは北木島産花崗石張付、それより上部天井迄米國製テラカッタ張り、床は營業室、客溜り共伊國産大理石を敷込み、蓋し丸の内中最も豪壯なる建築なり

（七）住宅改造の機運

明治期に於ては宮室、官衙、銀行、會社等の官廳及び商業に屬する建築のみ重要視せられ、住宅の如きは富豪の邸宅を洋館とせる位にて、一般人の住宅は殆んど省みられざる有樣なりしが、大正期に入りては生活改善の聲喧しく寧ろ國民の

中堅たるべき中流以下の住宅改良に注意を向けられ、大正四年に於て報知新聞社は中産階級を標準とする住宅の間取法を懸賞募集し社會に公表せるを始めとし、その後大正六年には大阪朝日新聞社は臺所の改良案を募集するなど、住宅問題は漸々世人の注意にのぼる、歐州戰亂後は勞働問題起り、勞働者及び細民に適當なる住家を供給するの急務なることを主張せられ、市營住宅、共同宿舍、職工住宅の建設に手を染めたり。こゝに於て從來ブルジョア階級が宏大なる邸宅を獨占せるは甚だ不都合なる事として非難せられ、その結果として富豪は庭園を解放して公園とし、別邸を寄附して小住宅の建築に資する人々もあらはれ、住宅の問題はかくして社會問題たらんとせり。

大正十一年春の大正博覽會には十數個の改良小住宅を建て文化村と稱して具體案を示し、同年秋には大阪建築協會主催のもとに、大阪近郊の櫻ケ岡に住宅博覽會を開き數十個の改良住宅を造り、住宅に關する一切の施設を社會に示しければ住宅建築も漸く改善の端緒を開き大小の改良住宅は年々增加し、住宅に關する雜誌著書は一時にその數を增せり。然れども、これらの住宅は外觀の表現にのみ囚はれ、排水、便所、臺所、浴室等の住宅機能に關する本質的研究の不充分なりしことは文化住宅の本義を誤解せしめたるの觀なきにあらず。

住宅は個人の私生活を營む處なれば、西洋と我國とは自からその生活樣式に於て長き習慣の結果、非常なる相違あれば急激なる變化は實際上不可能のことになれば、漸次の改善を俟たざるべからず、この點より考ふるときは二重生活の不經濟を伴ふにせよ、折衷調和の道程を進むを以つて順當とせざるべからず。明治初期には小數の純洋式住宅を外人の手によりてなされ、中期以後は接客用室の一部分を日本住宅に附屬せしめたるが、大正期に入りては外觀を洋式又は日本式に統一し、室内のみ和洋の室を取りたるもの、又融然として和洋の樣式を調和せしめたるもの等現れければ、明治期に比して大正期は隔世の進歩と云はざるべからず。

現今の大都市は上水、瓦斯、電氣等の施設は大かた整ひたるも、汚れを放流すべき下水施備のなきことは日本住宅改善の大なる障害なりとす。

(八)大正前期の建築實例

洋風攝取の我が建築界も、維新以來早や半世紀の年月を過ぎ、搖籃期、幼年期、少年期を明治年間に送りて、大正期に入れるものなれば、大正期は青年時代にも比す可く、元氣あり動きありて活氣に滿てることはその數に於て、その大さに於て、異常の進展を示し、僅か大正十二年間の建築は、明治四十四年間の全建築にも匹敵すべく、或は遙かにそれを凌駕する有樣なり。

次に年次を追ひて實例を列擧すれば、

△慶應義塾記念圖書館	(東京)	曾禰中條	大正元年
早稻田大學恩賜記念館	(東京)	德大寺氏	大正元年
東京帝國大學正門	(東京)	東京妻木頼黄氏	大正元年
△日本赤十字社	(東京)	河合浩藏氏	大正元年
愛國生命保險會社	(東京)	コンドル氏	大正元年
東京倶樂部	(横濱)	片山東熊氏	大正二年
△神奈川縣廳舍	(大阪)	長野謹吾氏	大正二年
安田商事大阪支店			

所澤飛行場絡納庫　（東京）田村鎭氏內田祥三氏　大正二年
東京驛　（東京）辰野謹吾氏　大正三年
桃山御陵　（伏見）內匠寮　大正三年
△村井銀行　（東京）吉武氏　大正三年
△森村銀行　（東京）田中寅氏　大正三年
△東京帝國大學新講堂　（東京）　大正三年
△高田商會　（東京）レツツエル氏　大正三年
三井銀行京都支店　（京都）鈴木禎次郎氏　大正三年
豐多摩監獄　（東京）司法省　大正四年
大阪俱樂部　（大阪）野口孫市氏　大正四年
日光山寶物陳列館　（日光）大江新太郎氏　大正四年
石原時計店　（大阪）三橋四郎氏　大正四年
曾根崎演舞場　（大阪）松本禹象氏　大正四年
福岡縣廳舍　（福岡）矢橋賢吉氏　大正四年
△慶應圖書館　（東京）曾禰中條事務所　大正四年
△新橋驛及橫濱驛　（東京）　大正四年
桃山御陵東陵　（伏見）片山東熊氏　大正四年
東京銀行集會所　（東京）松井貴太郎氏　大正四年
京都市公會堂　（京都）　大正四年
山口縣廳舍　（山口）大熊喜邦氏　大正五年
大阪朝日新聞社　（大阪）武田吾一氏　大正五年
大阪控訴院　（大阪）司法省　大正五年
三井銀行神戸支店　（神戸）長野宇平治氏　大正五年
△大同生命保險會社　（東京）前田松韻氏　大正五年
△日清生命保險會社　（東京）橋本舜介氏　大正六年
△松坂屋　（東京）鈴木禎次郎氏　大正六年
住友銀行東京支店　（東京）日高胖三氏　大正六年
△三越呉服店　（東京）橫川民輔氏　大正六年
日本郵船神戸支店　（神戸）曾禰中條事務所　大正七年五月
海上ビルデイング　（東京）曾禰中條事務所　大正七年
中央公會堂　（大阪）辰野、片岡、事務所　大正七年

△如水館　（東京）中村順平氏　大正八年
大阪商船神戸支店　（大阪）渡邊節氏　大正八年
明治神宮社殿　（東京）伊東博士主任　大正九年
名古屋控訴院　（名古屋）　大正九年
三井物產大阪支店貸事務所　（橫河工務所）　大正九年
東京區裁判所　（東京）後藤慶二氏　大正九年
大阪稅關廳舍　（大阪）大藏省　大正九年
三越呉服店西館　（東京）橫河工務所　大正十年
大阪市廳舍　（大阪）片岡安氏　大正十年
樞密院廳舍　（東京）臨時議院建築局　大正十年
白木屋大阪支店　（大阪）清水組　大正十年
△加島銀行東京支店　（東京）前田松韻氏　大正十年
明治神宮寶物殿　（東京）大江新太郎氏　大正十年
明海ビルデイング　（神戸）谷中工務店　大正十年
△第一生命保險相互會社　（東京）辰野葛西事務所　大正十年
△日本工業俱樂部　（東京）田中寅氏　大正十一年
三菱銀行本店　（東京）櫻井小太郎氏　大正十一年
大川田中事務所　（東京）田中寅氏　大正十一年
△東京會館　（東京）清水組　大正十一年
帝國ホテル　（東京）米人ロイドライト氏　大正十一年
△日本石油株式會社　（東京）禰曾中條事務所　大正十一年
大丸呉服店　（大阪）米人ボーリス氏　大正十一年
高島屋呉服店　（大阪）岡田信一郎氏　大正十一年
灘萬ビルデイング　（大阪）青柳工務所　大正十一年
大阪毎日新聞社　（東京）片岡工務所　大正十一年
△丸の內ビルデイング　（東京）三葬地所部　大正十一年
△郵船ビルデイング　（東京）曾禰中條事務所　大正十二年
日本興業銀行　（東京）渡邊節氏　大正十二年
福井縣廳舍　（福井）八島震氏　大正十二年
堂島ビルデイング　（大阪）竹中工務店　大正十二年
山口銀行　（大阪）片岡事務所　大正十二年

日比谷音樂堂　（東京）市建築課　大正十二年
△千代田ビルデイング　（東京）　大正十二年
△印は震火災のためあるものは大破し又は燒失し或るものは小破壞に止まり復舊せるものもあり、

以上の實例が示す如く、大正に入りては洋式建築の明治年間に播種し、成育を見たるものゝ收獲期に移れるものといふべく、その種類に於ても多趣多樣のものの現はれ、その區域も擴張せられ、地方の都市にも及びたれば、明治初年に於る建築家の建築は今や社會一般より認められて國民の建築として社會に重きをなすに至る。而してこの期に建てられたる重要なる建築は日本の大玄關たる東京驛の建築、明治大帝を奉祠せる明治神宮の建築諸外國に於ける無名戰の墓を重大する如く、我が國民が尊崇おかざる桃山御陵の經營に心をこめたる墓陵の築造、目下工事中なる議院建築等は大正前期を紀念すべき大事業にして、米人ロイド、ライト氏になされたる帝國ホテルの建築は獨創の力強さを吾人に敎へ、東京驛頭のビルデイングの諸建築は大正年代の社會相を表したる點に於て重要なる事象なれば左に概說せんとす。

東京驛は、明治四十二年三月より工事に着手し大正三年十二月に完成せるもので、約十ヶ年の歲月と工費約二千萬圓を投じたる日本第一の大建築なり。建坪二千八百八十五坪延坪、七千二百四十二坪の鐵骨煉瓦三階建にて、その樣式は辰野博士一流の赤煉瓦に石帶を交へたる平凡なるルネツサンス式により、質實溫健の作と稱すべきも何等の精彩なく、壯重雄偉の趣きなく、平面の冗長に失し、昇降口の連絡不充分なる點など、兎角の

緣の下の力持ち（一）

武田五一博士

仕事と其準備との間には微妙なる關係がある準備なくして仕事を仕上げることは出來ない、基礎ありて初めて家屋橋梁の安全が保たれることは誰れも知つて居る筈であるが往々上部構造物のみを見て基礎を忘れて居る者があることは殘念なることである、美しく見えて居るアーチ形の橋梁は如何にも輕々と水上高く懸つて居るが其水面下に上部と略ぼ同じ位の構造物が埋め込まれて居ることを忘れてはならない、場合によつては數百尺も地下から基礎が築造されて居るものもある、巴里の市內第一の美しき橋と云はれて居る亞歷山三世橋と稱する橋は其張間實に二十二間であつてセイン川の一番目貰きの地點に架せるや至つて輕々と清楚な姿を見せて居るが其基礎は橋の長さと殆ど同じ長さだけ其の左右に擴げられて居ると云ふことである、建築物の基礎でも近來のやうに高さが四百尺五百尺と云ふ高さであると地下室も三層四層となり其基礎も橋梁と同樣な堅固な偉大なるものとしなくてはならなくなつて來た其經費の地點から云うても全工費の二割前後は基礎に注ぎ込まれて居るのは珍らしきことではない又建築物の足代にしても之亦其肝要なる點は敢て基礎に讓らない

大佛殿の修理の際の足代の代價約二萬圓であつたとは注意深き讀者は既に知られて居られることであらう、大抵如何なる工事でも工費の約一割は足代上屋等に費やされて居ると云ふことである、目に見える構造物を作るために其犧牲的に費やされ消えて居る努力は驚くほどのものである且又目に見えない緣の下の力持ちをなして居るものは之亦容易ならざるものがある彼の美しい氷山が其海水中に沈んで居る部分の僅か五六分の一しか水上に現はれて居ないのもよく其間の消息を語つて居る現在巴里市コンコルドの廣場の中央に屹立して居る有名なるルクゾルのオベリスクと稱する埃及の尖方石碑は其れを遠き埃及から巴里に運んで來るにはなか〳〵容易ならぬ骨折りであつたらしい、先づ立つて居る現場で其れを倒ふすとき其一角も一點も疵を付けないやうに知られて居られることであらう、大抵如何なる工事でも工費の約一割は

イル河よで曳いて來て之れを胴より二つに破れるやうになつて居る特別仕立ての汽船に積んで汽船を其場に繼ひ合はし地中海とビフケー灣の荒波を凌ぎて漸く巴里に陸上げをなし巴里市內のコンコルドの廣場で再び嚴重な足代を組んで之を建立したのである其方尖石碑の大きさは高さ七十五尺重さ四百噸と云ふ一本石である、まづ以て其骨折りの程度が分るであらう、此取り倒しと運搬に七箇月を要して其れを建てるときに僅かに七時間でよかつたと云ふことである其七時間の建て前工事に要して消えてしまつて居る七箇月の日子と其莫大なる費用と其の計畫をしたルバーと云ふ技師の骨折りは殆ど誰れも知らないで所謂緣の下の力持ちとなつて居た（次頁へ）

批評を招きたれどもかゝる大建築を邦人の獨力にて完成せしめたることは當事者の苦心と努力の結果にして、建築史上重要なる位置を占むべき著名の建築なり。

伏見桃山御陵は、明治大帝の偉業を曠古に傳ふべき大陵にして、大正二年一月工事に着手し、大正三年竣工せるものなり、形式は上古に於ける天智天皇陵に倣ひ上圓下方墳にして其の規模は東西七十間、南北八十五間、正南に面し、御影石の瑞籬を綾らし乾濠を穿ちて内廊を限り、更らに石の瑞籬と木柵とを以つて前面を圍繞す。正面に鐵扉を設け御紋章を附けたり、後方は土壘を以つて區劃し山を以つて自然の背景とす、又中央に御拜所御祭場を設けらる。周圍の陵域は宏大にして大路を開き、森林を構ひ、山腹の展望廣く、崇高の氣滿ち、嚴肅の感にうたるゝなり。

明治神宮は内苑外苑に分たれ内苑には神宮と寶物殿を置き外苑に葬場殿、紀念塔、繪畫館、憲法紀念館、競技場等を設けたり、社殿は日本曠古の明君にまします明治大帝、竝に昭憲皇太后の英靈を奉祖するものなれば當代の大事業にして、工營の組織人選も遺漏なきを歸し、愼重なる準備のもとに着手せられたり。先づ社殿の配置を見るに東京の西北代々木に地を相し、南面して流れ造の本殿あり、前面に祝詞舍、中門西北に寶庫を置き、透塀により繞る中門の前に拜殿、その前に南樓門を置き、樓の左右より透塀の複廊起り、複廊の東側に神饌所、便殿、西に直舍殿あり、塀の三方に東西北の神門を開く、更に外圍を綾りて玉垣を繞らし、四面に鳥居を置くこの外祓舍、手水舍、祭器庫、宿衞舍、神符授與所、等便宜の處に配置されたり社務所勅、使館は離れたる處に置かる。

本殿は大きさ桁行二十九尺七寸梁間二十九尺七寸を三間社流れ造りとし、一間の向拜を附けられたるものにて優雅典麗なる檜皮葺の屋根は勾配緩く曲線穩かにして平安朝時代の調子より出でゝ更に整美なり尙千木勝男木を加へたるも調和よく、細部の手法に至りては清楚明快なる

椽の下の力持ち（二）

武田五一博士

古い言葉であるが一將功成つて骨枯ると云ふ此萬骨を提供するのがなくては一將の功はなし遂げられない

外科手術が近來大に進歩して來て開腹術膀手術などさして危險視されなくなつたが其外科手術の成効と不成効とは主として其消毒の注意如何によると云ふことである其消毒に要する經費と勞力も手術其者に要するよりも大なるものがあると云ふことである茲にも亦隱れたる努力が多分に必要視されて居る

必竟今日科學的の成功の多くは其準備工程の完全となつたことを意味すると云うても差支へない、行き當りバツタリと云ひ又は「どうにかなる」主義と云ふのは此準備工程を無視した行動であつて文化人として愈々窮してしまつた最後に取るべき手段であつて決して誇るべき手段方法ではないのである。吾々が日常接觸して居る建築の技術方面に於ても此行き當りバツタリ主義のために數々の浪費をなし或は不滿足なる結果を得て居ることは珍らしくない、住宅建築の方面に於て最初の計畫設計を疎漏にし充分なる圖面も作らず材料の研究もせず或は建築家請負者の選定を誤り或は不眞建築業者の甘言に載せられて所謂完全なる準備工程をなさず輕卒に工を起し途中數度の設計變更又は模樣替へをなし最初の豫定金額の數倍の建築工費を支出しなくてならないことゝなつてしかも不滿足なる結果に終る例も決して鮮くない

多くの人の中に模樣替へに一種の興味を持て工事中善くても惡くても模樣替へをしなくては氣のすまぬ氣風の人もなくはないが之が少々病的とゝはれても致し方があるまい工事中の模樣替へは工人も決して心持のよいものではない、折角一生懸命に仕上げる仕事を破壞してやり直すのであるとは自信を持ち人格を多少とも持ち合せて居ると思うて居る職工なれば己が心血を注いだ仕事の模樣替へだのやり直しの度毎に面白くない氣持ちになるのは無理ならぬことであり自然よき腕を持て居る職工が建築工事に關係したがらなくなるのも致し方がない、又事實やり直しのため新に仕事をするより高價な工費を要せらるゝことゝなるのも亦無理からぬことである、起工前充分なる準備が出來研究が出來て居れば萬事故障なく進行して誰れもが愉快な心持ちで居られることゝなるのである。

線狀よりなれる彫刻錺金具を施し、現代の趣味高尚によれるものと云ふべし、拜殿は五間四面入母屋造りにして樓門は三間一戸なり、その他の殿堂も手法皆本殿に調和し全部素木の檜造にて極めて淡雅嚴肅にして崇敬の感を深くす。この工營の任に當てられたる主なる建築家は、伊東博士にして、意匠は、安藤時藏、大江新太郎の兩氏なり。

明治神宮寶物殿は懸賞當選圖案の實施を見ざりしことは遺憾とする人多きも、大正時代を代表すべき神社建築の偉觀として紀念すべきものなり、樣式は古建築研究の結果として生れたる、奈良朝正倉院の校倉造を主體として、これに飛鳥時代の手法を試み堂々たる外觀と堅實なる精神を表はさんとしたれば明治大帝の偉業と國運の隆興を表徵するものと見るを得べく、構造は當代の科學の粹を盡し、絕對耐震耐火の完全を期したれば、何れの時代にも表はれざりし恒久的神社建築を出現せしめたるものなり。今その概要を記せんに中央に百二十八坪の殿堂正倉を置き左右に東西倉を橋廊を以つて繫ぎ東廊の南に拜觀者入口をとる正面は德川時代に發達したる、名古屋門の形に天平式の中程に膨みある石柱を建て、ブロンズ製の舞樂蘭綾王の面を以つて柱頭を飾る正倉、東西倉は、床高二間の床柱、數十基を建て堂は皆この上に支へられ、四壁は校倉の木組を花崗石にて造り、鐵筋コンクリート壁の上に張る、軒は十五尺も突出せしめ日本建築屋根構造をその儘の形を表し、これを鐵骨を組み鐵筋コンクリートにて型を作りその上に銅板を被覆せしむ、橋廊にも鐵骨銅張りの美しき勾欄を附せり、要するに樣式は日本古建築の精をとり構造は現代の最も進步せる知識を鏤めたるものなれば、東西古今の技術を打つて一丸とせるものなり。

帝國ホテルは日本近代建築の偉彩にして、世人の論議に上り、注意の焦點となれる建築なり。建築は大正十一年竣工し工費六百萬圓を投じ、立體美術建築家として世界に名あるシカゴのフランク、ロイドライト氏の設計になる善惡共に批評甚だ多かりしもその表現の獨自なる點に於て一偉彩たるを失はず、東洋古代の精神に源泉を求め近代藝術の構成主義や立體主義の手法を取入れ、都會生活の自然化を高潮せるものゝ如く、十八九世紀のルネッサンス常用一派の流を汲む日本現代建築家に對する一大警告とみるを得べく、單純と便利と鞏固の現代の要求の上に作者のアイデアを遺憾なく發揮せり。構造は鐵骨鐵筋コンクリートを主體とし、外裝には柔かき感じを有する大谷石を彫刻しこれに赭色の細かきタイルを配し形示的單位を最も單純强固なる圓、正三角形を採りて細部を構成す中央に大玄關、大食堂、演舞場、舞踏室をとり兩翼に寢室を取る、そのベッド數約六百臺あり、內部大廊下及び廣間は宛も野外にある如き表現をとり、室に入りて初めて便利と單純と安靜を與へんとし天井、床、敷物、壁體の裝飾をつとめて音樂的調和を保たしめたり。近代思想の混沌として不純なる時代にあたり右顧左眄變せずあくまで作者獨自の精神を發露せしめたる點に價値ありと云ふべきか、然れども內部天井低くして壓へつけられたる氣持を抱かしめ、開窓少くして光量の少きこと等我が國人の同意し難き點多々あることも事實なり。（未完）



白色ペイント製造の材料

細木松之介

前號までは白色ペイレトの製造に供せらるゝ材料なる鉛白に就いて述べて來ましたが鉛の化合物は中毒の缺點がある處から其代用品たるべき白色顏料が出現して來たのであるが中にもリソポンは中々廣く行はれて居るものであるから本號に於て其製法を簡短に述べて見んと思ふのであります

扨一般にリソポンと稱する者は酸化亞鉛を含める硫化亞鉛とアルカリ土類金屬の硫酸鹽特に硫酸バリウムとの混合物であつて主として白色ペイントの製造に使用せらるゝものであるが其外に尙エナメル、リノレウム、壁紙シュードクロースゴム製品等の製造に使用せらるゝものである

始めてオール氏が之を工業的に製造したる方法は重晶石と石炭とを共に熱して得る所の粗製硫化バリウムを水にて澱出し得たる溶液を二分して其一部は鹽化亞鉛の溶液を加へて硫化亞鉛を沈澱せしむれば鹽化バリウムは液中に殘留するのであるが生じたる沈澱は濾さずして其混合物中へ硫化バリウム液の第二部と硫酸亞鉛の溶液とを加ふれば結局出來る沈澱物は硫化亞鉛と硫酸バリウムとの混合物である故に之を洗淨して乾燥せしめたる後に火床上に於て赤熱し急に之を冷水中に投入して急冷せしむる時はリソポンの分子を收縮して其密度を增すのである又上に述べたる火床上にて赤熱する爲に硫化亞鉛の一部分は酸硫化物（Oxysulphide）に變じ更に酸化亞鉛となるのであるから最終の製品なるリソポンは硫化亞鉛酸化亞鉛と硫酸バリウムとの混合物であるのです然るに其後に至り製法を改めて硫化亞鉛鑛を燃燒して硫酸亞鉛となし水を以て浸出して其溶液の比重を一、一五となし之に硫酸ストロンチウムと石炭とを熱して得る處の硫化ストロンチウムの溶液の比重一、〇六なる者を加へて硫化亞鉛と硫酸ストロンチウムとの混合より成る沈澱物を得るのであるが之より後の處理法は前に述べたる硫化亞鉛と硫酸バリウムの沈澱を處理する法と同じである

又ウイリアム氏の製法によれば鹽化亞鉛の溶液に硫化カルシウムを加へて生ずる汰澱を濾し之に鹽化バリウムの溶液を

加へて更に硫酸曹達を以て沈澱せしめ更に少許のマグネシアを加ふるのであるが其爲に油又はワニスと混和する事が容易になるのである

又グリッフイス氏の法に從へばルブラン曹達製造に際して生ずる廢物なる硫化カルシウムに硫酸亞鉛を加へて硫化亞鉛と硫酸カルシウム即ち石膏を沈澱せしめ更に塩化バリウムを加へ尚之に瀉利鹽を加へて沈澱せしめ結局の製品は硫化亞鉛と硫酸バリウム及びギプスの混合物となるのであるが又鹽化バリウムに硫酸亞鉛の過剩を加へて沈澱せしめ更に硫化カルシウムを加ふるか又は鹽化バリウムと硫化バリウムとの混合物に硫酸亞鉛を加へて沈澱せしむるのであるが使用したる鹽類の分量に從ひて希望次第の成分の製品を得る事が出來るのである就中硫化カルシウム三十五分に硫黄六十分を加へて之を煮て生ずる重硫化カルシウムを使用すれば最良の成績を得るのである

茲に注意して置かねばならぬ事はリソポンの或分なる硫化亞鉛と硫酸バリウムとを各別々に造り其割合の分量を以て此等を混合するとも決して良好なる製品を得る事能はず必ず上記の沈澱法によりて造らねば優良なる者を得る事は不可能である事であつて此差異の生ずる原因は恐く一法にては各成分を別個に造りて之を混合するのと他の法即ち本來の製造法によれば溶液中より各成分を同時に沈澱せしむるのであつて液體の中介によりて同時に沈澱する時は其相混合する事完全であつて別個に製造したる者を混合する法の到底及ばぬ處にあるなるべし

又クラウス氏の法（獨逸特許第六七三三號）によれば氏は塩化亞鉛若くは硫酸亞鉛の如き亞鉛の鹽類を使用せずして酸化亞鉛を苛性アルカリに溶解したる者を使用して之に硫化アルカリ、硫化アンモニウム、硫化バリウム等の如き者を加へて沈澱せしめて副産物として苛性アルカリを得るので其變化は左の如き者である

$$Z_n(ON_a)_2 + N_{a2}S + 2H_2O = Z_nS + 4N_aOH$$

此變化に於て硫化ナトリウムの代りに硫化バリウム又は硫化カルシウムを使用する時は依て生ずる者は硫化亞鉛と水酸化バリウム又は水酸化カルシウムの混合物であつて之に硫酸を加ふればリソポンとなるのである

前既に述べたる如く硫化亞鉛と硫酸バリウムとを同時に沈澱せしむる時は常に遊離の硫黄をも可なりの量に沈降するのであるが此硫黄を後にて燒却してしまうべき者である然るに此燒却法が中々六ケ敷のであつて其困難なる點も燒却が不足か又は過ぎるかで適度を得る事が六ケ敷ので若し不足なれば硫黄が尙殘留するから之を以てペイントを造れば殘留せる硫黄が後に至つて鉛の化合物に出逢ふた時に鉛の硫化物を生じて黑く變色する害をなすのである若し之に反して灼燒が過ぎた時には普通の灼燒法によれば空氣が漏れて爐内へ侵入するから其爲に硫化亞鉛が酸化せられて容易に溶解せざる鹽基性硫酸亞鉛を生ずるのであるそうして又製品の乾燥性を妨害するのである故に斯る妨害作用を避くるが爲にマイスナー氏は獨逸國の特許（第三五八九號）を得たる新法を案出したので其法によれば强熱したるマッフル内に硫黄を含める顏料を容れ其上に過熱蒸汽を吹込むのであつて此過熱蒸汽の温度が攝氏四百度以上の時は硫化亞鉛は悉く酸化亞鉛となり遊離の硫

黄は急速に亞硫酸瓦斯に變化して蒸汽の爲にマッフル外に誘出せらるゝのである而して其製品は全く遊離硫黄も鹽基性硫酸亞鉛をも含まざる優等品となるのである

又ルードウイッヒ氏の法（獨逸特許第四九九五二號）によれば硫酸亞鉛の濃厚なる溶液に食鹽の飽和液を加へ其割合は硫酸亞鉛の一分子に對して少くとも食鹽の二分子となるべくするか又は比重一、二七の硫酸亞鉛の溶液に食鹽の必要な丈の量を溶解せしむるか又は食鹽溶液に硫酸亞鉛を溶解せしめ其比重一、三七の者となし之を十二乃至十四度に冷却せしむる時は芒晶の結晶を分離し鹽化亞鉛を溶液中に殘留するのである然るに若し硫酸亞鉛一分子に對して食鹽三分子の割合となる樣にする時は二十度の温度に於ても芒晶を結晶せしむるのである然れ共冷却が強ければ強い程芒晶の分離が充分であるのである而して鹽化亞鉛の溶液に硫化バリウムを加ふざば硫化亞鉛を沈澱して溶液中には鹽化バリウムを留むるが故に之に前に出來たる芒晶の溶液を加ふれば硫酸バリウムの沈澱を生ずるのである而して尙液中に殘れる食鹽を再び之を元の通りに使用するのであつて其循環作用左の如くである

$$Z_nSO_4 + 2N_aCl = Z_nCl_2 + N_{a_2}SO_4$$

$$Z_nCl_2 + B_aS = B_aCl_2 + Z_nS$$

$$B_aCl_2 + N_{a_2}SO_4 = B_aSO_4 + 2N_aCl$$

扨以上述べ來れる所は改良や特許の方法に亘りて一貫したる製造法を一目瞭然たらしむる事能はざる嫌あるを以て左に簡約したる製法を述ぶる事にします

リソポンの原料は前既に述べたる如く硫化亞鉛と硫酸バリウムであつて其割合は約前者の三十に對して後者の七十であるのです

（イ）硫化亞鉛の處理

硫化亞鉛の鑛石は之を乾燥したる後ブレーキのクラッシャーにて破碎し更に之をロールに掛けて細碎し一平方インチに百目位の篩を通過する者として之を火爐にて煅燒するのである斯くして燒きたる者は酸化して一部分は酸化亞鉛となり他の一部は硫酸亞鉛となるのである次に此混合物は稀硫酸に溶解するのであつて之を爲す爲に鉛板を張つた多數の溶解槽を階段を爲して並列せしめ其中へ二十ペルセントの稀硫酸を盛り之を蒸汽蛇管を以て加熱する樣に出來て居るのである斯くして出來たる硫酸亞鉛の溶液はポンプを以て別の槽に汲上げ置くので此槽も蒸汽蛇管を備へて沸點まで加熱する事が出來るのである

（ロ）重晶石の處理

重晶石即ち硫酸バリウムも粉細機を以て細末となし之に約三十ペルセントの石炭を混和して燒くのであつて混和したる石炭の爲に還元せられて硫化バリウムとなるので之を黒灰と呼んで居る之に水を加へて泥狀となし之を浸出槽に送りて更に多量の氷を加へて其中の硫化バリウムを清解せしむるのである而して其溶解を助くる爲に蒸汽を以て加熱する事は勿論の事である

（ハ）兩液を混合してリソポンを沈澱せしむ

硫酸亞鉛と硫化バリウムの兩液は之を攪拌機を備へたる沈澱槽に流入せしむるのであつて其割合を亞鉛の三十に對してバリウムの七十の比率に混和するのである斯くすれば硫化亞鉛と硫酸バリウムとの混合沈澱を造るので其化學式は在の如

し

$$Zn SO_4 + Ba S = Ba SO_4 + Zn S$$

斯くして出來たるリソポンの沈澱物はフイルタープレッス其他適當なる機械を以て濾し一應乾燥せしめて乾粉となし更に之を攝氏四百八十度位の温度にて燒き急に冷水中に投入して急に冷却せしめるのである然る時は此急冷の爲にリソポンの分子が收縮して其密度を增す事は前にも述べたる如くである然るに此冷却せしむる時期を決定するのが頗る肝要であつて夫によつて製品の品位に著しき優劣を生ずるからである斯くて水中に投入して出來たるリソポンの泥狀物をポンプを以て濾過機に送り水分を除去したる後之を充分に乾燥せしめ更に之を細粉して三百目の節を通したる者が最終の製品となるのであつて其成分は硫化亞鉛約三十と硫酸バリウム約七十ペルセントより成る者である

水張りの繪絹

渚の白い砂は、
水張の繪絹のやうにつづいてゐる。

止まれ　そこに
美しい水よ
瞬間　眞晝の空はうつとりと水鏡する
おお　靜かな天上の夢よ…

私は心ゆくまでその幸を飲む
それは輝く新鮮さのなにはてもなく
忽ち失はれ忽ちに浮ぶ…

見よ！
波の子供らは、　白い花と笑ひながら
いつさんに　渚を登る



妙奇庵と室寺

池田谷久吉

東海道線、山崎驛で下車して南へ突き當ると京街道に出る

廣いよく磨けた道を狹んで立ち並ぶ家の有樣は昔ながらの廣重の浮世繪を見るにも優る情調を味うことが出來る。

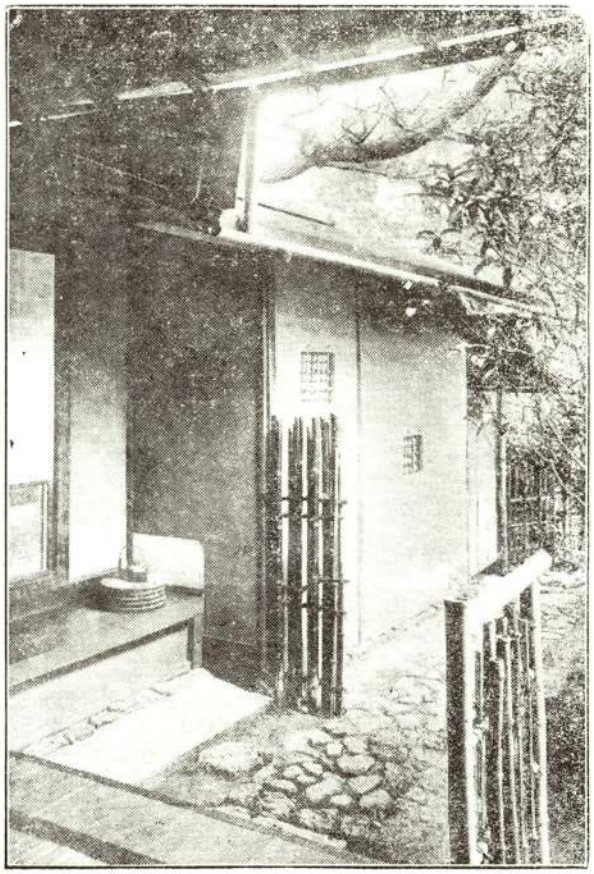
街道を僅かばかり東へ行つたところの北角に古い大きな石柱が立つてゐて、そこから北へ入ると間もなく右側に生垣を繞らした小さい庵がある。

餘り平凡であり、質實で規模が小さいために大底の人は氣にも留めずに眞直ぐに北へ寶寺へと行き過ぐるが、こゝが即ち有名な「妙奇庵」だと聞かせられて初めて驚かぬものはない。

玄關で來意を告ぐるとすぐと茶室へと案内された。

× × × ×

妙奇庵の茶室は我が國茶室建築の最も代表的のものとして有名なもので後世の模範として實に貴重な遺物で特別保護建造物に指定されてゐる。



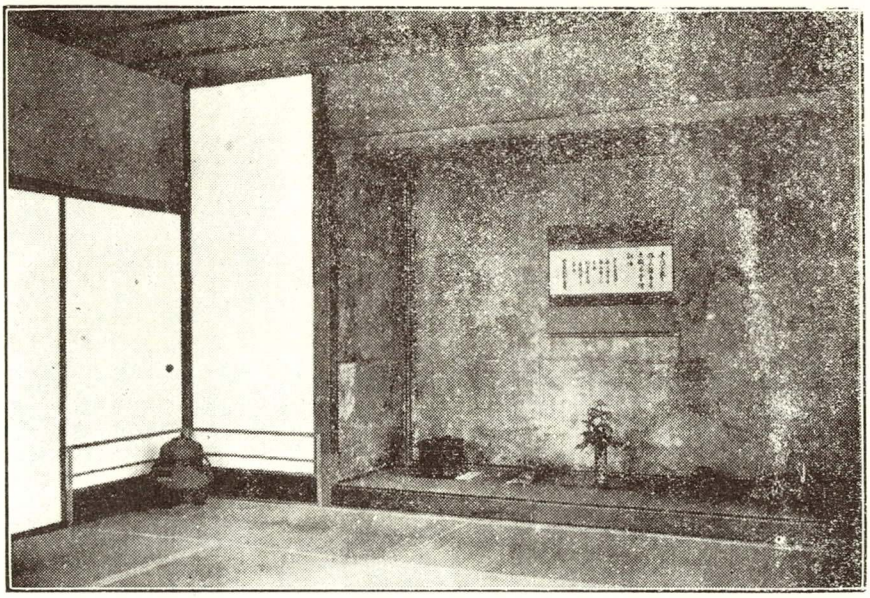
庵はその昔、明應の頃、山崎宗鑑、即ち佐々木範光が足利義尙の侍者を勤めてゐたが將軍薨後剃髮して一休に仕へて悟道三昧に入り、一休の寂後この地に來り一宇を創建して勤行の傍ら俳諧に日を送つてゐたこれが妙奇庵の起源であるそして今は臨濟宗

庵待　茶室　庵喜妙　山崎

東福寺に屬しその末派である。

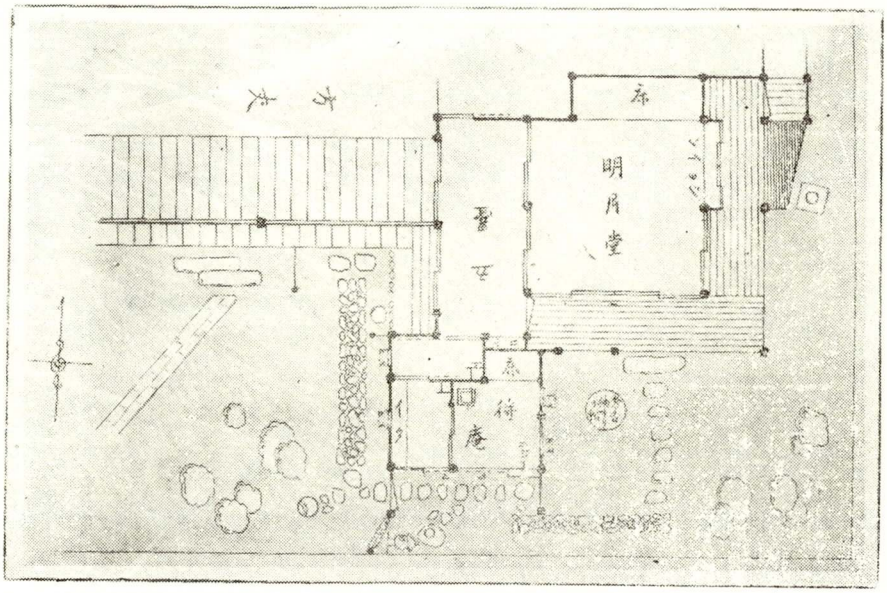
茶室は明月堂の書院に取り附けて增築されたものでかの本能寺に於ける光秀の亂に際し、豐臣秀吉が信長の急を聞いて中國より馳せ參じ山崎合戰の時、利休に命じて一夜の內に建築させたものと云はれてゐる。

先づ書院、明月堂は二間に三間の單層屋根切妻棧瓦葺で八疊數に九尺の床を取り狩野永德の山水繪を描き　次の間は入り側の四疊敷で廣椽を取りその外に落椽を設け內部と廣椽との仕切には腰高障子を置き內部の間仕切は襖を建て込み、廣椽の端は杉戶として海北之を描き、廣椽の柱には肘木、枓等なく只、內部のみ舟肱木を用ひ、疎垂木を用ふる等一切が書院風の雅致に富んだものである。



山崎妙喜庵茶室　明月堂床の間

數奇屋は如月堂に南接し狹くるしい屋になつたもので一寸異例に屬し二疊敷の外に一疊があり、床前の客位で二疊の隅に薄板張がある。



山崎妙喜庵茶室　平面圖

炉は向切り隅炉といふ切り方で、緣一

尺二寸四分内部入角は塗り廻してゐる、席は二疊とはいふものゝ天井高六尺八寸に對して、間が六尺五寸であるからよほど他のものに比して廣く見える。

床内は洞床で天井高五尺二寸五分、三方共つと入りの錆壁で塗り上げてゐる。天井はへぎ板に竹の竿縁を用ひいろいろと變化せる邊は見るべきである。

柱は太さ二寸四分の細いものも用ひ、躙上りは普通の席では二尺二寸に二尺位であるが、こゝのは二尺六寸に二尺三寸六分になつてゐる、即ち少し大きく出來てゐる。これは有り合せの材料で簡單に間に合せにやつたといふこと今一つは秀吉が具足を着けたまゝこれを用ひたことからだとも云つてゐる。

勝手口（通ひ口）は高五尺五寸四分、巾二尺三寸二分、壁は錆壁にて腰張をしてゐる。

外廻り土臺は玉石を据ゑ、南方庇屋根を作り、南方に面する下地窓には長さ二尺九寸五分、巾一尺、框太さ、八分二厘に六分二厘といふ刀掛けを設けてゐる。

庭は三間半に四間半の狹いものでその中に秀吉の袖すりの松といふのがあり、ごことなしに雅味と禪味との結構が寸分の隙もなく整然としてゐて大自然の靜寂そのものに接するの感がある。

一と通り見終つてから住職の點茶を喫してから茶に就ての說明を聞いたが日頃コーヒ黨たる者の想像外の味ひあることを初めて教へられた。

赤瓦にペンキ塗　卓子と籐椅子といつた所謂文化式建築に馴染んでゐるものゝ頭にはこうした茶席だとかいふ特種のものは或は最早や忘れられてゐるかも知れないが、傳統的に今日迄培はれた茶道といふものもなか〳〵よいものであることが初めて體驗されたのである。

こゝを出るとすぐに鐵道線路が北側を東西に横切つてゐる昔は庵の境内も廣かつたそうであるが鐵道用地に買收されて現在の狹いものになつたらしい。

然し當時、よくも取り毀されないで現存されたことが何よりも幸であつた。

踏切を渡ると藪があつて坂路にさしかゝる、これが寶寺への參詣道である、少し行くと右側に北濱とかの物持の豪壯な

椽の下の力持ち（三）

武田五一博士

緣の下の力持ちが充分でなく緣の下で力を出し惜む報酬も亦廉からぬことになるものであるが、永年共方面に關係して氣付いて見ると我邦人は一般設計圖又は仕樣書の研究が重要視されない傾向があるので殘念なことである亦設計圖の作製又は仕樣書の作製い如何程の骨の折れるものであるか分らない人も少からずあるようである、緣の下の力持ちが如何に骨の折れるものであるかゞ知らないのでもあらうが此樣な狀態が改まらない間はとても充分なる建築が出來るのは六つかしからうと思ふ

支那の古い建築に立派なものがあつて新しい建築に見るべきものゝない のは建築家の努力を認めない此頃の支那の狀態の結果であつて此樣な社會には緣の下の力持ちは馬鹿らしくて誰れも其役を受持つ人がなく從つて良建築家の出なくなるのは 致し方もなからうと思はれる緣の下の力持ちを樂んでやるものが多く其等の人々に對して有形無形の報酬が充分に拂へる國家でなくては健全なる發達は遂げられない。

役者ばかり大切にして脚本作者も道具方も無視して居るやうな芝居はとても一流の芝居とは云はれない、見物人の方は其れでもよからうが內部が其れでは到底治らない亭主ばかりが威張つて女房の存在を認めない家庭は危いかなと云はざるを得ない

吾々の如く工業方面に從事して居るものは元來が緣の下の力持ちを專門にして居るものであるから特に此感が深いがこれを一層深く考へて見ると何れの職業と雖も緣の下の力持と考へて考へられないこともなく亦一面緣の下の力持ばかりでないと考へられないこともない

何れも氣の持ちやう一つであつて互に愉快に奉仕的に生活する爲に生れて來て居るものであると考ふるのが最後の解決であるやうである「最も多く奉仕するものに最も利益あり」と云ふロタリーアリアンの精神は常に眞理であるやうである、他を責むる前に先づ反省一番することはいつの世にも大切なことであらねばならぬ。

邸宅の門がある、こゝら邊は極めて靜かで氣持のよいところである、左手には下氏の邸宅が瀟洒な姿を見晴しのよい高臺に陣取つてゐる。

それから少し登ると寶積寺がある。こゝは天王山の西の山腹でこゝまで來るともうよほど高いので四周の眼界が急に開けて繪卷物の樣に帶の如く細長く東方京都の盆地から大阪迄よく見える。また柱淀、木津の各川合流して大淀川となりて足下を流れ景勝の地である。

此の寺は補陀落山、寶寺といつて、新義眞言宗智山派に屬し寺傳では聖武天皇の勅願で僧行基の開基と稱されてゐる。

天正十年かの山崎の合戰の時は秀吉の陣所をこゝに當てたこともあり、また一條天皇の頃、寂昭和尙が中興して元中年間には定額寺の班に列してゐる。

昔は子院が十二もあつて相當盛んであつたが今は、仁王門、三重塔、本堂、方丈等を殘すのみで大した寺でもないがこの邊では屈指の古名刹の一つである。

仁王門を入ると右側の少し奥まつたところに三重塔が建つてゐる。

形は普通のもので相輪を頂きよく桃山時代の特長を持つてゐる。時代が新らしい割にどうしたものか廢頽が甚しいために目下大修繕を施工してゐる、然し莊重な形態と整つたプロポーションとは一顧する價値がある。

塔の前には天正十二年の銘のある石燈籠が一對あるが恐らくは塔と同時代のものと思はれる。

塔の內部には大日如來を安置し、佛壇天井等も當初の儘で殘つてゐる。

本堂は塔より少し西北の小高いところにあつて建物としては有りふれたもので十一面觀世音菩薩を本尊として安置してゐる。

本堂の前には九層の石塔婆があつて俗に聖武天皇の御塔と傳へられてゐる。

寶物には有名な打出小槌があつて俗に龍神の化現して聖武天皇に獻したものとの傳說がある、國寶として板繪神像と木像の二軀があるが一寸變つたものである

こゝから少しのぼると王政復古の際、勤王の士が會津、桑名等の藩士と戰つて自殺したところで眞木和泉守保臣以下十七士の墓がある。

一九二五、一二、一三

× × ×



都市觀念の訂正

小野田秀作

1

社會上からは最も常識的通俗に解釋して、わりに狹れなる土地にわりに多數なる人々の密集して永住せる一つの場所を都市と稱して誤謬はないやうである。法律上に於いて廣義に意味するところでは一つの獨立せる法人格として中央政府から認められ、その一定した義務と果さうとする目的から法規上の種々なる權威を有し、自治權を有し、しかも國家に從屬したる一つの政治的單位であり、また一つの公共團體である。

また人口の密集を意味すると同じ程度で、都市は今は一つの敎化の中心を意味する。古來いづれの時代の文化も例外なく都市の文化であつた事實に依つて、都市は社會上に非常に有力なる位置を獨占する優越體である。生産消費の業ともにこの都市に於いて激しく盛んに行はれ、從つて、文化を代表すると同時に富財をも完全に代表する。ひいて、藝術、學術の有力なる中心ともなり、科學上の豐かなる恩惠を獨り恣にする。

都市は人類の全らゆる夢と慾望との具體化されたる有機體である。

2

都市觀念の發達は、國家觀念の發達と俱に、古代ギリシャ人にその端を發してゐると見るのが妥當である。しかも古代ギリシャ人に於いては、近代に於けるが如き國家觀念がなかつたと同樣、嚴密に言つて、近代に於けるが如き都市觀念もなかつたやうである。

土地狹小なる半島內に幾多の立派に獨立せる小國家が數へられたので、彼等には、近代のこの質量俱に茫大なる國家に想倒するだけの周到な用意が缺けてゐた先づ、彼等は近代に於けるが如き代議政體なるもの、觀念を全然有たなかつたゝめに、國民は全て必ず自ら政府に出入して、等しく親しく議事に參與すべきものであるとの觀念から、自由にも放恣にもなり得なかつた。彼等は各人自ら親しく政府に出入しては、その有名なる熱情と雄辯とを以つてして、彼等の國家を、生活を人生を、厭くことなく討究し、論策した。政治は彼等の倫理であり、道德であり、宗敎でさへあつたのである。從つて、彼等のこの生活は、即ち、所謂彼等

の高き矜持なる公民生活であつて、この名譽ある公民生活は彼等の私生活と全く不離なる關係にをかれてゐたのである。彼等は即ち國民であるだけではなく、公民であつた。最善の紳士は即ち最善の公民でなければならないのであつた。

この觀念は、當時の最大なる天才にしてまた同時に最大なる常識家なるプラトオが、國家に於ける各個人の個々なる完成よりも一個の圓滿なる全體としての調和をこそ求めらるべきであると說いたのに依るも明らかである。もとより、彼等の國家觀念は國家とは人間最善の生活を實現しやうために類似の人々の集まれるものであると說明したアリストオトルの一言にとゞめをさすのであるが、事實に於いて、彼等の意味し理想とせる國家は所謂公民の國家であつて、其國民の公私の生活の一切をあげて、『國家のため』ならしめたのである。彼等はもとより各個人銘々のよき個人的完成を希畫しなかつたのでは決してなかつたが、彼等は個人個々の完成よりもむしろ全國家としての總合的統一的なる完成を先づ希つたのである。この適例は即ちかの有名なるスパルタ國家である。從つて、彼等の國家はその人口、多くして十万を最上とし、理想としては一萬二萬の小數なる公民の社會を最善なりと思惟したのである。故に自ら、彼等の國家は小さき都市國家であつたばかりでなく、その都市は小さき國家都市だつたのである。この露はな事實は、必ずしもその地勢の山岳丘陵多きを以つてその交通の便を阻得したことにのみ依らず、また將來の大國家大都市への準備的或は過程的存往であつたのではなく、一つにその民族的性情に依つてものである。

かく古代ギリシャの都市はその公民の小さき都市であつた。しかもその公民は弱からぬ權勢を有ち少なからぬ富財を有つて、身自らは何等の生產的なる業務に就くことなく、多くの奴隷を恣に私有してむしろ誇つた。何等政治上の權利なく

涼しさに四つ橋を
四つ渡りけり

來山

大阪市では都市計畫事業の一としてあらたに浪花の名橋と謳はれる四つの橋の架替を初める。それは堂島大橋、四ツ橋、千代崎橋、末吉橋の四つで、設計はいづれも都市計畫部の技術課、意匠は京大の武田五一博士が擔任し、そのうち堂島大橋はすでに工事中で、三月までにお化粧までもすませるといふ。殘り三つの名橋もこの年度内に起工のはずであるがその設計は

堂島大橋　橋の延長四十三間橋幅十二間、橋面積六百廿一坪で樣式はイタリアン、ロマネスクの近世式、勾欄廻りを純藝術式にして兩側に四ケ所の飾り塔を設ける

末吉橋　はメラン式鐵筋コンクリート橋としての最高技術を見せたもので四本の燈柱を設けるほかに橋全體としては別段裝飾を加へない

千代崎橋　はゲルバー式鋼鐵橋で橋幅は七間で中央歩道が八尺、兩側に車道を設けるさらにこれらの諸橋と一しよに四ツ橋が改築される即ち長堀川の炭屋橋、吉野屋橋、西橫堀川の下つなぎ橋、上つなぎ橋の内上つなぎ、下つなぎ、炭屋の三橋だけを今回改築し、經費に都合がつけば吉野屋橋をも同樣改築したいといつてゐる。設計は新たに十五間幅にとりゞられる都市計畫長堀線をいだいた上つなぎ橋を主體にして立案されてゐる

上つなぎ橋　樣式は武田博士の考案によつて純日本風を多分に加味した二鉸拱鋼拱で、兩側に十五尺の歩道をとり殘りを車道數にして、その中央に軌道を設け橋面全體に木塊鋪裝を加へる。橋の裝飾としては飾り電燈が八本、勾欄はすべて透し金具の高雅なものにして水の都の風致を現さうといふのである。

下つなぎ橋と炭屋橋　樣式はいづれも上つなぎ橋にならぶが、双方ともに軌道がないから橋面全體を有効五尺幅として歩車道に充てるはずである。なほ都合ができてとり殘される吉野屋橋が改築されるとなればこれも同樣式のものにしてヤハリ一つ名に呼ばれる名物四ツ橋を永久に保存したいといつてゐる

たゞ今度の橋の架け替で今なほトつなぎ橋と吉野屋橋の袂にのこる俳聖小西來山の「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」の有名な石碑までがとり拂はれはしないかと懸念されるが、市の方では名所は成るべくそのまゝにしておきたいとの意嚮らしい。

生活上の自由なき多くの惠まれざる奴隷達は、そのおのれが屬するところの主人公の氣まぐれに依つて、牛馬と等しく賣買され酷使された。唯一人の公民の自恣のためには百人の奴隷の自由を平然と奪取して以つて正當としてゐたのである。即ち、古代ギリシヤ人の觀念に於ける國家都市が、人間の最善の生活を實現しやうための最善至便の手段であり、人生の究極目標の最高至純の具體化であらうことは、もとより正當である。唯うらむらくは彼等はその高く自ら評價せる國家都市を、その輝やかしき高き文化を、正義に依つてせず、愛に依つてせずして、不當にも、唯鞭に依つて建設したことである。即ち、相當好意を以つて解するも、彼等の愛は畢竟狹き階級的愛であり、その正義も單に低き階級的正義であつたに過ぎない。彼等の文化はその下積に人生觀の誤謬と歪曲と、奴隷の血と汗とを以つてし、自らの努力精進を以つてはしなかつたのである。かゝるところの理想は如何にも貴族的に艶ややかではあつたが、その現實には確然たる生命的根底を缺いでゐたのである。

いくばくもなくして、この理想的都市が、國家が、分裂倒壞し去つたのは、むしろ當然である。

3

都市は、その後 世紀の重なるに從ひ科學の素晴らしき發達につれて、唯々驚嘆すべき盲目的なる勢力を以つて、無計畫・無秩序に發展した。殊に過去一世紀間の都市の發展は實に驚嘆すべきものがある。僅々百年前人口一千に足りなかつた一小村も、今日は人口百萬を數へる大都市にまで發展した例は、單に一二にのみ止まらない。しかもこの驚嘆すべき發展の勢ひは今日益々その加速度を增し加へて、今や、その速度を如何に緩和し調節しやうかゞ、重大なる新しき都市問題とさへなり初めたのである。都市のかゝる强暴なる發展は、今や、その都市が人間生活の上に必ず與へるであらうと豫算されてゐる幸福の質量にも倍加する怖るべき過多なる不幸を、全らゆる惡德と邪俗との總量を、この人間生活の上に掩ひ冠せさへし初めたのである！ 今や、都市はその文化を眞美される以前に一度びは呪咀され、禮讃さるべき以前に一度びは唾棄されなければならなくさへなり下つてしまつたのである。

もともと、都市は今日のこの忌ふべく救ひ得ざる狀態にまで到達する以前、すでに、一部に眞摯なる都市計畫法の理想の提唱されるあり、實行されるものもあつて、具眼の士には、今日の都市のかゝる意味での發展が決してこのまゝ無條件的に是認され歡迎さるべきではないことが充分理解されてゐるのではあるが、眼前のこの生々しき事實に於いて、ついに今日のまゝでは容易に阻止し得ざるものであることを遺憾乍ら承認しないではならなくなされてゐるのである。

例へば、ニユウヨオク市はすでにその交通機關にむしろ驚くべき熱情をもつて路面電車路の他に高架電車路、地下に二階に渡る電車路、尙ほその三重下の地底に汽車の鐵道路を敷設したにかゝはらずしかも尙ほその驚くべき交通量の累進的なる增加に依つて、その交通難を痛切に感じつゝあるとのことである。加ふるに厭くなき高層建築の增加は益々その道路を狹め、街路に立ちては快晴爽風の日にも太陽を見得ること爽風に觸れ得ることも殆んどなく、唯徒らに高き鋭き、冷たき石と鐵との建築の間にあつて、人間生存

の高く深き意義を疑はしめることあるがそのおちである。かの高名なるウオオル街、ブロオドウエイ等がこの適例であるそのラッシュアワアの混雑はすでに單なる不快以上に宿命的なるものである。かゝる不健全なる都市、人口の密集が、その都市人の保健上の一大脅威となり、生活上の苦悶の素因となるはもとよりの話である。死亡率の高昂、疾病者の激増はもとよりであるが、ひいて思想を救ひ難き程度にまで惡化させるであらうことは明瞭である。加ふるに、世情日に嶮しく人情日に薄くして、唯に物質と自我とは尊重され主張されて、全らゆる方面に於ける分配の不公平は益々深められ、貧富の差益々甚だしくなり、都市は唯他より奪はんため殺伐なる戰ひの野と化し、そこには人類の永劫の理想なる同朋相愛の純美なる希ひは消え果て、生活なく、唯爭闘あるのみとなり果てるであらう。かくて、全らゆる汚濁、惡徳、卑淫、歪狂亂倫、犯罪は、單に一ニュウヨオクのみと言はず、美と善と眞との圓滿なる具體化であるべかりし全らゆる都市を完全に占領し去るであらう。

加之、急進的なる激しき人口の增加はマルサスの憂慮をして刻々その度を加へしめ、百年後、二百年後に於ける現代都市の變化、複雜化を輕々に豫測させない程のものがある。百年後に於いて、今日人口十萬に過ぎざる小都市が、實に百萬に前後する大都市になるだらうことは、斷言しても大した誤算はなかりさうである。土地と食料とは當然不足するであらう。問題は單に地方的國家的であるだけではなく、全て國際的なる必至の重大問題となるであらう。怖るべき大戰爭大殺虐が自ら曳發されないとは保證が能きない。ついに人種戰爭ともいふべきものが不幸にも、一再ならず起るであらう！人類の自滅は、かくて、單なる机上の皮肉ではない。

かくても尙ほ人類が高く自誇するに足るべき文化の輝きこゝにありや否や。遠く百年先き、五百年將來の愚劣なる空想として無下に嘲笑し去ることを止めよ。問題は明日の問題である。否。すでに今日、今の問題である。眼を遠く世界に投げかけることを忘れてはならぬ。

4

近代都市の如上の唾棄すべく嫌惡すべき惡傾向に對して、からうじてその安全瓣となり得るものは、今のところ唯一つかの所謂都市計畫法である。

都市計畫法の常識的なる定義は、大體の人々に依つて殆んど同樣に妥當に說明されてゐるやうであるが、今、エヌ・ピイレウイスの「近代都市の計畫」に依れば都市計畫とは、都市の發展に對して將來のために用意し、その賢明なる對策を講じてをくことに他ならず、更に詳しく言ひ代えれば、それは自治體をして益々大いなる、そして益々廣い生活に向つて發展せしむるやうに指導することを意味するのである。即ち、都市の全らゆる部分をして、それぞれ最も適合したる活動を營ましめることに依つて、都市自體の能率を增進せんとするものに他ならない。即ち、表面的に見れば、街路、公園、建築、交通機關等といふ物質的のことにかゝつてゐるのであるが、しかもこの都市計畫の意義はこの物質の問題よりも遙かに深遠なもので、都市人の心的乃至は道德的發展に有力なる善影響を有するもの即ち、健全にして幸福なる自治體の建設に對する健全なる基礎であるといふのである。その計畫はもとより厭くまで合理

的であると同時に、立派に先見の明ありと稱へらるゝに足るべき程のものでなければならぬといふのである。

都市計畫が以上の理想に依つて主張され實現されやうとすることには、勿論、何等の錯誤もない筈のものである。都市人の冷たき不幸を希つて都市計畫を企圖したものは唯の一人もゐなかつた筈である。しかも事實上に現はれたる結果は、不幸にして、この純美なる高遠の理想を唯冷酷にも裏切らうとしてゐるのである不準備無節制に發展膨脹して來た過去の都市の不可はもとよりである。今この整然たる立派なる都市計畫法に依つて建設されつゝある今日の都市にても、それが我々の理想とし希望とせる都市の如く理想的のものたり得ないだらうといふことは明瞭である。希望はこの都市計畫法にかけつゝ、しかも一切の期待をこゝにのみかけることが能きないといふ一種の矛盾を感じないではをれないのである。絶對に信頼するに足るべき都市計畫法が、今日のところかなりさうであるのはまことに遺憾の極みである。

今日のこのまゝの都市が如何に優秀なる都市計畫法に依つて整理されやうとも果して都市人が豫想する程の幸福を獲得能きるものであるか否かは實際のところ頗る疑問である。今日の都市計畫法は成程幸福の保證とはなり得るかも知れないが、その幸福そのものとはなり得ないだらうといふことは不幸にして眞實である何故なら、今日の都市計畫法は遠き將來の一切の人生問題を、唯々、科學に依つてのみ、數理的計算に依つてのみ論評し去らうとあせつてゐるからである。都市は多數人の集まれるところである。ではその多數人の便利であるやうにしやう。だが、唯これだけで人間が果して今よりも幸福になり得るかどうかは相當大きな疑問である。便利ならしめやうとした都市は、反つて科學の上に科學を積み重ねることに依つて嫌はしく煩雜なるものとならうとしてゐる。商工業の和やかなるべき發達は、その同業者の多數が隣接することに依つて反つて相爭し、衷心よりの希ひなる生命財産の保護もその生存競爭者の多數であるとその自我思想の歪める發達とに依つて反つて絶ねずおびやかされる結果となるのである。必要以上の多くの人々にあふといふことが如何に不快なものであるかを、今日の都市計畫者は考へたことがあるだらうか。必要以上に便利であることが如何にこの人生を窒屈なるものにするであらうかを考へたことがあるだらうか。都市的組織以外に如何に豐かな人間の幸福がかくされてゐるかを考へたことがあるだらうか。

かくして計畫され、整理され、毀され戰はれ、また計畫され、整理されゆく都市の極限へまでの發達は、或るまた一つの都市國家、國家都市を形成することになるかも知れない有樣である。もとよりこの都市國家、國家都市は、その全らゆる組織に於いて、古代ギリシャのそれとは所謂雲泥の差を有つものであらう。全らゆるものが、今日の我々の豫想を越えて莊大であり複雜であるだらうことは勿論である。益々複雜になるであらう經濟觀念、社會觀念、ひいてその人生觀念の發達、複雜し加ふるに、寸秒時もかの進展を停めやうとはしてゐない科學文明の畏怖すべき發達に依る物質的の觀念の相違が惹起され、世情は益々複雜し混亂し果てるであらう。しかもその結果に於いて、古代ギリシャのそれと、いくらの進歩が、少く見てもいくらの相違が、認められるであらうか。その時、そこに、

新しき時代の新しき奴隷が存在してゐないとは誰にも斷言は能きないのである。即ち、新しき奴隷の新しき血と汗とが、この驚嘆すべき大都市、大國家の不幸なる下積であるだらうことに、些の變化ないものである。このまゝでは、ゆき得る道は、唯、自滅への道なのである。

故に言ふ、今にしてその都市觀念を訂正せよと。

5

結論はすでに短くて結構である。

都市觀念の訂正とは、强ゐて今日の都市を否定せよと言ふのでは勿論ない。優れたる都市計畫法にはかけ得る限りの希望と信賴とをかけやうといふのである。唯、都市そのものへの根本觀念を極く僅かに變えてみやうといふのである即ち、都市は人間生活の最適なる手段ではあらうが、決して、都市そのものが人生の目的となつてはならないといふことである。從つて、都市は先づ完全にその都市人全てのものであり、その一人一人のものであつて、斷じて、暴虐なる小數者のためのものではないといふことである。故に、各人銘々の完成は、決して、殺伐なる競爭的意識に依つてはされず、唯同一都市に於ける各人相互の和やかな提携と、協同に依る研鑽、討究に依つてのみされ、隣人を敵手として押しのけ突き倒すことに依つてはされないといふことである。從つて、都市はその精神に於いて和平相愛の熱情に豊かであると同時に、その外見に於いても、決して、今日の如くに競爭し打ち戰ふためのみの設備をしないといふことである。今日の都市に於いて、果してどれ一つとして他と競爭し鬪爭しやうための具でないものがあらうか。人より早く儲けやうための電話であり、人より樂をしやうための自動車であり、人に誇らんがためのビルデイングである。都市を戰場と考へ、賭博場と考へてゐない都市人が果して一人でもあるであらうか。都市は果してかくも勝たねばならぬところであり、他から奪はなければならぬところであるだらうか。

建築のみを都市であると考へることはもとより正しくはない。都市は建築のみのものならず、先づ人生のものである。都市問題は單に建築問題に依つてのみ解決せず、都市人の市民的敎養の如何に依つてのみ圓滿に解決され得るのである。

販賣能率を增す 商店建築 (一)

商店において最も大切なのはその建物の一階における賣場の面積である、すべての物を犧牲にして出來るだけ廣い面積を賣場に提供する必要がある殊に購買に最も便利な一階においてこれが最も必要なことである、然るに一商店としては仕入取引場、商品配達、事務、社員出入口、私物置場、店員食堂その他百般の出入のために一階の面積を必要とすることが非常に多い、ここにおいてかいかにして最大限度の販賣面積を設け、いかにして最小限度の面積を割當て、そして商賣の事務を圓滑に運ぶべきかといふ設計の決定に非常なる苦心を要する、今や東京市は復興の途にあつて各商店共新築の計に忙しき折柄この問題は閑却すべからざるものである、大方の建築はたいがい專門の技師に依賴する向きが多いが構造、裝飾等は別としていやしくも店內の設計に至つては經營者自ら深く研究して決すべき事柄である、そこで私は米國において最も感心したその一例を述べやう

ニウヨークの五街（フイフスアベニユー）に最新の百貨店として一昨年十一月に開店せられたるサツクスでは商品配達事務を地下室でとり、仕入其他の事務を七階以上の上層でとつてゐる同店には九十九箇の貨物自動車があつて客の買物を配達してゐるがその出入口はわずかに五間程の廣さで幅十二尺長さ十五尺の貨物リクト二臺並んでゐるに過ぎない。

（五六頁へ）

これと等しく、都市は唯單に密集喧騒すべきところではなく、協同和合すべきところである。相傷けあふべき地獄ではなく、各人相扶けあつて、倶に偕に人生の高き目標なる人格完成への道へ向つて、睦んで進むべき樂土である筈である。他を突き倒すに便利である便利は、都市には要はない。他に卑しくうち勝たうと欲しない限り、強ゐて市街の中心にのみ密集する要はないだらうから、地下地上に煩はしく七重八重の鐵路を敷き、五十五階の高樓をうち建てる要もないわけである。郊外の地にそのつゝましやかな相應の住宅を營めば充分こと足りるのである人間生存の眞義は、如何に彼個人が、人間らしく正しく世に生きたかといふことにのみかゝつてゐるのである。アメリカの大都市の雜沓の中に卑しく狂奔してその生命を絶たうより、バミイル高原の樹下に正しくその身を處してその生涯を終ると、果していづれがまことに世に勝ち人間と呼ばれるであらうか。己れの私慾のために利用されたる都市計畫法は初めから失敗である。この世に於ける勝利を單に物質の上にのみ、科學の勝利にのみ求めやうとするのは危險である。いかに科學の粋を盡し富財の極をかけて、都市そのものを美々しく素晴らしく整頓し建設しやうとも、愚劣卑俗なる今日の都市觀念の訂正されない限り、この都市經營は立派なる失敗にすぎないのである。大古、その邪淫卑猥を嘆いて神はソドムゴモラをうちたまふた。その狹隘混亂に苦しんでネロはロオマに火を放つた。都市の歪める埒もなき發展膨脹を先づ堅く阻止し訂正せよ。

都市觀念の訂正とは正しき人生觀の確立の謂である。

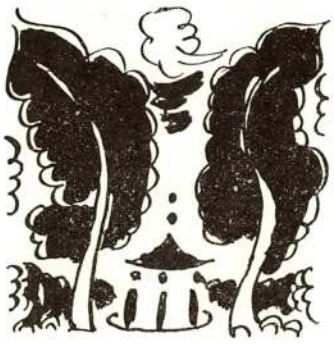
はつ春の

初子の今日の

玉箒

手にとるからに

ゆらぐ玉の緒



劇の民衆化

中尾保

昔から女の好きなものと云へば芝居コンニヤク芋蛸南京とされて居る、その中でも芝居が第一位に置かれてある。しかし芝居を好む者は女ばかりではないコンニヤク以下は何うか知らないが少くとも芝居だけは男も女以上にこれを愛好して居る。芝居を嫌ひだと云ふ人は普通の人ではない、餘程變つた一部の人々に過ぎない。

それ程劇は一般的である。洋の東西を問はずあらゆる藝術の中で一般的と云ふ點に於ては劇の右に出づるものがない即民衆藝術としてその最たるものは劇なりと云ひ度い。民衆と云へば今日下層階級の人々の如く聞えるかも知れないが民衆の本來の意味はそんなものではない、貴族も平民もブルジョアーもプロレタリヤもあらゆる階級の人々がその社會的地位を離れて單に一個の人と觀た場合にそれ等の『人』を單位としての集りを指して民衆と云ふのである。

であるから民衆の中には大臣大將も居れば學者も肴屋の兄も八百屋の熊公もおでん屋の八公も居るであらう。これ等の人々が民衆の一メムバーとなつた場合は互に對等であるべきである。民衆の講釋は扱ておいてこの民衆的ならざるべからざる劇は日本に於て今日尚民衆的でない江戸時代の弊風が大正の現代にまだ存在して居ることは劇そのものゝ爲又民衆の爲寔に遺憾に思ふ。全く有產階級の享樂機關の如く或は花柳界の延長の如き感がある。

第一『劇そのもの』は大部分民衆的でない。この最甚しきものは古典的歌舞伎劇（眞の歌舞伎劇を指して云ふ）である。これが他の劇にまで惡影響を及ぼして居る今日々本劇の發達を阻害して居るものは歌舞伎劇であると云つても敢て過言ではあるまい。彼のアンティ歌舞伎黨とも稱すべき人々が次の如き意味のことを云つて居る、歌舞伎劇の傳統は實に偶然の存在に過ぎずその演出は決して時代的反省の爲に演ぜられるものではない、その傳統の一切を切り捨てゝ全然新しい地盤の上に民衆自身の演劇藝術を創造し度い、歌舞伎の存在は決して現代生活の必然の要に生れたものではない、よろしく現代はこれを破壞すべきであるとの意味のことを云つて居る。

兎に角歌舞伎劇は現代的意義を否定す

るものたることは誰の目にも映ずるところである。

次に觀劇制度は民衆的でない。第一觀覽料がベラボーに高い、世界何れの國と比較しても日本程觀劇料の高い國はない、尤も時間が長いからかも知れないがこの時間の長いと云ふことも日本の特徴である。正午から晩の十時、十一時頃まで八時間乃至十時間と云ふ長い時間劇を觀るに一日まるつぶれである。これも江戸時代からの弊風である。芝居を見ながら辨當を食ふのも日本だけである。觀劇は花見遊山とちつとも變つたところはない、近時劇場内には大抵食堂を設けて來たこれは寔に結構なことである、しかし外國の劇場にはそれもない、カツフエー、バー、位はあるがレストランドは大抵ない、まあつてもグリルルーム位の程度のものに過ぎない、これは全く晝と晩と客が入り代る即ち二部制度であるからである。

まあ何にしても觀劇料を今の半分位にして晝夜二部制にすべきである。それでないと餘程の人でなければ度々劇を見ることが出來ない、そうすれば茶屋制度は全廢してよい、そして全部ザーブシートとすべきである。次に劇場の構造設備であるがこれは或點まで法令で決められて居るから今後出來るものは多少よくなる筈ではあるがそれにしてまだ〳〵改良すべき餘地は充分ある。在來の劇場でもその構造は仕方がないとしても設備の方だけは何とかして一日も早く改革して欲しいものである。構造と云ふ點に於ては在來のものは劇場としての形になつて居ない能舞臺の觀覽席に屋根を架したものが次第に發達して今日の劇場となつたので外國の劇場とは全然趣を異にして居る。しかし歌舞伎を除く他の劇を演ずるには歐州風の劇場で一向差支へはない筈である。音響學やその他の法則を無視した日本風の劇場は亡び行く時代の來るのは當然の事である。

何にしても今後劇や劇場を改革し觀覽制度を簡便にして民衆娯樂の實の擧がらんことを切に望むものである。

過渡期に在る日本の劇と劇場に就いては、尙ほ論ずべき事、要求すべきことの尠なからざるものあるべし。單り劇作家若しくは劇評家などによつて提唱さるべき問題にあらずして、實に建築家の畑に屬す。されば斯問題に對する高見を寄せられんことを望む

―編輯者―

販賣能率を増す商店建築（二）

入口には一から五十九迄の電氣釦があつて先づ外から三十號のトラックが來ると配達夫は直ちに三十號の釦を押す、すると地下室のシツピングオフイスにある電燈がツパト三十號といふ文字をあらはす、そこで三十號に積むべき荷物は送票を添へて籠につめてある、それを車にのせてその車ごと貨物リフトに引き入れ其まゝ地上にあらはれる、件の荷物は籠のまま待合せてゐるトラックに積み込んでサツサと受もちの方面に走り配達夫は送票を車の中で調べ順々に配達してゆく、そこに一言の命令もない、默々として來り默々として去る、事務の敏捷故なきにあらずである、また仕入の方面はといふと、外からトラックに積んで來る荷物は車ごとリフトに引き入れて七階以上の上層に運びそこで悉く引渡し空車は再びリフトで下に降り外に出て行くニウヨークのごとき繁華な都市のグランドフロアーは土一升金一升どころの騒ぎではない、頗る高價なもので尺寸の面積といへども擧げでてこれをセール、スペースに使用するのもある、その建築物設計の巧拙によつて販賣能率に非常なる損得を生ずることはもちろんである、外國の商店が面積の經濟に非常なる注意を拂つて居るのに感心すると共に吾人もまたこれをゆるがせにすることは出來ぬと痛感する次第である。



創作

ぬかるみ

文之里人

1

約束の時間には未だ十二三分の間がある。下關行き一二等急行がつい今さつき出たばかりで未だ夕暮だといふのには少々早い一二等待合室には、人のかげも多くはない。

今日はまたばかに暖かかつたといふのに、ストオヴにはむき出しにされた石炭がまのぬけたすがたでのろのろ燻つてゐる。誰もあたつてゐるものはない。

ソフトを常よりは少々眼深かに冠つて、謙三はその廣くない室の中を、氣むづかしく、はつきりした歩調でゆきゝする時々おもひ出したやうに輕い靴音がする。右手はオォヴァに輕く突つ込んで、目は執拗く敷石の上を睨めてゐる。多分、彼はなんにも考へてはゐなかつたのである。

派手な女。別段氣障だといふ程のつくりもしてはゐないがどこかに人をみだりに近づけない位の美しさと明るさとを有つてゐて、とりすましてゐるといふ感じがないでもない。年は一寸わかりにくいやうであるが、一見、富有な銀行家のきまゝな新妻といふ印象を誰にも與へる。望まれて來た、敎養のある美しい後妻である。黒い毛皮のショオルに深々と身を卷いて、肩の痩せをかくさうとしてゐる。よく似合ふ柄の羽織を滑らかに着流して、背高くすらりと立つてゐる。手には氣の利かないオペラバックのやすものはさげてゐない。黒いうす絹の手袋を、つけてゐるだけである。長くておもひきり華奢なその指は、彼女の鋭い神經質をあらはしてゐるらしく見える。彼女は入口で一方立ち停り、中をそつと覗ひて、まあよかつたわといふかすかなしなをして見せて、安心して小走りに近づいて來た。

謙三は目をあげた。見た。ごく不用意な氣持で、大變かあ

いゝと思つた。

彼女は微笑をつくつて、彼の顎のま下まで近よつた。

『しばらく。』

『……』彼は默つてゐた。

『來て下さつたのねえ。』と。これが彼女の癖の一つであるが相手の方で氣になる程その語尾をぐつと下げて言つて、さて彼女はその笑顏のまゝでしみじみと相手を見た。

『來てしまひましたよ、やつぱり。』と、彼は他に言ひやうもなくて、言はねばならぬことをともかくも言つてみた。そして、自分の方でもともかくも微笑んでみせた。

『ありがたう、お禮を言つとくわ。』と、彼にだけ好んで見せたがるとつてをきのなまめかしい口調でもつて、彼女は晴ればれしくさゝやいた。

いつもこの手で負かされてしまうんだといふ感じが、彼に輕い苦笑を强ゐた。自分はやつぱりこの女に玩ばれる程弱いんだと考へないではをれないのだつた。心持その頭をかしげて、うるみのある張りのいゝ二皮目を見ひらいて、相手をいくらか上目づかひ瞶める彼女の樣子は、彼にはすでに致命的な鋭い魅力だつた。

『で、僕をどうしやうと言ふんです。』と、彼は彼女の瞳をはつきり見返すだけの勇氣がなくて、微聲で言つてみた。どこからでもこの女とは妥協してしまひやすい自分のにと、自分の心の動きにすでにたかをくゝつてゐた彼であつた。

『どうされやうと思つていらつしたの。』と、彼女は實にさりげなく受けた。

『あなたはどんなことにでも平氣になれるひとだ。あなたの良心は實にさばけた自由自在な良心だ。』と、見當ちがひかも知れないと思ひ乍ら、彼は一氣に言つてみた。『あなたはどんな時にでも平氣で冷たい皮肉を言ふ。あなたの皮肉が今日僕をこゝへ呼んだのだ。』

『あなたの皮肉が今日あなたをこゝへ連れて來たのですわ。』と、彼女はすらすらと口をきいた。

『あなたは怒りをご存じない。侮辱された男の怒りをご存じない。』

『誰の怒りですの。あたしに誰が肚を立てゝゐるの。稻津のことを言つてらつしやるの。』と、彼女はその兩手を胸のあたり輕く組んだ。

『誰のことだと思つて聽いてゐるのです。』

『まあ、早速喧嘩でもないわ。』と、彼女は右手を髮にさりげなくあてた。『外へ出ないこと?』

二三歩先に立つて、彼女は動いた。

『あなたはあたしが信じられないのでしよ。』と、彼女は一歩立ち停つて、彼はふり返つて見せた。

『男は唯まつすぐにしかゆかうとしませんが、女は氣儘にどちらへでも動けるものなんですね。』

『えゝ、まあ、どうでも。』と、彼女は言つた。『あたしにもおはなししたいことがありますわ。』

彼女は彼にタクシイをすゝめた。

『さあ、——一旦の破極をどうしやうとなさるんです。』と、彼は當然躊躇した。『今更ら僕は强くも弱くもなりたくありません。このまゝ默つて、今日は無事にお別れしようぢやありませんか。』

『いゝえ。』と、きつぱり頭をふり、『ではどうしてこゝへいらつしたの。』と、彼女は微笑つてそのまゝ車にはいつた。『さあどうぞ、ねえ。』

運轉手は彼の顏にじいつと見入つた。

彼は彼女についてはいらなければならなかつた。

車が走り出すと、彼女はそれが當然だといふ風に、さもさりげなく、右の手を彼の膝の上へあづけた。彼はそのうす絹に包まれた温かい感情の動物を、未婚者が汚れたむつきを持たされたやうな氣持で、と言ふよりは、ほんとうはさう思ふ位でなければならないんだと考へ乍ら、決してさうではなく深い注意をもつて、ごくひかへめに、自分の掌のうちにうけた。彼女はその手をそのまゝに動かして、彼の手袋をとつてゐた指に激しく唇をつけた。

『少々お痩せになつたやうですね。』と、彼はじつと指先に熱をこめ乍ら、言つた。

『えゝ。心配ごとがつゞくのよ。』と、彼女は唯輕く笑つてみせた。

今日は默つて彼女に動かされる通りになつてゐやうとすでに肚を決めて、初めて、彼は自分の今の位置にいくらかの落ちつきを見つけ得た氣がし初めたのであつた。彼女は艶やかな笑ひのうちに、何かかう、そはそはしい冷たさを見たやうな氣持になつて、彼もそのまゝ默つてしまつたのであつた。

カアテンの外はすでに夜であつた。

2

夕食後、しじうを彼女と二人きりで、彼女の動く通りにしか動いてゆくことが能きなかつた謙三は、今、賢く彼女に送られて、時間はきつちり間にあつて、終列車でもつて、京都の自家へ歸らうといふのであつた。表面ではまあなんらの波動をも見ず、見せずに、別れて來たのではあつたが、おそいからこゝでと、あの改札口からそのまゝ素早く別れていつた彼女の姿が、今の今となつては、彼の胸深くに燃きつくやうな惱ましさを殘して去つたのが、實に靜々わかつてくるのである。三度四度、これまでに茨のある強い言葉をはいてみて自らきまづくなつて見せて、突き離されたやうな遠くに自分の姿を見るのであつたが、たつた一枚のはがきや三分間の電話でもつて、彼はまたもや無雜作に、彼女のま近くへまで、ひきづりよせられる自分を感じないではをれないのであつた

彼はあき子を——彼女の名はあき子といつた——愛するよりは嫌つてゐた。嫌らつてゐるといふと言ひすぎにはなるのであるが、無條件で愛してゐるといふことも一寸能きにくい氣持であつた。嫌ひでは勿論ないのであるが、能きるだけ意識して嫌ひたいといふつもりであつた。能きるだけ避けてゐた方が安全だといふ氣持のあつたのもほんとうであつた。で、ともかくも、嫌やになつた方がいゝといふ意見なのであつたが、それから、またの氣持でもつて、やつぱり自分は彼女を愛してゐるんだと思ひたいこともあるのだつた。どうあつても、さう思はないでは承知の能きないときがわりにたびたびあるのだつた。もともと、彼に血のつゞいた叔父である稻津を、なぜともなく好かないでゐた。強ゐてつきつめて嫌つてゐるといふのではなかつたかも知れぬが、その氣持は、強ゐて惡んでゐるといふのではないといふ氣持の裏の氣持にすぎ

ないのだつた。その態度から容貌に、どこといつてとりたてゝ批難したい程のものもなかつたし、相當名のある實業家としては品位もあり教養も低くはなく、相當おしのきく男だつたのであるが、謙三はなぜともなく彼を好きになれないのだつた。この感じは、數年前に彼がこの若いあき子を後妻に娶つた時からもつとつきつめて言へば、その新しい叔母が謙三の豫想以上にも美しい女であることを見たその瞬間から、一層彼には決定的なものとなつた風があつた。金と勢力とでもつてこの新妻を手に入れたといふ樣子の見える叔父は、彼には唾棄すべき一個の俗物であるにすぎなかつた。叔父の年ではあき子が可哀さうだといふ感じが、その底をながれてゐたのは否めなかつた。この同じ瞬間、彼は實に無雜作にも、あき子を戀してしまつたのである。一方この若い叔母にとつても、自分が新しく郁世の母となつたといふ事實によりも、謙三の若い叔母となつたといふことに、より強い興味を感じたであらうといふことは、寧ろ當然と言つていゝ位なのであつた郁世が謙三とはすでに許婚者だつたといふことは、この若い叔母の謙三への興味を無雜作に強めた。二人がゆくところまでいつてしまつたとしても、それは極めてありふれたなりゆきだと思はないではあられないのだつた。

それから以後の謙三は、追々あき子を嫌ふやうな風を見せ初めた。彼は彼女を愛することに依つて、彼女を嫌ふことをおぼえた。彼は努めて彼女を嫌つて見せなければならぬ自分を感じてゐた。彼女をなるたけ避けてゐたいといふ氣持で始終を送らなければならない弱さを感じ初めて來たのであつた實を言へば、自分はあき子を嫌つてゐるんぢやなくて、叔父を嫌つてゐるんだといふ結論におちてゆかなければならないのだつたが、この結論は、叔父が嫌やだから、あき子が嫌やにならなければならないといふことになるのだつた。

自分が卑怯だからだと彼は自分を一應は冷嘲してみて、さて、やつぱり、これ以上のあき子との交渉を、片方の心ではその反對を希つてゐたに關はらず、避けたいと考へないではをれないのであつた。

彼は何よりも先づ叔父との衝突を怖れてゐた。怖はがるといふよりも、あの、唯でさへ不快な、どことなく好意の有てない叔父と、かうした嶮しい、冷たい、將來の永い憂鬱をおもはせるやうな關係に落ちてゆくことを考へるだけても充分不快なのだつた。それかといつて、彼はその叔父とのより密接な、よい意味での交涉をも、希ひたいとは思つてゐなかつた。あの叔父を郁世との結婚に依つて父と呼ばなければならないだらうことは、彼には耐えられない苦痛であり、侮辱であるにすぎなかつた。で彼はどうでも郁世と結婚しなければならないのなら、その結婚後を、少時は勉强したいといふ口實でもつて、叔父のそばを遠く離れたいと思め初めてゐた。叔父の好みで、その實謙三自らにはちつとも有難くはないアメリカへ、彼は實業視察といふ漠然なる目的でゆくことにまで、彼は叔父を說き伏せてゐた。その實は、見て來るだけでも損ではないといふ理由で、彼はあちこちを氣儘に數年間を歩いて來たいと希つてゐたのであつた。唯連れてあるくにしてはそんなに自慢にもなりさうではない、極くありふれた容貌郁世のことが、いくらかは氣にかゝつてはゐたが、どちらにしたつて、これくらいのことはしんぼうしてゐる方が彼に

はいゝことだつたに違ひないのだつた。

が、このいかにも賢い計畫は、あき子との豫期しなかつた情愛の縺れが、もうどうにも解けさうではなくなつた頃から唯これといふ理由もなしに、ぐらぐら崩れてしまつたのだつた。あき子の氣まぐれが、すでに彼を自由にしなくなつてゐた。加へて、彼自らの自信のない氣まぐれが、彼女の氣まぐれを一層はしいまゝにさせた傾きがあつた。

彼は最近では郁世との結婚を寧ろこのまゝよしてしまはうといふ氣持になつてゐた。愛してゐないといふのでは決してない、誰もが若い時代には一番手近かの異性に先づある心の動きを感ずるものだといふ通例に從つて、彼もあるひとゝきは實に『熱烈』に、『運命の與へた處女』郁世を、愛撫し、崇拜さへしたのであつたが、そして、二人は周圍の圓滿なる同意を得て、所謂婚者同志のあまい關係に入つたのであつたが、すでに多大に戀愛の技巧を知つてゐたあき子の滑らかな媚笑にあつては、その技巧を技巧として一應は輕蔑し乍らも、加へて、輕くはない自嘲をくりかへし乍らも、彼はその彼女の前では、ひとたまりもない田舍者であるにすぎない自分を感じてゐた。ともかくも郁世との結婚を此際さりげなくよしてしまはう、一切はそれからのちのことだ、と彼は苦悶した。郁世との結婚は、言ふまでもなく、叔父との交渉を一入親しくすることだつた。このことは、同時に、あき子との關係を一層公然と深め、強め、解け難くするものだつた。叔父との衝突はすでに目前に見えてゐた。あき子は實に惡むべき愛人だつた。

『僕はあなたを好いてはゐないんですから。』と、實に思ひきつて、あき子の前に彼が言つたのは、つい先日のことだつた

『にゝ、よろしいとも。』と、あき子は極めて平氣な顏でもつて言つてのけた。『——だけど、あなたはなるたけ早く、郁世と結婚なさいな。』

『あなたとは、僕は結婚は能きないんですよ。』と、彼は言つてしまはなければならなかつた。

『えゝ、えゝ。』と、彼女は唇を歪めてぴつたり言ひきつて見せた。『だから——あたしを離婚させるやうなことはしてはなりませんよ。』

あなたとの關係を稻津はすでにうすうす感づいていてゐるといふのが、今のところ、彼女のとつてをきの有力な武器だつた。だから、何の關係もなかつたといふ風に事件をすなほにしてをくためには、郁世と一日も早く結婚する方がいゝといふのだつた。たとへ護れない秘密をでも、ゆけるところまではともかくも護つてゆかうといふのが彼女の肚だつた。能きるなら今のうちに一切を兩斷したいとあせつてゐるのが彼だつた。郁世と結婚することは、彼には、あき子と結婚することゝちつともかはらないのだつた。あき子とこれ以上の交渉を有つてゆくことは、彼にも、實に致命的な大事件にちがひないのだつた。あき子の白い媚笑が彼には今は寧ろいとはしかつた。不氣味だつた。

それからのちの、弱い自分の、今日だつたのだ。と、彼は葉卷の煙の中でやけに頭を振つてみたのである。

3

あき子との否應なしの約束で、ある夜、謙三はその叔父の

宅を訪ねた。

若い叔母はその甥に智恵を貸して、近いうちに叔父にあひ早く郁世との結婚をさせてもらひたいと訪ふがいゝ、この外に自分達の採つていゝ安全な策はないと說いたのである。だが、ほんとうを言へば、よしあき子の要求がどんなであらうとも今夜こそはすつかりを叔父の前に並べてしまつて、郁世との問題もきつぱり破つてしまひたいといふ決心を彼がしなければならなかつたので、すでに、あき子がしびれを切らしてゐる位の時日がたつてたゐのである。

食後の卓子をまだ去らないで、一家族が同じ部室に集つてゐる時だつた。

電氣ストウヴに長々と兩脚をのせかけて、赤新聞の三面に顏をうづめてゐた稻津は、彼の甥が極く眞面目くさつた顏ではいつて來たのを見ると、他の新聞とそれとをもちかえて、さて、そのとりやうに依つては冷たくも見え、また親しくも見えるいつもと同じ笑顏でもつて、彼を迎へた。

あき子は、たとへば林檎のをかれてある時など、いつも稻津のためにとるまへに、先づその甥の前にその一切れを自ら運んでやるといふ偏つた趣味から、この時も、女中に紅茶を新しく二つもつて來させて、一つを謙三の前に、一つを自分の前にひきよせて、温かいうちに召しあがれとすゝめて、先づ一口を自分で飮んで見せた。それから、彼女は稻津のもちかえた赤新聞に默つたまゝで目を伏せてしまつた。自分をちつとも見やうとしないところを見ると、自分の來る前にこゝで何事かゞあつたのかも知れないと彼が氣にかなないではをれない程の、冷たい平然たる樣子を、彼女は見せてゐた。

かへつてかうした樣子が自分にいゝ期會を與へてくれるかも知れないと考へ乍ら、彼はその胸の中にある冷たいものゝ流れてゆくのを感じつゝ、彼女へのいくらかの不滿をぎごちない表情でかくし、早く飮みすぎたあとの手持不沙汰に用心して、ゆるゆると、極めて靜かな手付きでもつて、紅茶を二口三口と口へ運んだ。

『まあ、いやだ、お父うさんて、こんなものが面白いだんから。』と、誰にも全くだしぬけに、明るい聲であき子は言つてその赤新聞を謙三の方へ手渡し乍ら、おほびらに晴々と謙三へ笑つて見せた。

『ふ、ふ、ふ。面白いんだから仕方がないやね。』と、稻津はパイプを口から一寸離して部室中の顏を見た。

『面白いつたつて、こんな馬鹿らしい記事に夢中になるなんて、ねえ。』と、彼女は再び謙三の方へ向いて笑顏をつくつた派手な、實に明るい、どこにも陰を見ることの能きない笑ひだつた。

自分でも無意味だつたと思つたうすら笑ひのあとで、謙三はその紙面のどこへともなく目をおとした。

あき子が自分よりはどうあつても數等もしつかりしてゐる人間であるといふこと、あき子の目前では自分は所詮は一個の笑ふべき道化であるにすぎないことが、彼には殘念ではあるが、事實として感じられてくるのだつた。思へば、この叔父にしても、何と他愛もない滑稽な好人物であつたらうか。何も知らないが故に傲然と構えてゐることの能きるこの叔父の通俗さは、何と愛すべきものだつたらうか。かうした悧巧なあき子によつて作られてゐる、これが即ち家庭圓滿の圖で

あるのだと考へると、彼は少なからず、くすぐつたいといふ感じを經驗しないではゐられないのだつた。今となつては、あき子を惡まうといふ氣持すら彼には消えてゐた。あき子の前にゐる限り、たとへあき子がどんなことをしでかさうと、ともかくも幸福であることの能きる叔父ではあると、彼は今更らのやうに叔父といふものをその意識のうちに入れてみたのである。

少々きまづいと思へるやうな時間が少時すぎていつた。謙三はすでに紅茶を飲みほしてしまつた。今日は失敗するかも知れないといふ豫感が彼に來た。

『謙三さん、』と、その白い顏をあげ、『——今夜はなんか變つたおはなしがありさうねえ。』と、あき子はその目で、ちらちらと、謙三の決心をうながし乍ら、とうとう口を切り出した『えゝ。』と、ごくすなほに返辭をして、謙三はあらためて叔父の方に目をやつた。『今夜——實は、一寸、叔父さんにおはなししたいことがありまして、』

『あのことのおはなしなんでしよ。』と、あき子はすきもなく追ひかけて來た。

『あの、私——と、彼はさすがに躊はなければならぬ弱さを感じてゐた。あき子に見られてゐるといふ意識が彼にはどうも憂鬱だつた。

『郁ちやんはお部室に下つてゐた方がよくはないの、ねえ、お父うさん。』と、あき子は郁世の方は見ないで、夫の膝を輕くつつき乍ら『ねえ、お父うさん、眞面目なはなしなのよ。』

『うむ』と、初めての返辭をして、稻津は夕刊を膝の上へをいて、さて、あき子をじつと瞶めた。

『ねえ、ごく眞面目なはなしなのよ。』と、彼女はその夫に明るい笑顏を見せた。

すなほに、郁世は部室を出ていつた。心持淋しい、冷たい表情だつた。

謙三はそれとなく目を伏せて、郁世の後姿も能きたら見るまいとした。何の表情もなく、そのまゝ默つて、靜かにこの部室を下つてゆく彼女の心を思ひやることは、今の謙三にはむしろ砂粒を噛むやうた疼きをおぼえさせるにすぎないのだつた。自分の彼女への態度が決まらないといふよりは、彼女自身が既にいつからにゐきらない燻つた性格だつたのだと、彼は自分を辯解したくなつてゐたのであつた。たとへば、そこに居てもいゝと言はれゝば、いつまでもそこに居るし、あちらへ下つてゐてもいゝと言はれゝばそのまゝ何の奇もなくあちらへゆく女、愛されてゐる間は安んじて愛されてゐるが叛かれたつてそれなりに顏色も變へないでをられる女、かういつた風が彼女にはあつたのだつた。年にも似合はず性格のはつきりしない女だと言はれなければならない女なのだつた小心だといふにはあまり熱情を缺き、無感覺だといふにはあまりに女になりすぎてゐた。女學校へ通つてゐたあの頃から粗末な通學服の外からでもすでに立派な女であることのわかる位のとゝのつた姿はしてゐたが、そして、今はもう言ふまでもなく申し分のないたちゐふるまひを心得てゐたのではあつたが、どうもかう、どことなく手際のよくない、才氣といふものゝ艶やのない女、許婚といふ時代がすでに數年にも渡つてゐたので、ありていに言へば、彼女がすでに彼には魅力がなくなつてゐたのであつたが、彼が彼女がそのまとうてゐ

る美衣をはいでしまへばごく何でもない女であつたこと、彼女にたつた一つの戀愛の技巧もなく機智もないといふこと、好意をもつて考へてやる程美貌ではなかつたといふことを知つてしまつたことは、彼には全く致命的な事件なのだつた。

あき子が悧巧であつたこと、美しかつたことが、みんなの不幸であらうとしてゐたのだつた。

今夜はどうあつてもきつぱり斷つてしまはなければならないんだと、彼はあらためて自分の立場をはつきりと意識してみた。

あき子の目を見ることが、だいぶ苦しくなつて來たのを感じた。

『で、——謙三さんは、實際のところ、どういふ希望なの、今夜こそ遠慮しないで、はつきりと叔父さんに言つてみるといゝは。』と、あき子は自分の椅子を動かして、稻津と並んだ位置に腰を下ろして、さて、今更らしく謙三の方へ向いた叔父とあき子との顏が並んで正面に見えるといふことは、謙三にはずゐぶんの苦手だつた。

『實は、私 ——ずつと以前から叔父さんには——』と、さて、この先きをどう言つたものかと、彼は一寸下を向いて、きちんと膝の上にをかれた自分の兩手を見た。こんな、ゆうづうのきかない恰好が、あき子を恣につけ込ませるんだと、彼は自分を嘲つてみた。

『えゝ、えゝ。ずつと以前からあたし、聞いてゐたんですけれど、あたし、面白がつていゝ加減な返辭をしてばかりゐたんです。』と、あき子はすでにしやべつてゐた。どうもかう、平氣な明るい笑顏だつた。『——ねえ、あなた、二人ともう充分用意は能きたんですから、なんにもわざわざこの秋を待たなくとも、來月にでも來々月にでも、早く、謙三さんたちの結婚式をすませてあげてはいかゞ?郁ちやんはいかにも素知らぬ顏で默つてゐますけれど、その日を待ちあぐんでゐるのはあたしにはよくわかつてゐるし、心の準備だつてもうとつくに能きてるんだし、ねえ、こんなことは早い方がいゝことはないの?』

『ほうほ、そんなに急ぎたいのかね。』と、稻津はさすがに顏中で笑つて、あき子をまぢまぢと見入つた。

なんだ、この馬鹿野郎が!——と、謙三は叔父の笑顏を非常な絶望をもつて眺めた。

『ね、來月早々よ。あたしからきつとお希ひしてよ。』と、あき子はすかさず追つかけた。

『うむ。』——と、うなづいて見せて、『ちや、さういふことにしてもいゝね。』と、この有名なる實業家は實に簡單な取引をしてしまつた。

『では、こゝへ郁ちやんを呼んでやりませうねえ。』と、あき子はすでにその場で腰を浮かせた。

『うむ。——まあ、お前たちでよく相談しとくんだね。』と、稻津は今はその甥の顏をまともに瞶めて、親しく、おだやかにうなづいて見せたのだつた。

『何分、よろしくお希ひ致します。』と、謙三はともかくも頭を下げなければならないことになつた。

ふいに、自分の顏一面へ制へがたい羞恥が激しく突きあげて來るのを彼は感じた。

『では、いつそのこと、郁ちやんの部屋へゆきませうか。』と先きに立つたあき子について、彼はその叔父の前を周章して逃れ去つたのだつた。

郁世の部室へは一寸した廊下を傳つて行くのだつた。

ふと、

『馬鹿が!馬鹿が!』と、ほんに誰にともなく、謙三の口から輕い惡罵の聲がもれた。

と、この時、

一歩先きに立つてゐたあき子が、スヰツチをひねりさま、こちらを向いて、明るい灯の下で、

『馬鹿はお互ひさまですよ。』と、心持ぎやうさんに口をあけお、ほ、ほつ、と、笑つてみせたのであつた。



俳壇

溪舟選

門松

大凧をかついで出るや松の門　古樹路
松立てゝ獨り酌みゐる主じ哉　同
門松に近く晴れたる生駒哉　同
門松や終日吹いて黄昏るゝ　青烏
烏雀も噂づりあきぬ松三日　同
門松に暗くかげるや霙雲　同
門松や初機鳴す屋敷町　佳吉
門松や棕櫚に風ある塀の内　同
樽篝大門松を立てゝゐる　同
松の門をくゞれば大爐燃てあり　朱廊
鍛錠に藏の要や松飾り　同
門松や奥深々と淨め砂　月雨
門松に雪やみて寂し裏通り　同
門松の影雪にある月明り　一梧
日ざし初めて霜なほ白し松飾り　同
門松にさはる朱總や風の幕　智美子
門松の片々に日の斜めなり　同
兵營や大雪の中の松飾り　眉山
門松にいま日ざしたる門を掃く　同
自動車の轍白沙に松飾り　朧月
塀の内に凧あげてゐるや松飾り　同
松立つる手傳や明日を約しけり　菜辻
水打て日寒く掃くや松飾り　同
松立てゝ日に新たなる三日哉　曠村
喬居
切戸口松釘つけて此處に住む　同
門松をとる日や少し東風　夢角
そぎ竹のそぎ口白し松飾り　千靈

霰

芽牡丹に北構へする霰哉　八洲
霰折々風立つ露路の笹の葉に　同
陶釜も焚かで久しき霰哉　同
毛せんに霞して寒き茶店哉　同
柏井の青竹蓋や玉あられ　未乾子
山茶花に霰のあとの小雨哉　同
枯芝に疎き日影や霰ふる　同
窓あけてある鑄物場の霞哉　同
霰たまる金魚生洲の蓋の上　飛白
掃き砂に消えである朝の霰かな　同
冬鉢木出窓日疎き霰かな　同
洗ひあげて障子日に乾す霰かな　春風
ごみ屑をもやす空地の霰かな　同
玉霰彌宜が垣根の寒椿　同
嶺々晴れて又一トしきり霰哉　朱廊
牛蒡握る土の黒さに霰かな　同
霰ふるも漕急がざる渡舟哉　同
ちぎれ雲星見ゑて宵の霰哉　月雨
水にふる霰林のまゝかな　同
湯歸りの傘うつ夜の霰かな　同
霰白く落葉と溜る祠哉　菜辻
霰ふるや子等囃しゆく垣の外　同
晝霰障子の外の實南天　同
供待に人ゐて更くる霰かな　千靈
吹つけて油障子にあられ哉　同
雞小舍のトタンを鳴す霰哉　智美子
窓あけて霰急なる欄子哉　同
風雲や月ありながら霰ふる　朧月
霰ふるや竹の葉音を寢やにきく　同
エプロンに溜れと子等は霰哉　曠村
振り釣瓶霰たまりてありにけり　同
思寢の更けたる窓に霰かな　眉山
消燈ラッパ霰又々降り續く　同

前號句訂正

山の中に湛へて寒き一湖かな　古樹路
道問ふに答へぬ袖や山寒し　紅春
物縫ふに灯影手にある寒さ哉　朧月
人とゐて話とぎるゝ寒さかな　湖北
大衆や灯こつられて雜煮膳　朧月

投句を歡迎す

◉課題　『足袋』『春風』各五句まで、用紙隨意三月號の本誌に發表す
◉期日　二月二十日
◉屆先　大阪市堂ビル三階日本建築協會

俳話

再び讀者たちに

溪舟

問「前號誌上でのお勸めによつて、私は試みに數句投じてみましたが、本號に發表されたところでみますと成程加筆されて佳くなつた句であるやうですが、その代りトンと解し難い句になつてゐるのもあるやうですどうか譯を云つてみて下さいませんか」

答「なる程御尤な質問だと思ひますから、二三試みて見ませう。まづ「門松」から始めます（原句は原、訂正句は訂とします）

原　門松の奥の深さよ星明り　　月雨

訂　門松や奥深々と淨め砂

星明りで門松の奥は明らかに見えかねませう、俳句は詩でありますけれど、我々の生活や環境をハツキリ表現させるやうでないと力が弱いやうです、つとめてロマンチツクな云ひ現し方を避けたいと思ひます。

原　門松や夜雪に落す影法師　　一梧

訂　門松の影雪にある月明り

原句の影法師は、何によつて寫し出されたか不明であります、殊に夜雪といふ語は不熟です、夜降つてゐる雪を夜雪と云ふ場合はありますが……

原　門松に垂れかゝりたる幕のふさ　　智美子

訂　門松にさはる朱總や風の幕

原句の場合は面白い一種の見つけ處ですが、松にさはる方が働きが見えていいでせう。

原　風一つ高くかゝれる門の松飾　　臘月

訂　塀の内に風あげてゐるや松飾り

この訂正句は少々無理をしてゐるやうですが、門松に風が引かゝつたといふ句は餘りに先人に云古されてありますので、寧ろ門松を離れて訂正してみたのです、門の松といふ語も苦しいと思ひます。

原　松立つや明日を約して歸り來ぬ　　栞辻

訂　松立つる手傳ひや明日を約しけり

原句では「あす來て酒でも飲まう」と約したのか何うか不明であるから、門松を立てる手傳ひを約したと訂正した、かうした方が意味だけはハツキリとします。

原　此家にも來る歳訪ふか松飾る　　曠村

訂　切戸口松釘つけて此處に住む

原句では「こんな家だが新年はヤハリ訪うてくるはい」といふ意味であるけれど、云現し方が幼稚であるを免れません、切戸口のやうな處を出入りして住んでゐるものは、極めて細い生活者であるけれど、「此處に住んでゐるんだぞ」と自ら恃む心のあるのは頼もしい事である、松を釘で打つけて幽かに住んでゐるが、その住んでゐるといふ心の自我がレツキとしてゐるのが此句の生命でなければなりません。

原　門松のとれて正月もすみにけり　　夢角

訂　門松をとる日や少し東風

門松がとれると正月がすむ……と云つた丈けでは、それはソレ切りの話であつて詩ではありません、少くとも情趣がありません、とる日と云へば正月氣分から離れる日で、その上少しばかり東風が吹いてゐた、と斯う云へばソコに聊か趣きが出てきます。

原　そぎ竹と梅や松葉の園かな　　千靈

訂　そぎ竹のそぎ口白し松飾り

松竹梅を揃へて門松を詠む必要もないでせう、門松の中で竹のソギ口が白く目に立つのは新しい氣分でせう

原　霰さつと湖畔の林しゞまなる　　月雨

訂　水に降る霰林のしゞま哉

霰さつと云へば、餘りしゞまでもないやうである、水にふる霰は無論音のないもので、林さへもしゞまであると訂正した。

原　急霰や手の赤き子等嬉々として　　栞辻

訂　霰ふるや子等離しゆく垣の外

子供らが手を赤くして、といふのはよいが、手の赤い子どもらといふのは變でせう

原　霰ちる供待人の股火かな　　千靈

訂　供待に人ゐて更る霰哉

「供待人」も變な呼方です供待つ人といふと、霰が人にちつてゐるのか、股火にちつてゐるのか、多分人にちつてゐると思はれますが、供待人に霰がちるとは幼稚な云方で、舞臺の上の人に雪がちるやうな情景で少々拵へ事になります「供待に人ゐて」は供待所に人がある事です。

原　霰きて雞のさまやの騒しき　　智美子

訂　雞小舍のトタンを鳴す霰哉

「とまや」は苫屋で、船の霰屋根の事です、雞は「とや」で雞舍と書きます、霰かふつてきても、實際は雞などはさう騒ぐものではありません。

原　つれなくも竹の葉を打つ霰哉　　臘月

原　寢覺めけり木の葉騒げる初霰

訂　霰ふるや竹の葉音を寢屋にきく

原句二句を合併して訂正しました、竹の葉は健全なもので、霰位ゐ降つても「つれない」などの實感はないでせう、言葉の上の巧緻は餘り實感をひきません、霰で木の葉が騒いで寢ざめるものが何うか知りませんが、これも事實には遠いやうです、それから此場合「初霰」である必要も餘り認められません、れてゐて、竹にふる霰をきいた、位ゐでいいでせう。

原　エプロンをかざす手いとし霰降る　　曠村

訂　エプロンに溜れと子らは霰哉

エプロンは翳すのでなくて、擴げるのでせう、寧ろ、エプロンをひろげて子らは霰哉でせう眉山君のは原句を失ひましたので遺憾ながら許ができません、評外の人達は練達の句士だと認めますので省きます。

毎月三四種類づゝ位差更えます

主要 建築材料値段紹介

◎塗料

日本ペイント製造株式會社
大阪營業所

品名	客量	定價
ジンクペイントA印	一二瓩半	九、九〇〇
白鉛ペイント	同	一〇、一五〇
同	同	八、三五〇
光明丹	同	一四、〇五〇
ボイル油	同	一六瓩
同	一哦	六、〇五〇
コーパルワニス	同	六、〇五〇
ゴールドサイス	建築用特種塗料	
調合ペイント白色上塗		六〇磅 三五、〇〇〇
同 上白色下塗	同	一六、〇〇〇
上各色	同時々引合	
光澤塗料(プライド)	一〇磅	四、二〇〇
水性、壁塗料(メロニア)	四〇磅	七、一〇〇
亞鉛板用トタンペイント	三〇瓩	二六、五〇〇
暖房塗料	一立	三、五〇〇
スパーワニス(耐水性)	一哦	六、〇五〇
金屬磨(コウミヨー)	大罐	三五〇
コンクリートペイント	三〇瓩	三、〇〇〇
パテ	七〇磅	四、九五〇

大東塗料株式會社
大阪營業所

品名	客量	定價
グラフアイト ペイント各色	五〇ポンド入	二四、〇〇〇
セクロン		
乙種黒色	五〇ポンド入	七、〇〇〇
特製黒色	同	一八、〇〇〇
ネヅネ色	同	三三、〇〇〇
銅及赤色	同	三〇、〇〇〇
木管用黒色	同	五五、〇〇〇

オ二水性ペイント 五〇ポンド入 二二、〇〇〇
各色共
大阪及東京渡値段

田中源太郎商店

性質	品名	種類	容器	單價
水性、壁、塗料	アラバスチン	白	五封度入	三、〇〇
同		各色	同	三、五〇
同		同	同	四〇ヨリ
性質	品名	種類	容器	單價
艶消ペンキ	サテン艶消ペンキ	各色	一ガロン入	一、五〇〇
性質	品名	種類	容器	單價
ジンクペンワンダー用	ホワイト	白	一ガロン入	一五、〇〇
代		外部用	一ガロン入	一〇、八〇
同	エナメル代用	紅葉印コーパルバニシ	一ガロン入	六、五五
同	ワンダーホワイト	艶消白	一ガロン入	一〇、八
同	同	同	二分ノ一ガロン入	五、七五
同	同	同	同	二、二〇
同	同	同	一ガロン入	五、八五

コンクリート塗料 コンクレライト 各色 五ガロン入 四九、八〇
一ガロン入 一三、〇〇〇

大阪及東京渡値段 シユ會社製品

性質	品名	種類	電略	容器	單價
滲透性本質着色料	オイルステイン	各色	カロン	一ガロン入	五、〇〇
同	マガホオニー色	マホガオニー色	マ	一ガラン入	一六、〇〇
同	各色オイル	各色	オ	一/四ガロン入	四、四〇
同	マホガニー色	マホガオニー色	ホ	一/四ガロン入	四、九〇
塗替用色ニス	フユデラルバニシステイン	各色	フ	一/一六カロン入	三、一〇
油ネリ目止	フエデラルウツド	各色	フ	一封度入	一、八
中塗色ニス	フイラー	色	ウ	一/四カロン入	二、七〇
	オイルスインコーター	各色	フ	一/四カロン入	二、七〇
各種ワニス					
耐水耐熱ワニス	スパー外部用	フ	一ガロン入		一五、四〇
同	内部用	フ	一ガロン入		一二、一二
家具用艶消	ベルベツトワニス	フ	一ガロン入		三、三〇

近江セールズ株式會社
米國ベンヂヤヨンモーア會社製品
一手販賣近江セールズ株式會社
塗料部

◎水性塗料 ムレスニ
各色五ポンド入一袋 二、一五〇

◎木質着色料 ウツドステイン 各色一ガロン入(二升)ニ付 二、〇〇
◎コンクリート塗料 セメントコーテイング 各色一ガロンニ付 三、〇〇
◎艶消ペンキ サニフラット 各色一ガロンニ付 三、〇〇
◎エナメル 各色一ガロンニ付 一七、〇〇
◎艶出劑 フローアソックス 四封度ニ付 六、〇〇
◎床掃除油 フローアオイル 四分ノ一ガロンニ付 一、四五〇

◎防水劑

□急硬防水劑
ケーテーオー日本工劑株式會社
一罐(二五封度入) 一、五〇〇

日本セメント防水劑製造所

ウオータイト	一〇ポンド入	五、五〇〇	
同	七〇ポンド入	三五、〇〇〇	
クヰツクウオタイト	一〇ポンド入	六、〇〇〇	
同	六〇ポンド入	三〇、〇〇〇	

油脂化工社

マノール	一〇ポンド入	五、一〇〇	
同	四〇ポンド入	二〇、四〇〇	
急結マノール	一〇ポンド入	三、六〇〇	
同	五〇ポンド入	一七、五〇〇	
エキストラ	一ガロン入	四、一〇〇	
エキストラ	四ガロン入	一六、〇〇〇	
既設壁防水塗料	リグアウオータイト	三封度入(十坪塗差分)	七、五〇

◎日の出印便利瓦
日本建築紙工　大阪出張所
半號　巾三尺二寸　附屬品及　一四、五〇〇
長七十二尺　ペイント添
一號　一卷　同　七、五〇〇
二號　一卷　同　三、五〇〇
三號　一卷　同　一、五〇〇
◎鶴印便利瓦
半號　一卷　巾三尺二寸　附屬品及　一三、五〇〇
長七十二尺　ペイント添
一號　同　同　一五、五〇〇
二號　同　同　八、五〇〇
三號　同　同　三、五〇〇
◎日の出印砂付便利瓦
半號　一卷　三尺一寸　附屬品及　八、〇〇〇
長七十二尺　ペイント添
一號　同　同　九、〇〇〇
二號　同　同　三、〇〇〇
三號　同　同　七、〇〇〇
◎日の出印建築用紙　ビルヂングペーパー
一號　一卷　巾三尺二寸　三、〇〇〇
長七十二尺　四、一〇〇
二號　同　同　五、三〇〇
三號　同　同
◎日の出印パーマネントルーフ井ング
一號　巾三尺長三十六尺　三十六
ヲ以テ一卷トス　坪平方尺　七、二〇〇
◎日の出印衛生疊下用紙
一號　一卷　巾三尺二寸　三、二〇〇
長七十二尺　四、四〇〇
二號　同　同
◎日の出印瀝靑（モスパーカール）　一、二五〇
一號　一枚　巾二尺八寸　長三尺二寸

二號　一枚　同　一、三〇〇
三號　同　同　一、五五〇
◎日の出印アスファルトフエルト
一號　一卷　巾三尺二寸　三、二〇〇
長七十二尺　四、一〇〇
二號　同　同　五、三〇〇
三號　同　同
◎スレート
淺野スレート販賣株式會社
◎波形板
一枚單價　一枚單價
長巾　荷造ナシ　荷造共
六尺　二尺二　二尺二　三、二五
七尺　二尺二　二尺二　三、五五
◎大平板
巾　一分五厘　同　二、五〇
長　三尺　二分　同　三、〇〇
六尺　同　同　三、五五
◎同波形附屬品　ゴム座付　一、二五
丸額釘　長三吋　同木挽子釘　同三吋　〇、〇五
◎スレート角板
大サ　白又ハ淡黑　黑　葷　赤　青
一六吋　一、三〇　一、三五　一、二〇　一、二〇
一二吋　一、一〇　一、一五　一、〇〇　一、〇〇
八吋　〇、八五　〇、九〇　〇、七〇　〇、七〇
◎石綿スレート
石綿スレート株式會社大阪支店
淺野スレート販賣株式會社
金剛商會
野澤幸三郎商店
一枚　天白色　十六吋　同　同　同　同　同　〇、三〇
淡黑色　十二吋　同　同　同　同　同　〇、二五
灰黑色　十吋　同　同　同　同　同　〇、二〇
葷色　八吋　同　同　同　同　同　〇、一五
角　同　同　同　同　同　〇、二五
十六吋　同　同　同　同　同　〇、二〇
十二吋　同　同　同　同　同　〇、一六
八吋　同　同　同　同　同　〇、一〇

赤色　十六吋　同　同　同　同　同　〇、二〇
十二吋　同　同　同　同　同　〇、一六
八吋　同　同　同　同　同　〇、一〇
綠色　十六吋　同　同　同　同　同　〇、二〇
十二吋　同　同　同　同　同　〇、一六
八吋　同　同　同　同　同　〇、一〇
◎葺上標準値段
（一號アスファルトフエルト下葺）
（銅鋲、亞鉛鍍鐵釘使用手間賃共）
◎菱形葺（網目葺）十六吋角使用
重ネ　灰白淡黑　黑　葷　赤　綠
二吋半　七、七〇　八、三四　八、五〇　八、九六　一〇、五七
◎同　上　十二吋角使用
二吋半　九、一九　九、七九　九、九六　一〇、八〇　一一、三六
◎一文字葺（十六吋角二ッ切使用）
色　合　葺足五寸五分葺足五寸
灰白、淡黑色　一一、九六　一二、八七
灰　黑　色　一三、七四　一四、〇八
葷　色　一三、〇一　一四、三九
赤　色　一三、八三　一五、二九
綠　色　一六、四五　一八、三三
◎石綿盤葺上標準値段
（一面坪單價）
野澤幸三郎商店
網目葺（菱形）フエルト一號品敷込材料
間賃共
色　合　十六吋　十二吋　八吋
寸　法　角重二角重三　重二　重二
吋半二吋　吋　吋半二吋
灰白色　六、九〇　七、四〇　八、六〇　九、八〇
淡黑色　六、九〇　七、四〇　八、六〇　九、八〇
黑　色　七、三〇　八、一〇　九、三〇　一〇、五五
葷　色　七、三〇　八、一〇　九、三〇　一〇、五五
赤　色　七、三〇　八、一〇　九、三〇　一〇、五五
綠　色　九、二〇　一〇、二〇　一一、六〇　一三、二〇
◎ロッコー瓦葺上標準値段
（阪神間ニテ）

平瓦各號共一尺一寸角葺足九寸
一坪約四十三枚葺、軒先及螻羽棟
伏等道具瓦完備
灰白色、黑色、葷色、赤色共フエルト
敷込
一面坪ニツキ　八、五〇
棟鬚斗二段半圓形伏　一間　三、七〇
同　同　箱歷振伏　同　五、八〇
鬚　斗一段積　同　七、五〇
綠色ハ三割高
◎亞鉛引平鐵板
月星印50（米一）　一、二〇
犬　印30（米一）　一、一〇
三星印30（米一）　一、三〇
太陽印30（米一）　一、三〇
船　印30（米二）　一、九〇
月星錨印30（米二）　一、二〇
山星　印30（米二）　一、二〇
五寸切レ（米板）　〇、一四
ラクダ印50（英一）　一、九〇
地球印30（英一）　一、七〇
首　印30（英二）　一、七〇
#28　一級品　一、四四
#26　一級品　一、二五
#24　一級品　一、一〇
#22　一級品　百斤ニ付　九、〇〇
◎同浪板　同店
#30　六尺　一、九八
#30　七尺　一、一六
#30　八尺　一、一九
各參錢上り
#28　六尺　一、三〇
#28　七尺　一、五〇
#28　八尺　一、七〇
#24　各尺　二、〇〇
#26　百尺　一、八〇
#28　ニ付　一、六〇

日本建築協會々報

第九輯
第二號

日本建築協會々則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス會員タラムト希望スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

第五條　本會ハ其ノ目的ヲ賛成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

特別賛助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラムト欲スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會内ニ於ケル其ノ言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任セサルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其ノ他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

第十條　脫會其ノ他ノ事由ニ依リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其ノ債務ヲ免カルヽコトヲ得ス

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會　頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名

四　理　事　十名（理事長タル理事ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總攬シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其ノ職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但シ會頭副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ每年半數トス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　二　名

二　主　計　二　名

三　編　輯　五　名

四　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トス

書記ハ特別ノ場合ノ外會議ニ參與スルコトヲ得ス

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ニ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トスルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員ノ職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催スコトヲ得

理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其ノ他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但シ緊急事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重量事項ノ講決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十一　理想的建築ノ計畫

十二　其ノ他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出スト雖モ例會ニ出席シ難キ地方在住ノ會員ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ルル會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スヘシ

特別賛助員ハ特別賛助費年額金拾貳圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助費年額金六圓ヲ本會ニ前納スヘシ但シ六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助費其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及每月ノ收支ハ主計其ノ計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及每年ノ收支ハ理事會其ノ決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

會　告

構造計算ニ關シ各種ノ研究問題ヲ提出セラレム事ヲ希望ス

本協會ニ構造計算調査委員會ヲ設置シマシテ一般建築構造強度ニ關スル諸問題ニ付研究調査ヲ致シテ居リマス

日常構造強度計算ニ從事セラル、會員諸君ハ何レモ經驗セラル、處ト思ヒマスガ我國ノ建築物ニ關スル諸法規ハ此ノ點ニ關シテ極メテ一般的ノ標準ヲ規定スルニ止マリ實際上起ル各種部分的ノ問題又ハ特殊ノ事項ニ關シテハ各人ノ解釋ニ俟チ其間各種ノ疑問ヲ生スル場合ガ普通デアリマス

關東關西震災ノ結果ハ吾々ニ構造上殊ニ其強度ノ研究ガ如何ニ吾人ノ生命財產ノ安危ニ係ルノ重大ナルカヲ啓示シ尙何時ノ時代デモデアリマスガ特ニ我國刻下各方面トモ節約ヲ念トセル折柄若必要以上ノコトノ爲ニ財貨ヲ費セバ之レガ直ニ我邦產業上ニモ大ナル影響ヲ及ボスモノナルコトヲ知ルトキ是レガ研究調査ノ極メテ緊要ナルヲ告グル次第デアリマス

委員會デハ各自平素ノ研究ト經驗トニ基ク諸問題ヲ提ヘテ之ガ調査資料トシテ居ラレマスガ限ラレタル人員デハ或ハ問題ノ範圍ガ自ラ局限サレル虞ガアルカモ知レマセンノデ會員諸君ヨリモ何卒諸問題ノ御提示ヲ御願スル次第デアリマス

大正十五年二月

日本建築協會

會員各位

日本建築協會會報

會報

一、役員事務分掌の件

本年度役員の事務分掌は一月十六日理事會に於て左の通決定致しました

理事長　園部文雄氏
主記　和田貞治郎氏
同　小川安一郎氏
主計　澁谷五郎氏
同　須川廉太郎氏
編輯　古塚正治氏
同　光安梶之助氏
同　池田谷久吉氏
同　八木幸次郎氏
同　酒井勇三郎氏

一、關西工業聯合會代表委員交代の件

關西工業聯合會の本協會代表委員は今回左の三氏に依囑交代することに決し承諾を得ました

和田貞治郎氏
澁谷五郎氏
古塚正治氏

一、建築物構造強度計算の標準風壓力に就て建議の件

前月號會報に所載しました右に關する建議を大阪府と同樣京都府兵庫縣如事へ去る一月十八日付を以て建議書を提出致しました。

會合

構造計算調査委員會

△日時　一月九日午後五時——八時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　委員長　增田清
委員　池田宮彦、永澤毅一
酒井勇三郎
△記事
一、本委員會は計算理論の研究に止まらず實際上の方面に於ても研究する必要あるものと認むるを以て先ッ其の第一着手としてセメントに付て試驗成績表及試驗規定等を蒐集することに決し左記の通理事會に提出し承認を經ることに可決す

左記

大正十五年一月九日

構造計算調査委員長　增田清

理事長　松本禹象殿

本委員會に於ては計算理論の研究に止まらず實際上の方面に於ても研究する必要あるものと認むるを以て先づ其の第一着手として我國のポートランド、セメント農商務省規定を高むることを其筋に建議せんことを希望す依て左記事項御承認相成度候也

1、セメント試驗成績表を蒐集すること

(イ)各都市の工業試驗所
(ロ)セメント試驗を行ひ居る會社
(使用者側)、役所等
例へば大林組、竹中工務店
住友合資會社、市役所等
(ハ)各セメント會社
但し以上は舊きものより最近のもの迄

2、各國並我國農商務省規定及各會社のセメント試驗規定を集むること

3、右に要する經費の計上ありたきこと

一、右調査する爲特別委員會を設け池田宮彦、永澤毅一、田邊平學、酒井勇三郎の四氏委員として其任に當ることに決す

一、尙左記事項に付協議決定の上散會したり

1、委員本多二郎氏東京へ轉住に付補缺員を理事會に要求すること

2、各種研究問題を提示されんことを會員に告ぐる爲雜誌に會告をなすこと

3、集合に付時間勵行をなし時間空費を避くることに努めること

舊理事會

△日時　一月十一日午後四時——六時
△會場　大阪ホテル
△出席者　片岡會頭、宗副會頭、松本理事長、園部理事、吉井理事、澁谷理事、伊藤理事、古塚理事、光安理事、松本儀理事
△議事
一、大正十四年度收支決算に關する件
澁谷主計より報告說明ありて全員承認の上一月例會に報告することに決す
一、大正十五年度收支豫算に關する件
澁谷主計より詳細說明ありて審議をなし二三修正の後承認のことに決し新理事會に引繼ぐことゝなる
一、大正十四年度事業報告に關する件
園部主記より朗讀且說明ありて承認のことに決す
一、尙左記の諸件に付協議決定せり
1、構造計算調査委員會よりの要求事項に關する件
2、構造計算調査委員會委員補缺指名の件
3、日本建築士會關西支部の家賃に關する件
4、雜誌寄贈に關する件
5、會員銓衡
一、右理事會を了り松本理事長招待晩餐會に臨み散會したり

新舊理事會

△日時　一月十六日午後五時——九時三十分

△會　場　灘萬食堂

△出席者　副會頭　宗　兵藏

留任理事　園部文雄、和田貞治郎、澁谷五郎、古塚正治、光安梶之助

新任理事　池田谷久吉、小川安一郎、八木幸次郎、酒井勇三郎、須川廉太郎

退任理事　松本禹象、伊藤正文、吉井長七、松本儀八

△議　事

一、役員分掌に關する件

定刻宗副會頭は片岡會頭缺席に付會頭代理となり新理事會を開き先づ役員分掌を決定することとし理事長の互選に入り左の通決定す

理事長　園部　文雄氏

次で理事の分掌を互選により左の通決定す

主　記　和田貞治郎氏
同　小川安一郎氏
主　計　澁谷　五郎氏
同　須川廉太郎氏
編　輯　古塚　正治氏
同　光安梶之助氏
同　池田谷久吉氏
同　八木幸次郎氏
同　酒井勇三郎氏

一、事務引繼に關する件

松本舊理事長より前年行ひし重要事業及繼續事業、將來の希望、所感其他に付て述べられ次いで園部主記より昨年度の事業報告澁谷主計より大正十五年度の收支豫算に付大體の報告說明、伊藤編輯より雜誌編輯及經費に關する件に付報告あり

是に於て宗副會頭より感謝並將來の希望を述べ事務の引繼を了す

一、尙新理事會に於て左の諸件を議決す

1、一月例會に關する件
2、普通贊助費改正に關する件
3、關西工業聯合會代表委員交代の件
4、會計事務囑託員に關する件
5、會員詮衡

新入會員及贊助員

會員の部

松岡　織江君　大阪市西區京町堀四ノ三
奥村　安吉君　大阪府下吹田町濱ノ堂一、二一四
馬場　艮三君　兵庫縣武庫郡芦屋八田八六七
堀本　兵一君　大阪市港區八幡屋町七
鹽川　鐵藏君　大阪市港區九條南通二ノ一六七
渡邊　綱雄君　堺市遠里小野一〇四五

普通贊助員の部

高田　太郎君　東京府下大森入新井町新井宿一、一二一
小宮山倭亮君　東京府下南品川淺間臺一四六九
古市辨之助君　大阪市東區玉造黑門町一九一
木谷喜太郎君　尼ヶ崎市東難波村市營住宅
宮野　寬君　兵庫縣川邊郡小田村中長洲新町通り
鹽谷　兵吾君　尼ヶ崎市舊城內東三ノ丸クラブ內
川上　賢三君　兵庫縣川邊郡園田村上坂部二八九
小川　正德君　大阪市住吉區南田邊町一八二
有地　佶君　旭川市五條通九丁目酒井組

退會會員及贊助員

會員の部

矢野　義夫君　地方會員の部

弓削鹿治郎君　白石藤四郎君

普通贊助員の部

森藤福次郎君、藤重土希雄君、加藤與之吉君、津村秀吉君、平井貞吾君

住所及勸務先移動

會員の部

船本　晉君　京都府紀伊郡深草町西出六一
橋本　舜介君　奈良縣吉野郡吉野山
中村　義雄君　大阪市天王寺區上本町九ノ四九
中西　十一君　長崎市坂本町四六大林組長崎出張所
荒川　義夫君　京鄕市淸水五條新通五號
田中　光治君　大阪市北區澤上江町四ノ三五田中方

普通贊助員の部

奈良縣吉野郡吉野山
大阪市天王寺區上本町九ノ四九
長崎市坂本町四六大林組長崎出張所
京鄕市淸水五條新通五號
大阪市北區澤上江町四ノ三五田中方
大阪市北區堂島濱通三丁目大阪中央電話局建築場淸水組出張所內
右同
京都市上京區鹿ヶ谷法然院町四九ノ五
德島縣勝浦郡小松島町中田
大阪市西區京町堀上通三ノ二一

地方會員の部

北川　正彌君　東京市外東大久保二六二
岩佐彌太郎君　東京市外中澁谷四一九高島方
原田　俊雄君　東京市外代々木初臺六八
中根　龜一君　山口縣玖珂郡麻里布付今津帝國人造絹糸株式會社工場建築場大林組岩國出張所
堀本　義雄君　東京市區劃整理局工務課
後藤　信勝君　岡山縣都窪郡中州村水江
太田　金造君　森雄方

普通贊助員の部

山口　定夫君　尼崎市舊城內三ノ丸六四
松浦方

城塚　元義君　大阪市北區堂島上一ノ一五

奥田　芳夫君　東京市外中野町雜色小山二〇四

田中　重楠君　京都市千本三條西入トル大竹町三五ノ一出口方

永井　義方君　大阪市泉北郡高石町羽衣外山邸大林組出張所

檜山　三郎君　今治市伊豫鐵今治發電所建築工場藤田組出張所

坂本　武夫君　東京市外高井戸村大宮前五六七

鈴木　只重君　横須賀海軍建築部（宅）横須賀市稻岡町五

吉松　一君　宮崎市宮田町四二九

荒谷　五郎君　靜岡縣濱松市田町遠州銀行建築場清水組出張所

若田　久作君　兵庫縣武庫郡精道村芦屋大桝七九三

赤座　晋君　千葉市市場龜ヶ岡町四〇七鈴木方

○名簿訂正

大正十四年十二月一日發行の會員名簿中左の通訂正す

二七頁三行目

（正）笹岡美代吉

五八頁一一行目

鹿村萬吉　池田建築事務所（電櫻川一、一四四）

住吉區天王寺町二〇三八睦園内

（誤）笹田美代吉

池田建築事務所（電櫻川一、一七四）

住吉區天王寺町二〇二八睦園方

改名

會員　福井裕君（舊名福）

役員及職員

會頭　片岡安

副會頭　宗兵藏

理事長理事園部文雄

主記理事　和田貞治郎

同　理事　小川安一郎

主計理事　澁谷五郎

同　理事　須川廉太郎

編輯理事　古塚正治

同　理事　光安梶之助

同　理事　池田谷久吉

同　理事　八木幸次郎

同　理事　酒井勇三郎

編輯係　江村郊邨　鷹田夏治郎

庶務係　西谷節　取揚

會計係　大和榮衛　山口スエ

會員	三九一	會員（地方）	一七七
名譽賛助員	七〇	終身賛助員	五四
特別賛助員	二七	普通賛助員	五一二
合計（一月二十日現在）			一二三一

本誌定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

（毎月壹回一日發行）

大正十五年一月三十日印刷
大正十五年二月一日發行

大阪市東淀川區中津町一九八番地
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町二丁目卅一番地
兼印刷人 大阪活版所

印刷所 大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング 日本建築協會
發行所 電話北四二九一番 振替口座大阪三九九七五

特約販賣店 大阪市西區京町堀羽子板橋北 柳々堂書店 電話（土佐堀二四四〇番） 振替口座二八四番

●第九集　第二号　掲載広告一覧（掲載順）

飾磨化学工業
大野正営業所
日本エレベーター製造
特許エレベーター製造
浅野スレート販売
永柳商店
東洋コルク工業
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
石綿スレート大阪支店
大阪ビトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下商店
丸三セメント工業所
田村商会
玲光社
日本アスベスト
東亜鉄工所
大平工業所
油脂化工社

日本ホロタイル
KENSEISHOKAI
奥村重兵衛商店
原田商会
日本セメント防水剤製造所
野沢幸三郎商店
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
大坪電気工業所
浅海商店
桐田商会
山中商会
阿部鉄工所
長田商店
日本工剤
大阪石綿工業
日本建築紙工
島田硝子製造所
日本ペイント会社
穴原商会大阪支店
中村グラニット商会

三菱造船神戸造船所
シーベル・ヘグナー商会
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
伊奈製陶
三井物産
小野田セメント製造
HANNKEN SEISAKUSYO
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
大阪建築相談所
池田建築事務所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所

国枝工務所
野村、橋本建築事務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組

藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店
常盤貿易商会
高島屋呉服店
東洋建材工業所
日米建築資料社
河村青写真調製所
デゥエット商会
萩原煖房工務所
東洋リノリューム
田中源太郎商店
建築金物商会